

富田西原遺跡

富田西原遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一〇

国土交通省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2010

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

富田西原遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上武道路は、東京～前橋の都市間連結道路として国道17号の渋滞解消と、地域の活性化を図るために計画された全長40.5kmの大規模バイパスです。埼玉県深谷バイパスの上武インターチェンジを起点として、群馬県前橋市田口町の現道に接続します。

昭和50年度より工事に着手し、平成元年3月には前橋市今井町の国道50号までが供用され、次いで平成17年3月前橋市富田町県道前橋今井線まで、さらに平成20年6月には前橋市上泉町の県道前橋大間々桐生線まで、順次開通しています。交通の混雑緩和に寄与するとともに、地域の重要な生活道路として活用されています。

上武道路が通過する赤城山南麓は、国指定史跡「大室古墳群」「女堀」をはじめとして、本県でも有数の埋蔵文化財が包蔵されています。このため、昭和48年度より道路の建設に先立って、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により埋蔵文化財保護のための発掘調査が行われてまいりました。その成果は、すでに26冊の報告書となって刊行されています。

平成11年度からは、前橋市今井町の国道50号以北、県道前橋大間々桐生線までの間にある17遺跡について発掘調査が行われました。本書は、平成11年9月より平成12年10月の間、2度にわたって行われた富田西原遺跡の調査報告書です。旧石器時代から近世に至る複合遺跡で、竪穴住居跡24軒をはじめとした多数の遺構が検出されています。弥生時代の集落は、数が少ないこの地域では貴重な一例となり、古墳時代への変遷を知る手掛かりともなりました。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局（旧建設省関東地方整備局）、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは、多くのご指導ご協力を賜りました。このたび、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が地域の歴史を解明する上で、多くの人に広く活用されることを願い、序とします。

平成22年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄 一

例 言

- 1 本書は、平成11・12年度に行われた一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う富田西原道跡の発掘調査報告書である。旧石器時代の成果は、既に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第418集「上武道路・旧石器時代道跡群（1）」（2008）として別途に報告している。
- 2 富田西原（とみだ にしはら）道跡は、群馬県前橋市富田町1316-1、1317-1～4、1318-1～3、1319-1～3、1320-1～4・6・7、1334-4、1335-1・2、1336-1・3・4、1341-1～3、1343-1～3、1344、1345-1～3、1348、1350-1～3、1353-1・2、1413、1416-1・2、1456番地に所在する。道跡名は、大字の「富田」と道跡が広がる小字「西原」によって付けた。調査対象面積は、18,245.6㎡である。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所（調査当時、建設省関東地方建設局高崎工事事務所）
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成11年度 平成11年9月1日～同12年3月31日
平成12年度 平成12年9月1日～同12年10月31日
- 6 調査組織 管理・指導 小野寺三郎、吉田 豊、住谷永市、神保信史、萩原利通、矢崎俊夫、市 隆之、石島和夫
事務担当 小山友孝、中沢 悟、関 晴彦、大島信夫、植原恒夫、國定 均、笠原秀樹、小山建夫、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡崎伸昌、森下弘美、片岡徳雄、佐藤聖行、阿久津玄洋、田中賢一、栗原幸代、大澤友治、吉田恵子、森本綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佳子、六本本弘子、本間久美子、北原かおり、曾野真子、松下次男、吉田 茂
調査担当 平成11年度 女屋和志雄、安藤剛志、青木さおり
平成12年度 坂口 一、根岸 仁、西原和久
- 7 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成16年4月1日～同17年3月31日 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
平成21年2月1日～同21年3月31日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
平成21年11月1日～同22年2月28日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 9 整理組織 管理・指導 須田栄一、高橋勇夫、木村裕紀、津金澤古茂、相草建史、萩原 勉、佐藤明人、西田健彦、石坂 茂、笠原秀樹
事務担当 大木幹一郎、石井 清、佐崎芳明、國定 均、須田朋子、齊藤恵利子、柳岡良宏 佐藤聖行、今泉大作、栗原幸代、矢島一美、齋藤陽子、田口小百合、高橋次代、今井もと子、内山佳子、若田 誠、本間久美子、北原かおり、曾野真子、武藤秀典
整理担当 平成16年度 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 金子直行、赤塚浩一、大谷 徹、安生泰明、亀田直美
平成20年度 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 鹿川伸男
平成21年度 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 女屋和志雄
- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。
編 集 女屋和志雄 デジタル編集 齊田賢彦
執筆 第4章 ハレオ・ラボ 遺物観察表 金子直行、赤塚浩一、大谷 徹、安生泰明、橋本 淳
上記以外 女屋和志雄
遺構・遺物観察指導、助言 岩崎泰一 橋本 淳
遺構写真 各発掘担当者 遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 那一、小村浩一、津久井桂一、増田政子、多田ひさ子、長岡久幸

- 11 石器・石製品の石材同定は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行った。
- 12 委託関係 (株)古環境研究所：プラントオハール分析、テフラ分析 (第418集既報) 株式会社ハレオ・ラボ：炭化材樹種同定
株式会社横田調査設計：遺構図面作成 技研測量設計株式会社：空撮・全体図作成
- 13 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の諸氏より指導ならびにご助言を得た。記して感謝いたします。
前橋市教育委員会 前原 豊、小島純一、山下歳后、高山 剛、澤口 宏、富田町自治会長 大沢照男、菅谷浩之
- 14 出土遺物と記録資料は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

- 1 挿入中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、日本平面直角座標系 (国家座標) 第1系である。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は、標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 挿入の縮尺は、特に記載のない限り以下の通りである。
遺構 住居跡1/60 竪・カマド・貯蔵穴1/30 土坑1/60 井戸1/100、1/50、1/60 溝1/500、1/200、1/50 祭祀遺構1/400、1/30
水田1/400、1/40 全体図1/500
遺物 1/3 蓋・坏・甕・小皿・鉢・高坏・器台・埴・甕・小型甕・小型台付甕・台付甕・壺・直口壺・甕・浅鉢・深鉢・蒔鉢車・土鐘
1/5 深鉢 1/3 石器類、金属製品 (1/4 磨石 2/3 尖頭器・石錐・石筥 1/2 金属製品・碧玉)
- 4 写真図版の縮尺率は、挿入とは一致しない。
- 5 遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で表した。ただし、全体が想定できない場合は () で現存値。単位はcmである。
- 6 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によった。内外面で違う場合は外面で表し、斑模様の場合は中間色で表現している。
- 7 胎土の細砂は径が1ミリ前後、微砂は径が1ミリ以下である。
- 8 本書では、テフラの呼称として次の略語を使用した。
浅間A軽石 As-A 1783 (天明3) 年 浅間B軽石 As-B 1108 (天仁元) 年 浅間C軽石 As-C、4世紀初葉
- 9 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
第1図 国土交通省関東地方建設局高崎河川国道事務所発行 「一般国道17号上武道路」
第3図 前橋市発行 地形図 1：1万 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第418集「上武道路・旧石器時代編(1)」より転載)
第5・7図 国土地理院発行 地形図 1：5万「前橋」
第6図 群馬県地質図作成委員会「群馬県10万分の1地質図」1999

目 次

序・例言・凡例	
目次・挿図目次	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
1 調査区・グリッドの設定 2 基本土層と遺構確認 3 遺構・遺物の記録 4 調査の経過	
第3節 整理作業の方法	6
1 遺物整理 2 遺構図・遺構写真整理	
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
1 遺跡の位置 2 赤城山麓の地形 3 富田西原遺跡の立地	
第2節 歴史的環境	9
第3章 検出された遺構と遺物	13
第1節 縄文時代	13
1 概要 2 土坑 3 グリッド出土遺物	
第2節 弥生時代	33
1 概要 2 住居跡 3 土坑	
第3節 古墳時代	43
1 概要 2 住居跡 3 土坑 4 井戸	
第4節 平安時代	77
1 概要 2 土坑 3 D区水田 4 井戸 5 祭祀遺構 6 B区水田	
第5節 中世～近世	94
1 概要 2 溝	
第6節 時代不明	101
1 概要 2 住居跡 3 土坑 4 遺構外遺物	
観察表	105
第4章 自然科学分析	119
富田西原遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定	
第5章 調査のまとめ	125
写真図版	
抄録・索引	

插 圖 目 次

第 1 圖	上武道路事業位置圖	1	第 51 圖	14 号住居跡遺構圖	61
第 2 圖	調査区位置圖	2	第 52 圖	15 号住居跡遺構圖 (1)	61
第 3 圖	上武道路と富田西原遺跡	3	第 53 圖	15 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園	62
第 4 圖	基本土層柱状圖	4	第 54 圖	16 号住居跡遺構圖 (1)	62
第 5 圖	遺跡位置圖 (1:50,000)	7	第 55 圖	16 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園 (1)	63
第 6 圖	地質分類圖	8	第 56 圖	16 号住居跡遺構圖 (2)	64
第 7 圖	周辺道路分布圖 (1:50,000)	12	第 57 圖	17 号住居跡遺構圖 (1)	64
第 8 圖	2 号・3 号・4 号・5 号・6 号・ 7 号・8 号・9 号土坑遺構圖	21	第 58 圖	17 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園	65
第 9 圖	10 号・11 号・12 号・13 号・14 号・15 号・ 18 号・19 号・20 号土坑遺構圖	22	第 59 圖	18 号住居跡遺構圖・遺物園 (1)	66
第 10 圖	24 号・31 号・32 号・35 号・36 号土坑遺構圖・ 35 号土坑遺構圖	23	第 60 圖	18 号住居跡遺構圖 (2)	67
第 11 圖	34 号・40 号・46 号・47 号・48 号・49 号・ 50 号・51 号土坑遺構圖	24	第 61 圖	19 号住居跡遺構圖 (1)	67
第 12 圖	52 号・53 号・54 号・55 号・56 号・81 号・ 83 号・85 号・86 号土坑遺構圖	25	第 62 圖	19 号住居跡遺構圖 (2)	68
第 13 圖	87 号・88 号・89 号・90 号・91 号・ 92 号・93 号土坑遺構圖	26	第 63 圖	19 号住居跡遺構圖 (3)・遺物園 (1)	69
第 14 圖	2 号・9 号・32 号・35 号・36 号・38 号・ 39 号・40 号・50 号・55 号・83 号土坑遺構圖	27	第 64 圖	19 号住居跡遺構圖 (2)	70
第 15 圖	遺構外遺物園 石器 (1)	28	第 65 圖	20 号住居跡遺構圖・遺物園	71
第 16 圖	遺構外遺物園 石器 (2)	29	第 66 圖	21 号住居跡遺構圖	72
第 17 圖	遺構外遺物園 石器 (3)	30	第 67 圖	22 号住居跡遺構圖 (1)	72
第 18 圖	遺構外遺物園 土器	31	第 68 圖	22 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園	73
第 19 圖	3 号住居跡遺構圖	33	第 69 圖	23 号住居跡遺構圖・遺物園	73
第 20 圖	3 号住居跡遺構圖	34	第 70 圖	16 号・21 号・42 号・60 号土坑遺構圖・ 21 号・42 号・60 号土坑遺物園	75
第 21 圖	5 号住居跡遺構圖・遺物園	35	第 71 圖	4 号并戸遺構圖	76
第 22 圖	6 号住居跡遺構圖 (1)	36	第 72 圖	A 区遺構外遺物園	76
第 23 圖	6 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園	37	第 73 圖	17 号・41 号・43 号・44 号・72 号~80 号土坑遺構圖	78
第 24 圖	7 号住居跡遺構圖	37	第 74 圖	D 区水田遺構圖	79
第 25 圖	8 号住居跡遺構圖 (1)	38	第 75 圖	D 区 1 号并戸遺構圖	80
第 26 圖	8 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園 (1)	39	第 76 圖	D 区 2 号并戸遺構圖	81
第 27 圖	8 号住居跡遺構圖 (2)	40	第 77 圖	D 区水田石器・土器分布圖	82
第 28 圖	9 号住居跡遺構圖 (1)	40	第 78 圖	D 区 2 号并戸石器・土器分布圖	83
第 29 圖	9 号住居跡遺構圖 (2)・遺物園	41	第 79 圖	D 区 2 号并戸遺物園 石器 (1)	84
第 30 圖	82 号土坑遺構圖・遺物園	42	第 80 圖	D 区 2 号并戸遺物園 石器 (2)	85
第 31 圖	1 号住居跡遺構圖 (1)	43	第 81 圖	D 区 2 号并戸遺物園 石器 (3)	86
第 32 圖	1 号住居跡遺構圖 (2)	44	第 82 圖	D 区 2 号并戸遺物園 石器 (4)	87
第 33 圖	1 号住居跡遺物園 (1)	45	第 83 圖	D 区 2 号并戸遺物園 石器 (5)・土器	88
第 34 圖	1 号住居跡遺物園 (2)	46	第 84 圖	D 区 3 号并戸遺構圖	88
第 35 圖	2 号住居跡遺物園	47	第 85 圖	D 区祭祀遺構・72 号~78 号土坑位置圖	89
第 36 圖	2 号住居跡遺物園	48	第 86 圖	D 区祭祀遺構遺構圖・遺物園	90
第 37 圖	4 号住居跡遺構圖 (1)	48	第 87 圖	D 区水田遺物園 (1)	91
第 38 圖	4 号住居跡遺構圖 (2)	49	第 88 圖	D 区水田遺物園 (2)	92
第 39 圖	4 号住居跡遺構圖 (3)	50	第 89 圖	B 区水田遺構圖 (1)	93
第 40 圖	4 号住居跡遺構圖 (4)	51	第 90 圖	B 区水田遺構圖 (2)	94
第 41 圖	4 号住居跡遺物園 (1)	52	第 91 圖	D 区 1 号溝遺構圖	95
第 42 圖	4 号住居跡遺物園 (2)	53	第 92 圖	D 区 2 号溝遺構圖・1 号・2 号溝遺物園	96
第 43 圖	10 号住居跡遺構圖 (1)	53	第 93 圖	A 区・B 区 3 号・4 号・5 号・6 号・7 号・ 8 号・9 号・11 号溝遺構圖 (1)	98
第 44 圖	10 号住居跡遺構圖 (2)	54	第 94 圖	A 区・B 区 3 号・4 号・5 号・6 号・7 号・ 8 号・9 号・11 号溝遺構圖 (2)	99
第 45 圖	10 号住居跡遺構圖 (3)	55	第 95 圖	A 区・B 区 3 号・4 号・5 号・ 7 号・8 号・11 号溝遺物園	100
第 46 圖	10 号住居跡遺構圖 (4)・遺物園	56	第 96 圖	24 号住居跡遺構圖	101
第 47 圖	11 号住居跡遺構圖・遺物園	57	第 97 圖	1 号・23 号・26 号・27 号・28 号・29 号・ 30 号・33 号・37 号土坑遺構圖	103
第 48 圖	12 号住居跡遺構圖・遺物園	58	第 98 圖	遺構外遺物園	104
第 49 圖	13 号住居跡遺構圖・遺物園 (1)	59	第 99 圖	古墳時代土器集成圖 (1)	130
第 50 圖	13 号住居跡遺構圖 (2)	60	第 100 圖	古墳時代土器集成圖 (2)	131
			第 101 圖	弥生時代土器集成圖	132

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

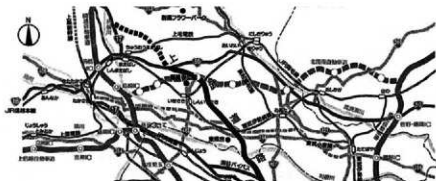
上武道路は、埼玉県熊谷市西別府から群馬県前橋市田口町に至る全長40.5kmの大規模バイパスで、地域の基盤整備と国道17号の混雑緩和のために計画された地域高規格道路である。昭和45年度に交差する国道50号以南の27.4kmが1期工事として事業化され、昭和50年度着工、平成元年度に開通している。

建設に先立っては、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）によって35遺跡、延べ53万4,000㎡が発掘調査され、26冊の発掘調査報告書にまとめられている。関越自動車道新高線、上越新幹線とあわせて3幹線とよばれる一大事業で、事業の経緯と成果は、「地域をつなぐ 未来へつなぐ」（事業団 1995）としてまとめられている。

国道50号以北は、平成元年度、延長13.1kmのうち、前橋市今井町～萩窪町までの4.9km区間、主要地方道前橋大間々桐生線までが事業化された。これが2期工事、7工区と呼ばれている区間である。1期工事と同様、建設に先立ち、建設省（現国土交通省）関東地方建設局と群馬県教育委員会で協議、埋蔵文化財が破壊される地域においては発掘調査を実施することに合意した。その内容が、国土交通省、群馬県教育委員会、事業団の三者で締結した、平成

11年4月1日付け「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）の実施に関する協定書」である。その中には対象遺跡、調査面積、調査費用などが盛り込まれ、事業の完了は、国道50号から前橋市堤町までが整理作業を含めて平成18年3月31日とした。その後、堤町から終点萩窪町までの間を発掘調査の対象とするため協定は変更、7工区は江木町を境として起点側から7-1工区と7-2工区に分けられた。

発掘調査は、平成11年度から事業団が「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）」として受託し、4月に前橋市富田町所在富田細田遺跡、9月からは富田西原遺跡という2班の体制で調査を開始した。その間、今井地区、富田地区では用地の買収が順調に進み、翌12年4月からは調査の体制を増強することになった。今井地区は2班、富田地区では3班という体制がそれで、これにより悪案であった埋蔵文化財の発掘調査が進むことになった。なお、上武道路は、平成16年3月に県道前橋今井線までが暫定2車線で開通し、同20年6月県道前橋大間々桐生線まで延伸されている。現在は、8工区で埋蔵文化財の発掘調査と工事が進行中である。



第1図 上武道路事業位置図

第2節 発掘調査の経過

1 調査区・グリッドの設定

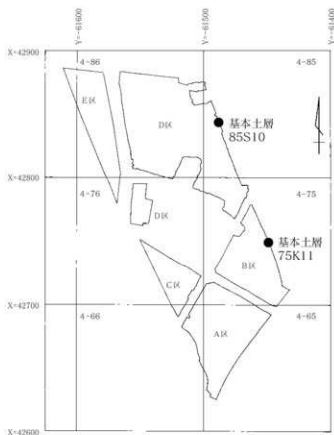
調査区は、市道で仕切られ4つに分割されている。これを南東から北西の順に、A区、B区、C区、D区と付けた。大泉坊川の西側は、D区との関係でE区と付けた。国土交通省による区画番号とは、A区=31、B区=33、C区=32、D区=34・36、E区=35とそれぞれに対応する（第2図）。

グリッドは、国家座標第Ⅱ系（日本測地系）を用いて5mを基準に設定した。これは上武道路調査予定地の統一仕様で、1000m四方で大区画、その中を100m四方で中区画とし、さらに中区画をX軸に5mごとに南から1～20、Y軸に5mごとに東から西にA～Tをつけて小区画に細分したものに当たる。グリッド名称は、4大区86A1というように南東隅のグリッド杭名で表した。これを国家座標系であらわせば、X=42800、Y=-61500となる。

このグリッド表記は、遺構図の作成をはじめ、遺物の取り上げや注記など、各種作業で使用した。ただし、大区画は、あくまでも諸記録の管理・登録上の扱いで、実際図面等への記載は省略した。これに代わるものとしては、1期工事区にならない遺跡略称「JK42」を使用した。Jは上武、Kは国道の略称、基点側から数えて42番目の遺跡という意味である。

水準点は、A区が100.00m、B区が102.00m、C区が100.50m、D区が104.00m（台地）、100.00m（低地）である。調査の対象面積は、18,245.6㎡である。

なお、グリッドの統一仕様については、本事業団報告書第372集「富田漆田遺跡・富田下大日遺跡」（2006）で詳述。



第2図 調査区位置図



第3図 上武道路と富田西原遺跡

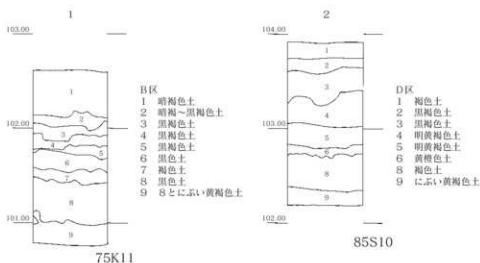
2 基本土層と遺構確認

調査前は、一帯が畑地として耕作され、A区とD区の一部が宅地に利用されていた。昭和55年に施工された富田南部土地改良事業区に含まれ、事業に前後して表土の多くが切土されている。揭示したのは、1がB区の谷地にあたる75K11グリッドで、表土以下の様子を知ることができる。2は台地上の85S10グリッド、旧石器確認調査の断面でローム層の堆積状態を表している。

- 1層 暗褐色砂質土 細粒、均質、密、表土および耕作土、厚さ10~40cm
- 2層 浅間B軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密
- 3層 浅間C軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ35~45cm
- 4層 暗褐色~黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ20~35cm
- 5層 ぶい黄褐色砂質土 細粒、密、ローム漸移層
- 6層 黄褐色ローム 浅間大窪沢軽石 (As-Ok) 混入
- 7層 As-BPグループ スコリアと下に室田バミス相当の粘質土からなる

- 8層 暗色帯上位
- 9層 暗色帯下位
- 10層 褐色ローム 北横スコリアを含まない
- 11層 褐色ローム 北横スコリアを含む
- 12層 暗褐色ローム

2層のAs-B混入黒褐色土は、台地上でも厚さ10cm前後で堆積していたらしいが耕作で攪拌され、A区やD区の低地にだけ残る。そのため台地の中央部では、1層耕作土が切土された3層に直接のつた状態である。As-Bは、古墳時代の住居跡や溝の覆土、川沿いの低地などこれも限られた範囲だけに見られた。3層は、台地上広く安定して重機による掘削、その後の遺構の確認作業の日安とした土層である。厚い所では、黒色の強い上層と暗褐色の下位とに分けることができ、4層とともに住居跡をはじめとした遺構の覆土でもある。4層には5層が現状に混入している。低地では50cm以上の厚さが一般的であるが、台地上では10cm前後で意外と薄い。5層はローム漸移層である。台地の縁辺で厚くなる。重機による掘削は5層の上面まで、遺構の確認も5層の上面で行った。



第4図 基本土層柱状図

3 遺構・遺物の記録

遺構の図化は、前記のグリッドを使い、1:20、1:40を基本として平面、遺物出土状態、断面を作成した。遺構図の総枚数は、A2版で405枚である。測量は、平板測量、測量会社に委託した写真図化を併用した。土層の観察は各担当者による。土層の注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修「新版標準土色帖」による。ただし、本報告の際には加筆・訂正をした。

遺構写真は、土層の堆積状態、遺物の出土状態、発掘、掘り方を基本にして、35ミリのモノクロフィルムとリバーサルフィルムおよびブローニーモノクロフィルムを用いて担当が撮影した。総数は、35ミリモノクロが92本、ブローニーが99本である。各区の全景は、担当による高所作業車と測量会社に委託したラジコンヘリの2つの方法で撮影した。現像後は、ベタ焼きを所定のネガ検索台紙に調査区、遺構ごとに貼り付け、撮影の対象・方向・撮影日、フィルム番号を記載した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名、撮影対象、撮影方向、撮影日を記載して、通し番号を付けた。

出土した遺物の洗浄と注記作業は、調査事務所内で実施した。

4 調査の経過

調査は、平成11年度、同12年度の2箇年にまたがり、のべ9箇月をかけて行われた。11年度はB～D区、12年度はA区が対象である。

平成11年度 年報19参照

平成11年9月1日～平成12年3月31日

A区を除いた14,789.20㎡が対象である。調査はローム漸移層と旧石器調査の2面にわけて行い、住居跡24軒、土坑94基、溝11条、井戸4基、As-B下水田検出。旧石器は、暗色帯から黒色安山岩、黒色頁岩を主とした1,083点出土しているが「上武道路・旧石器時代群(1)」(2008)に掲載している。

9月 6日より作業開始。C区、1,245㎡の表土掘削、自然地形の谷地を確認。土地改良で台地がまるごと削平、検出したのは谷地への際で土坑1基。D区、7,876㎡の表土掘削、弥生時代から古墳時代の住居跡20軒以上を確認し、うち13軒を調査中。ほかには、縄文時代の落とし穴等を検出する。

10月 D区の調査を継続。住居跡は21軒となる。焼失住居2軒が含まれている。縄文時代の落とし穴は13基となる。谷地を囲うように分布。低地調査の必要性が高まる。低地ではAs-B下の水田を調査中。11月 B区、2,658㎡の調査を開始。A区へと続く谷地に水田が期待される。住居跡1軒、土坑2基、溝8条、As-B下水田を調査。6日には第1面として空掘。C区は谷地に3本のトレンチを設定して、谷地の規模、埋没状況を知るための調査を行う。土坑は縄文時代と判明。調査は終了。

D区は、2日に台地上の集落を空掘。6日には低地の水田を空掘。住居跡は、空掘終了後に掘り方の調査を開始。焼失住居から出土した炭化材は、樹種同定を株式会社ハレオ・ラボに委託。

12月 B区は、2面目の調査。溝は検出されるが1面の掘り残しなのか、時期は不明。D区は住居跡掘り方の調査が終了。2日、旧石器の確認調査を開始。対象は調査面積の10%とし、2m×5mのグリッドを設定、開始早々に複数のグリッドで暗色帯からナイフ形石器、剥片が出土。本調査が決定。当面確認調査は、範囲を決めるために継続。

1月 B区は、谷地の最終3面目の調査。水田は判然としないまま、重機で掘り下げたところ谷地から古墳時代前期の4号井戸が検出される。台地上でも同時期の土坑を検出。20日、3面の全景撮影。谷地の形成過程、水田の存否を判断するためにテフラ分析とプラントオハール分析を株式会社古環境研究所に委託。

D区では旧石器の本調査を開始。暗色帯からの出土点数は約300点となる。中には自然に剥落した粗粒輝石安山岩が多く含まれている。これは地山にあるもので遺物なのか、それとも住居跡の一部かなど、

検討を重ねながら調査を進める。低地では水田と、台地の旧石器に対応する水場を検討の対象としたが、出水と凍結で調査は難航。

2月 D区の調査を継続。旧石器の出土点数は、その後も増加して500点を超す。依然として破砕した粗粒輝石安山岩の出土が続く。暗色帯で土坑状の跡を検出。埋土にAs-BPを多く含むことが決まてではあるが、遺物の出土はない。報告時には、自然と判断している。低地では、2号井戸とした溜井の調査を継続。縄文土器の共伴がはっきりとしないまま、石核、剥片の出土が続く。

3月 D区の調査を継続。旧石器の出土層位は暗色帯に特定できた。一部で下位の土層まで掘り下げたが石器は出土しなかった。出土点数は、1,083点、文化層としても1面として報告された。

低地の水田は、2日に空掘。遺物を取り上げた後、壁際にトレンチを設定し下層の状況を確認。その後、As-B下水田下で灰色砂質土面、As-Cを混入する黒褐色土面の3面において調査。結果、谷地の形成過程とそこでの土地利用の様子が判明。15日には埋め戻しを始め、月末には調査を終える。

平成12年度 年報20参照

平成12年9月～10月

対象のA区は、B区と市道を隔てているだけで、谷地とそこにある溝の半数が続く。

9月 19日から台地部分の遺構確認を開始。土坑、倒木痕を検出、低地では4号・7号溝を検出。22日には東側の台地上で旧石器の確認調査を開始。2m×5mのグリッドを設定。最終的には17箇所となり、うち1箇所、As-BP上で石器が1点出土している。29日、高所作業車による全景撮影。

10月 全体図作成。谷地部分では、As-C混入黒褐色土まで掘り下げて確認をしたが上面での調査漏れを除き遺構はなかった。台地上での旧石器確認調査は、30日まで断面の記録をして作業を終了する。

以上で出土した遺物の数量は、64×42×15cmの遺物収納箱で60箱である。

第3節 整理作業の方法

整理は、平成16年度、同20年度、同21年度の3回にかけて行われた。

平成16年度 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に業務を委託。基礎整理、遺物の実測、トレースおよび撮影、遺構図の編集、トレース

平成20年度 当事業団で平成21年2月から同年3月の2ヶ月間、編集、版下作成

平成21年度 当事業団で平成21年7月から同21年10月、版下作成、本文執筆、編集、刊行

1 遺物整理

遺物総数は、収納箱60箱である。基礎整理は、取り上げ台帳と遺物を照合の上、遺構ごとに分類、まず土器の接合を行った。次に復元・彩色し、写真撮影を経て、器械実測により素図作成、それをもとに実測図を作成した。

実測した遺物は、土器・土製品350点、石器・石製品82点、金属製品11点、骨器1点のあわせて444点である。掲載を断念した遺物は、出土した遺構・グリッドごとに種類・器種を分類し、集計をした。

金属製品は、当事業団保存処理室でレントゲン撮影、残存状態を確認の上、クリーニングを行った。

4号住居跡などから出土した炭化材は、株式会社パレオ・ラボに樹種の同定分析を委託した。その成果については、第4章自然科学分析として掲載してある。

2 遺構図・遺構写真整理

遺構図は、通番をつけて台帳を作成した。平面図と断面図は、照合・修正の上トレースをした。さらに印刷用原稿として版下を作成した。遺構写真は、ネガに通番をつけて台帳、所定のネガ検索台紙を作成した。この中から報告書に掲載した写真を選択し、デジタル編集して印刷原稿を作成した。遺物写真もネガから掲載写真を選択し、デジタル編集して印刷原稿を作成した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

富田西原（とみだ にしはら）遺跡は、群馬県の中央部、前橋市富田町1316-1番地ほかにある。JR両毛線の駒形駅から北へ3.7km、最近は市街地近郊のために姿をかえつつあるが、米麦養蚕を主としてきた純農村地帯の一角である（第5図）。

遺跡名は、県と前橋市が協議の上、旧大字の「富田」に小字「西原」をつけて命名した。群馬県遺跡情報システムWEB版では、前橋市遺跡番号00287「高石遺跡」、00290「東原遺跡」として登録されている範囲のそれぞれ一部である。

2 赤城山麓の地形

赤城山は、関東平野の北西部にそびえる截頭円錐型の二重式火山で、急な斜面から構成される山頂部とのびやかな裾野から構成されている。標高1,828mの黒檜山を最高点に、荒山、地藏岳、鍋割山、鈴ヶ岳など10あまりの峰々からなる。日本百名山に数えられ、権名山、妙義山と合わせて「上毛三山」と呼ばれている。

火山活動は、古い方から古期成層火山形成期（40～50万年前から13万年前）、新期成層火山形成期（13万年前から4～5万年前）、その後の中央火口



第5図 遺跡位置図（1：50,000）

丘形成期の3期に分けられている。

最盛期には、標高が2,500mにも達していたらしい。休止期をはさんでは噴火を繰り返して、今のような広い裾野を持つ山容を形成したと考えられている。山頂部では、新时期層火山形成期になってカルデラと中央火口丘群が形成される。約3万年前に鹿沼軽石を噴出した後は、現在まで活動は休止しており火山麓扇状地の形成期になっている(早田1990)。

「裾野は長し赤城山」、これは県内で広く普及している「上毛カルタ」の一枚で、裾野の広さは富士山に次ぐといわれている。裾野は、主に火砕流堆積物や扇状地堆積物から構成されているが、優美な姿も赤城神社が鎮座する標高500m付近からは険しさを増す。鎮座するのは、山と麓を区別したかのようで多くの放射谷はこの付近ではじまり、畑や水田が見られる限界でもある(有末1984)。

一方、裾野の南端は、伊勢崎市北西部から前橋市田口町付近まで、高さが数メートルの崖となり、旧利根川の氾濫原である広範な沖積地、広瀬川低地帯と接している。対岸が前橋台地である。

第6図は、「群馬県10万分の1地質図」(同作成委員会1999)から赤城山南麓の中央部を転載したものである。裾野と広瀬川低地帯、前橋台地との関係が地質の違いとなってあらわれていて、扇状地が重複しているという裾野の様子も見取れる。およそ扇状地のひとつひとつが火砕流や土石流によるもので、白川扇状地、荒砥川扇状地などと呼ばれている所もある。●印が道跡の位置で、西側一帯には、大胡火砕流堆積物を基盤とし、厚いロームに覆われた緩斜面の台地が続いている。大胡火砕流は、約6万年前の噴火と考えられていて、河川沿いの崖などで露出しているのを見ることができる。



第6図 地質分類図

3 富田西原遺跡の立地

遺跡があるのは、荒砥川と大泉坊川にはさまれた舌状台地の先端に近い位置である。2km足らずの距離で広瀬川低地帯となるため、台地の傾斜も緩やかになり、水田との比高差もわずかである。縁辺部は、樹枝状に開析されて沖積地に続いている。遺跡は、そんなひとつ、支谷と支谷にはさまれて南面し、沖積地を目の前にした一角である。支谷の北側には富田高石遺跡があって、もうひとつの支谷の東側は富田宮下遺跡である（第3図）。

標高は、D区の台地上で101~104m、西側の谷地が100mである。基盤は大胡火砕流で、台地には下部ローム以上が堆積している。ローム層中には、浅間山を給源とする板鼻黄色軽石層（As-YP）、板鼻褐色軽石層群（As-BP）や広域テフラの始良Tn火山灰（AT）、榛名山を給源とする八崎軽石（Hr-HP）等のテフラが堆積している。

谷地は、幅が約100m、上武道路付近では一般的な規模で、分岐蛇行しながら中腹の標高230m付近まで達している。ここを調査した富田漆田遺跡の成果では、沖積土が厚いのは谷地の中でも東半分だけで、しかも、そこに河道があるため耕地は狭い。

それでも古墳時代には適当な広さと思えるが、次の時代には不向きであったようで、水田が谷幅いっぱいになるのは平安時代にはいつからである。また、今は水量の乏しい大泉坊川ではあるが、調査で姿をあらわした河道には絶えず砂が流れ込んだような状態で、勢いもあり、水量に恵まれた時期もあったことがわかる。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺は、各時代を通じて数多くの遺跡が残されている。調査された遺跡も多く、それらを総合した研究も成果を上げている。ここでは、第7図に主要な遺跡を記入して、周辺地域の歴史的環境を概観しておきたい。

旧石器時代

本遺跡をふくめた8遺跡の成果が、「上武道路・旧石器時代編（1）」（2008）として公表された。これまでと同様、暗色帯から多いのはもちろんのこと、新たにその上位の層からの出土も増している。高い出土頻度は、上武道路の路線に限ったことではなく、周辺に続きそうである。違いは、出土した点数や石材に差となって現れている。これが地域の特徴といえるのか、続編に期待したい。

このほか須無遺跡（1）では、東北地方との関連を示す硬質頁岩製の細石刃核と荒屋型彫器が共伴して注目をされている。

縄文時代

遺跡の数が最も多いのは前期後半である。今井道上II遺跡（2）では、上武道路やその沿線にある遺跡が集成され、特徴を指摘している（2006）。7工区の遺跡だけを見ると時差はわずかで、継続期間も短い。本遺跡のように落とす穴だけという遺跡もある。

もう一つのピークが中期後半である。ここだけの傾向ではないが、住居跡40軒を越す上ノ山遺跡（3）は例外で、富田漆田遺跡（4）のように数軒という遺跡が大勢である。今井白山遺跡（5）では、荒砥川の沖積地と思われていた所で中期後半の集落が検出されている。上武道路の1期工事区では、この時代のなかばに大規模な地形の変化のあったことが明らかにされている（早田1990）。

弥生時代

南麓地域では後期の集落が次落し、中期および終末期には外来的要素の強いことが特徴とされている。また、後期の稀薄さが逆に古墳時代の導入・展開を容易にしたという見方もある（深澤2004）。

荒口前原遺跡（6）では、中期後半の竜見町式と山草荷式が共伴して注目をされた。集落形成の動きは、後期も後半、樽式中核地の周縁に分布する赤井戸式と呼んでいた終末期になってからである。富田東原遺跡（7）、荒砥上ノ坊遺跡などでそれぞれ数

軒の住居跡が検出されている。富田宮下遺跡(8)は、中期と後期の住居跡がまとまっている稀少な例となった。

古墳時代

古墳の数に地域の様子があらわれている。「上毛古墳総覧」(1938)によると、同じ南麓でも荒砥川をはきんで西と東での差は大きい。西は、桂萱村79基、芳賀村64基、南橋村45基、木瀬村19基である。これに富士見村の29基をたしても236基、365基という東の荒砥村1村に及ばない。総覧からの漏れを加えても大勢は変わらない。

小河川に恵まれ、そして流域が利用しやすかったかどうか、差を生んだ要因であろう。荒砥地区は、伝統集落から順当に第1次新開集落へと飛躍したことが指摘されている(能登ほか1983)。飛躍の象徴は大室古墳群である(前原2009)。ただ6世紀前半以降に限ってみれば差は縮小、西では広瀬川低地帯に進出することで、東西が呼応するような時代を迎えたとされている(小林2002)。

広瀬川低地帯での動向は、桃ノ木川沿いの微高地にある石岡西築瀬遺跡(9)、石岡西田Ⅱ遺跡(10)、野中天神遺跡(11)に注目しておきたい。これらの頂点にいたのが、笈井八日市遺跡(12)の豪族居館、組合式石棺の今井神社古墳(13)で、低地帯をへだてた先には前橋台地がある。

6世紀前半、低地帯と寺沢川との合流点を臨む台地上に全長70mの前方後円墳正円寺古墳(14)が作られ、6世紀後半には低地帯の中に桂萱大塚(15)、台地上にオボ塚(16)が続く。7世紀には、大日塚(17)、新田塚古墳(18)である。周辺には集落とともに、10~20基前後で群集墳が点在している。終末期古墳は、地域の有力者に限られるといわれるが、堀越古墳(19)と約2kmの至近距離に置野Ⅱ遺跡1号墳(20)がある。

古代

『和名抄』勢多郡の項には、深田、田邑、芳賀、

桂萱、真壁、深栗、深澤、時澤、藤澤の9郷がある。その位置は、「芳郷」と書かれた二之宮洗橋遺跡(21)の墨書土器のほか資料はわずかで、古墳時代の様子から荒砥地区、およびその周辺が有力と考えられている(高島2007)。

勢多郡衛について確かな情報はない。現在は寺院跡とみられているのが上西原遺跡(22)である。在位郡衛として国史跡に指定された十三宝塚遺跡と類似し、掘立柱建物群、櫓で方形に囲まれた基壇建物などが検出されている。今井道上道下遺跡にある櫓で囲まれた方形区画(23)は、富豪層の居館ではないかと考えられている(神谷2004)。区画の南には、あづま道(24)と呼ばれる幹道が東西に通過しており、立地としても妥当な見解である。

周辺では、先の「芳郷」墨書のほかに荒砥洗橋遺跡(25)から「大郷長」の墨書土器や「大」の焼印、荒子小学校遺跡(26)からは「識」の銅印が出土している。これらは荒砥の豊かさである。このほか官衙的な様相をもつ堀越中道遺跡(27)で焼印が、茂木山神Ⅱ遺跡(28)では山ノ上碑の大胡臣を連想させる「大兒万財」の墨書土器が出土している。檜峯遺跡(29)の奈良三彩の小壺のほか、富田宮下遺跡(8)で「神功開寶」、富田下大日Ⅲ遺跡(30)で「長年通宝」が出土している。

『類聚国史』によれば、弘仁九年(818)南麓を地震が襲った。荒砥川沿いにある上ノ山遺跡(3)では大規模な地割れの跡、今井白山遺跡(5)では噴砂、中宮開遺跡(31)、中原遺跡群(32)では洪水砂で埋没した水田が検出されている。

茶木田遺跡(33)や笈井中屋敷遺跡(34)は、広瀬川低地帯に点在していた村である。今後も数は増えそうな様子である。農業分野以外では、八ヶ峰生産址(35)で主体が製炭と製鉄で8世紀の一時期的須恵器を焼いている。富田漆田遺跡(4)では9世紀~10世紀の須恵器窯が6基検出されている。

中世

大胡氏は、秀郷流武士団のひとりで荒砥川から広

瀬川低地帯の一带を基盤にしていたと考えられている（前橋市史1971）。祖は重俊、『吾妻鏡』に大胡太郎、五郎などの名で記録され、軍記物でも活躍する。『法然上人行状絵伝』には、隆義とその子実秀が小屋原の運性を介して法然に帰依したとあり、篤信ぶりを伝えている（近藤1978）。浅間山噴火後の復興や女堀（36）の開削と記録は重なるはずであるが、遺跡での存在感は乏しい。

『長楽寺文書』、『彦部文書』には、「上野国大胡郷内野中村」、「大胡郷三俣村」など、なじみのある地名が並んでいるが、すでに地域を治めているのは新田氏である（尾崎1992）。新田氏との関連は、富田の西隣、江木を舞台にした開発の様子も文書もともに復原されている（柴瀬2002）。

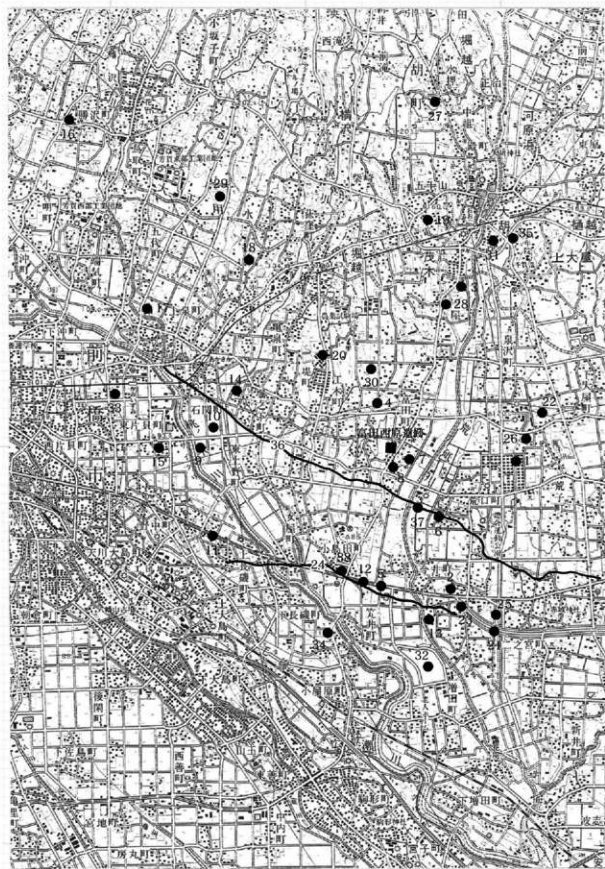
女堀は、前橋市上泉町から伊勢崎市西園定まで延長約13km、未完とされる用水路である。掘削年代は、荒砥前田Ⅱ遺跡（37）で堤の盛り上下で柏川テフラが検出されたことから、1128年からそう遠くない時期であることが判明した。これで、浅間山噴火後の復興事業という見解もますます有力になってきた。しかし、取水口の問題（飯島2009）、受益地域との関係（梅澤2004）など、検討は続いている。

前橋市小島田町大門（38）には、阿弥陀像を彫った異形板碑がある。橘清重が、息子のために仁治元年（1240）に建立した供養碑である。同形のものは周辺にも数基あるが、いずれも安山岩製である。近くでは富田東原遺跡の古墓群（7）が知られている。

参考文献

- 「上野国郡村誌2 勢多部（2）」群馬県文化事業振興会1978
 勢多部誌編纂委員会『勢多部誌』1958
 前橋市誌編纂委員会『前橋市史 第1巻』1971
 群馬県 『群馬県史道史編1 原始古代1』1990
 『群馬県史道史編2 原始古代2』1991
 柏川村教育委員会『柏川村の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—』1985
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬県遺跡大事典』1999
 『群馬の遺跡1～9』2005・2006
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井道上日遺跡』2006
 『富田漆田遺跡 富田下大日遺跡』2006『富田磯田遺跡・富田宮下

- 遺跡』2006『江木下大日遺跡』2006『豊野日遺跡』2007『荒沼上遺跡』2007『亀泉西久保日遺跡・伏窪南田遺跡』2007『亀泉取上遺跡』2008『上武道路・旧石碓時代編（1）』2008
 群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『地域をつなぐ 未来へつなぐ』1995
 有末武夫『群馬県地誌—地誌学の原点とその展開—』有末武夫先生退官記念会実行委員会1984
 小宮祥夫『赤城山麓の三万年前のムラ・下触牛伏遺跡』新泉社2006
 早田 勉『第四紀赤城山麓の地形発達史』群馬県『群馬県史道史編1 原始古代1』1990
 鬼形芳夫『赤城山麓における縄文文化の展開』『群馬県史研究』1 群馬県史編さん委員会 1985
 友賀哲也『群馬県の北陸上層と古墳時代集落の展開』『古代』第102号 早稲田大学考古学会 1996
 能登 健・石坂 茂・徳江秀夫・小島敦子『赤城山麓における遺跡群研究』『信濃』第35巻第4号 1983
 前原 豊『東国大豪族の威勢・大宮古墳群』新泉社 2009
 小林 修『赤城山西南麓の後期百長墓の展開』『群馬考古学手帳』12 群馬土器編の会 2002
 高島英之『荒沼上遺跡の墓石・刷書土器』『荒沼上遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
 松田 猛『古代勢多部の地名と氏族』『赤城山歴史資料館紀要』第4集 赤城山歴史資料館 2002
 神谷佳明『古代上野における富豪層について』『研究紀要』22 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004
 新里村教育委員会『赤城山麓の歴史地誌 弘仁九年に発生した地震とその災害』1991
 神岸純夫・能登 健編『よみがえる中世5「浅間火山灰と中世の東国」』平凡社 1989
 尾崎喜左衛門『上野国長楽寺文書の研究』尾崎喜左衛門著作刊行会1992
 近藤義雄『金沢文庫本「念仏住生伝」成立の背景』『信濃』30巻5号 信濃史学会 1978
 飯島義雄『藤原用水遺構・女堀の赤城山麓への引水経路の検討』『研究紀要』27 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009
 梅澤重昭『女堀の受益地域を考える—その歴史地理学的考察—』『ぐんま史料研究』第22号 群馬県立文書館 2004
 柴瀬大輔『赤城山麓「江木谷」の中世の景観—記録と記憶による景観復原の試み—』『群馬歴史民俗』第20号 群馬歴史民俗研究会 1999



第7図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 概要

土坑が47基検出された。A区で13基、B区で1基、C区で1基、D区で32基の内訳である。これまでの研究からすると、長楕円形や長方形が落とし穴、袋状の断面をした円形が貯蔵穴である。落とし穴が31基、貯蔵穴が6基、残る10基の性格が不明である。

D区では、落とし穴、貯蔵穴の両者が混在していて、分布に特徴が現れている。落とし穴は、数基で群を作り、全体では低地を遠巻きするように斜面に弧を描いている。弧の先は、市道の北側、富田高石遺跡にまで続いている。低地を水場と推定すれば、これを意識していたことが読み取れる状態である。また、長軸で2m前後と規模が一定していて、等高線に直交するというのも特徴の一つである。

一方の貯蔵穴は、斜面部よりも台地の上にある。埋没土中には、投棄されたような状態で遺物を伴う。

2 土坑

2号土坑 (第8・14図、P.L11・19)

概要 D区 86C12グリッドのローム層上面で検出。形状 長方形 規模 長軸2.24m、短軸0.92m、深さ0.69mである。底面では中央、長軸線上で小ビット2本が対の位置で検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が7・7・19cmの円形である。P2が10・10・26cmの円形である。

長軸方位 N32°W 埋没土 堅く締まった暗褐色土で底面の近くまで自然埋没。底面では、にぶい黄褐色土が薄く堆積する。遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器3片が出土した。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、遺物と埋没土の特徴から前期と推定される。

単独であったのではなく、住居跡に近いか、居住域の一角であることを示しているのであろう。

落とし穴でも、状況の異なるのがA区である。ここでは、谷地の中といってもよい所で検出されている。しかも、多くのしみ状の土坑や倒木痕と混在している。長軸は、D区では等高線に直交していたが、ここでは平行し、全体が台地の縁に沿って縦列しているように見える。D区が谷地を遠巻きにするのなら、A区は谷地に降りて、水場を開くような状態であったろうか。

グリッドからの遺物は、遺構の分布密度に比例してD区が最も多い。時期は、黒浜式が最も多く土坑から出土したのと同じ傾向である。次いで、早期、中期の順である。石器類では、草創期のものがある。

3号土坑 (第8図、P.L11)

概要 D区 86C13グリッドのローム層上面で検出。15号土坑と重複、本跡が新しい。4号・5号土坑と隣接している。

形状 長楕円形 規模 長軸1.71m、短軸0.81m、深さ0.50mである。底面の中央には小ビット1本がある。長軸・短軸・深さは12・11・22cmの円形である。壁は掘り残している可能性がある。規模は、計測値よりも若干上回るか。長軸方位 N75°E 埋没土 堅く締まった暗褐色土で自然埋没している。遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

4号土坑 (第8図、P L11)

概要 D区 86C13・14グリッドのローム層上面で検出。3号・5号・15号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.99m、短軸0.76m、深さ0.37mである。

長軸方位 N52° W

埋没土 堅く締まった暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

5号土坑 (第8図、P L11)

概要 D区 86C・D14グリッドのローム層上面で検出。3号・4号・15号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.03m、短軸0.83m、深さ0.58mである。長軸方位 N81° E

埋没土 堅く締まった黒褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

6号土坑 (第8図、P L11)

概要 D区 86F・G3・4グリッドのローム層上面で検出。7号・8号土坑と隣接している。

形状 長楕円形 規模 長軸1.94m、短軸0.91m、深さ0.41mである。底面では、長軸線上で2列、対の位置で小ピット4本が検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が7・6・35cm、P2が7・7・20cm、P3が9・9・18cm、P4が24・17・22cmである。長軸方位 N87° W

埋没土 堅く締まった暗褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

7号土坑 (第8図)

概要 D区 86F・G4グリッドのローム層上面で検出。6号・8号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.12m、短軸1.14m、深さ0.70mである。長軸方位 N73° W

埋没土 堅く締まった黒褐色土、暗褐色土が上位を占め、黄褐色土、褐色土が床面までを覆う。1・2層に炭化物が混入している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

8号土坑 (第8図、P L11)

概要 D区 86F4グリッドのローム層上面で検出。6号・7号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.65m、短軸0.90m、深さ0.63mである。底面では、長軸線上の中央で小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が17・10・22cm、P2が10・9・24cmである。長軸方位 N64° W

埋没土 堅く締まった黒褐色土、暗褐色土で自然埋没している。1層に炭化物が混入し、底面だけに薄い黄褐色土がある。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

9号土坑 (第8・14図、P L11・19)

概要 D区 86D7グリッドのローム層上面で検出。11号・12号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.67m、短軸1.24m、深さ0.72mである。長軸方位 N74° W

埋没土 堅く締まった暗褐色土、褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器2片が出土している。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、遺物と埋没土の特徴から前期と推定される。

10号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86D5・6グリッドのローム層上面で検出。8号土坑と9号土坑の中間にある。

形状 長方形 規模 長軸2.29m、短軸1.31m、深さ0.63mである。底面では、長軸線上の中央で小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が16・11・29cm、P2が16・13・24cmである。長軸方位 N49° W

埋没土 堅く締まった黄褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

11号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86C8グリッドのローム層上面で検出。9号・12号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.30m、短軸1.02m、深さ0.39mである。

長軸方位 N70° W

埋没土 堅く締まった黒褐色土、褐色土、黄褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

12号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86C8グリッド、ローム漸移層上面で検出。9号・11号土坑と隣接している。

形状 楕円形 規模 長軸1.22m、短軸0.96m、深さ0.20mである。浅い皿状の断面である。

長軸方位 N25° E

埋没土 黒褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

13号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86D11グリッドのローム層上面で検出。

形状 楕円形 規模 長軸1.11m、短軸0.83m以上、深さ0.43mである。長軸方位 N34° E
埋没土 堅く締まる暗褐色土、褐色土で自然埋没している。全体に炭化物が混入する。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。貯蔵穴の可能性はある。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

14号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86D・E10グリッドのローム層上面で検出。18号・19号・24号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.67m、短軸0.84m、深さ0.48mである。底面では、長軸線上の中央で小ピット1本が検出されている。長軸・短軸・深さは17・13・13cmの円形である。長軸方位 N67° W

埋没土 黒褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土で自然埋没している。全体に炭化物が混入する。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

15号土坑 (第9図、P L11)

概要 D区 86C13グリッドのローム層上面で検出。3号土坑と重複し、本跡が古い。4号・5号土坑と隣接している。

形状 長楕円形 規模 長軸1.77m、短軸0.75m、深さ0.26mである。長軸方位 N18° W

埋没土 堅く締まったにぶい黄褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

18号土坑 (第9図、P L12)

概要 D区 86B・C10グリッドのローム漸移層

第3章 検出された遺構と遺物

上面で検出。19号土坑とは接し、14号土坑とも隣接する。

形状 円形 規模 長軸0.94m、短軸0.84m、深さ0.44mである。

埋没土 黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

19号土坑 (第9図、P L12)

概要 D区 86B10グリッドのローム漸移層上面で検出。18号土坑と接し、14号土坑とも隣接する。

形状 長楕円形 規模 長軸0.84m、短軸0.38m、深さ0.65mである。長軸方位 N6°W

埋没土 黒褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

20号土坑 (第9図、P L12)

概要 C区 76C3グリッド、谷地寄りのローム層上面で検出。C区で唯一の遺構である。

形状 円形 規模 長軸1.02m、短軸0.89m、深さ0.19mである。

埋没土 堅く締まった黄褐色土で自然埋没している。焼土と炭化物が混入する。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。貯蔵穴の可能性がある。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

24号土坑 (第10図、P L12)

概要 D区 86D10グリッドのローム層上面で検出。14号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.12m、短軸1.12m、深さ0.71mである。底面では、長軸線上、南側の壁寄りでも小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が15・13・5cm、P2が14・14

・8cmのいずれも円形である。長軸方位 N85°E埋没土 堅く締まった黒褐色土、暗褐色土で自然埋没、炭化物が混入する。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

31号土坑 (第10図、P L12)

概要 D区 75P18グリッド、4号住居跡の中央部、掘り方で検出。本跡が古い。

形状 長方形 規模 長軸1.69m、短軸0.80m、深さ0.53mである。底面では、東寄りで小ピット2本が検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が15・11・26cm、P2が20・15・18cmである。

長軸方位 N80°W

埋没土 ロームブロックを多く含む暗褐色土で自然埋没している。堅く締まっている。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

32号土坑 (第10・14図、P L12・19)

概要 D区 75O19・20グリッドのローム漸移層で検出。北西8mに落とし穴の36号土坑がある。

形状 円形 規模 長軸0.79m、短軸0.74m、深さ0.27mである。断面は皿状である。

埋没土 暗褐色土、黒褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器4片が出土した。

所見 用途は不明。時期は、土器の特徴から前期と推定される。

34号土坑 (第11図、P L12)

概要 D区 85S9グリッド、16号住居跡の中央部掘り方で検出。本跡が古い。

形状 円形 規模 長軸1.22m、短軸1.22m、深さ0.33mである。

埋没土 堅く締まった暗褐色土、黄褐色土で自然埋没している。遺物とともに炭化物が混入する。

遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器片が出土した。

所見 断面が袋状をした貯蔵穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

35号土坑 (第10・14図、P L 13・19・28)

概要 D区 85S7・8グリッド、12号住居跡の南西隅にかかり、掘り方で検出。

形状 円形 規模 長軸1.52m、短軸1.50m、深さ0.74mである。

埋没土 堅く締まったにぶい黄褐色土、黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 埋没土の中位で縄文土器片、打製石斧、凹石が出土した。

所見 断面が袋状をした貯蔵穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

36号土坑 (第10図、P L 13・28)

概要 D区 8号住居跡と9号住居跡の間、85P2グリッドのローム漸移層上面で検出。最も深く、中段以下に旧状を良く残している。

形状 楕円形 規模 長軸2.45m以上、短軸2.22m、深さ1.57mである。長軸方位 N90°W

埋没土 細かに分層されている。堅く締まった黒褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 埋没土の2層から中位にかけて縄文土器片、凹石が出土した。第14図の36坑1～7は諸磯B式の口縁部から胴部にかけての深鉢で、掲載した土坑出土遺物の中では、最も新しい。接合率も高く、底部を欠いた状態で投棄されたのであろう。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

40号土坑 (第11・14図、P L 13・19)

概要 D区 75T18・19グリッド、旧石器確認調

査中にローム漸移層の上面で検出。

形状 長楕円形 規模 長軸2.08m、短軸1.25m、深さ1.23mである。長軸方位 N51°W

埋没土 堅く締まり、ロームブロックを含む暗褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 埋没土の中位から縄文土器片、剥片2点が出土した。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

46号土坑 (第11図、P L 13)

概要 D区 76K17グリッドのローム層上面で検出。47号・51号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.47m、短軸0.65m、深さ0.13mである。底面では、長軸線上、中心寄りで小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が12・9・22cm、P2が10・10・26cmのいずれも円形である。長軸方位 N56°W

埋没土 堅く締まった褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

47号土坑 (第11図、P L 13)

概要 D区 76K16グリッドのローム層上面で検出。46号・51号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.97m、短軸0.97m、深さ0.42mである。長軸方位 N50°W

埋没土 褐色土、暗褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

48号土坑 (第11図、P L 13)

概要 D区 85R6・7グリッドのローム漸移層で検出。最も近い土坑としては北西7mに35号土坑がある。

形状 楕円形 規模 長軸1.00m、短軸0.57m、

深さ0.24mである。長軸方位 N63° W
埋没土 黒褐色土、暗褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 用途は不明。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

49号土坑 (第11図、P L13)

概要 D区 85S3グリッドのローム漸移層上面で検出。
形状 長方形 規模 長軸2.32m、短軸1.01m、深さ0.45mである。底面では、長軸線上、中央で小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が18・11・34cm、P2が17・12・47cmのいずれも円形である。長軸方位 N69° W
埋没土 堅く締まった黒褐色土、褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

50号土坑 (第11・14図、P L13・19)

概要 D区 75Q20、85Q1グリッド、旧石器確認調査中にローム層上面で検出。
形状 長方形 規模 長軸2.42m、短軸1.49m、深さ0.88mである。底面では、長軸線上、中央から北寄りで小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が19・16・27cm、P2が17・15・18cmのいずれも円形である。長軸方位 N15° W
埋没土 堅く締まった黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 埋没土の主に1層から縄文土器片が出土した。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

51号土坑 (第11図、P L13)

概要 D区 76J14・15グリッドのローム層上面

で検出。46号・47号土坑と隣接している。
形状 楕円形 規模 長軸1.84m、短軸1.30m、深さ0.68mである。壁は長軸方向を掘り残している可能性がある。本来なら50号土坑のようか。

長軸方位 N15° E

埋没土 堅く締まった黒褐色土、褐色土、黄褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

52号土坑 (第12図、P L13)

概要 D区 76B19・20グリッドのローム漸移層上面で検出。53号～55号土坑と隣接している。
形状 円形 規模 長軸1.17m、短軸1.15m、深さ0.10mである。上面のほとんどが削平されている。
埋没土 暗褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から貯蔵穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

53号土坑 (第12図、P L13)

概要 D区 76A19グリッドのローム漸移層上面で検出。40号・52号・54号土坑と隣接している。
形状 長方形 規模 長軸1.38m以上、短軸0.79m、深さ0.31mである。長軸方位 N73° E
埋没土 堅く締まった褐色土、黄褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

54号土坑 (第12図、P L14)

概要 D区 76A・B20グリッドのローム漸移層上面で検出。52号・53号・56号土坑と隣接している。
形状 長方形 規模 長軸2.36m、短軸0.90m、深さ0.51mである。底面では、長軸線上、中央か

ら小ピット2本が対に検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が9・9・6cm、P2が15・15・4cmのいずれも円形である。長軸方位 N49° W
埋没土 堅く締まった黄褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器片が出土した。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

55号土坑 (第12・14図、P L14・19)

概要 D区 76A20、86A1グリッドのローム漸移層上面で検出。40号・52号～54号土坑と隣接する。
形状 長方形 規模 長軸1.95m、短軸0.94m、深さ0.42mである。長軸方位 N15° W
埋没土 堅く締まった暗褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 3層から縄文土器片が出土した。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、土器と埋没土の特徴から前期と推定される。

56号土坑 (第12図、P L14)

概要 B区唯一の遺構で、75O8グリッドのローム漸移層上面で検出。周囲にある22号・57号～59号はしみ状の土坑である。
形状 円形 規模 長軸1.16m、短軸1.05m、深さ0.52mである。
埋没土 堅く締まった黒褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から貯蔵穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

81号土坑 (第12図、P L15)

概要 A区 65P17グリッドのローム層上面で検出。79号・80号土坑と隣接している。
形状 円形 規模 長軸0.97m、短軸0.85m、深さ0.12mである。上面のほとんどが削平されている。
埋没土 暗褐色土、褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 用途は不明。時期は、埋没土の特徴から前期

と推定される。

83号土坑 (第12・14図、P L15・19)

概要 A区 65S14グリッドのローム漸移層で検出。92号・93号土坑と隣接している。
形状 長方形 規模 長軸2.84m、短軸1.55m、深さ0.82mである。底面では、4本の小ピットが検出されている。長軸・短軸・深さは、P1が12・12・7cm、P2が11・11・4cm、P3が15・13・12cm、P4が19・12・15cmである。長軸方位 N11° W
埋没土 暗褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 埋没土中から縄文土器片が出土した。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

85号土坑 (第12図、P L15)

概要 A区 65Q20グリッドのローム漸移層で検出。86号～91号土坑と隣接している。
形状 長方形 規模 長軸1.94m、短軸0.80m、深さ0.25mである。長軸方位 N41° E
埋没土 暗褐色土、明褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

86号土坑 (第12図、P L15)

概要 A区 65P・Q20グリッドのローム漸移層で検出。85号・87号～91号土坑と隣接している。
形状 円形 規模 長軸0.78m、短軸0.75m、深さ0.26mである。
埋没土 暗褐色土で自然埋没している。
遺物と出土状況 出土した遺物はない。
所見 用途は不明。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

87号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 65P20グリッドのローム漸移層で検

出。85号・86号・88号～91号土坑と隣接している。
形状 方形 規模 長軸1.28m、短軸1.14m、深さ0.43mである。長軸方位 N56° W

埋没土 暗褐色土、褐色土、明褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 貯蔵穴の可能性がある。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

88号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 75P1グリッドのローム漸移層で検出。85号～87号土坑・89号～91号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸1.63m、短軸0.80m、深さ0.26mである。長軸方位 N28° W

埋没土 暗褐色土、明褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

89号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 75O1・2グリッドのローム漸移層で検出。85号～88号土坑・90号・91号土坑と隣接している。

形状 楕円形 規模 長軸1.25m以上、短軸1.02m、深さ0.31mである。長軸方位 N19° W

埋没土 堅く締まった暗褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 貯蔵穴の可能性がある。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

90号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 65P20、75P1グリッドのローム漸移層で検出。85号～89号・91号土坑と隣接している。

形状 長方形 規模 長軸2.46m、短軸1.11m、深さ0.29mである。底面の北端寄りに長軸61・短軸42・深さ18cmの楕円形をした落ち込みがある。

長軸方位 N28° E

埋没土 暗褐色土、明褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

91号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 65Q19グリッドのローム漸移層で検出。85号～90号土坑と隣接している。

形状 円形 規模 長軸1.04m、短軸1.02m、深さ0.57mである。

埋没土 暗褐色土、明褐色土、褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴である。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

92号土坑 (第13図、P L15)

概要 A区 65S・T12グリッドのローム漸移層で検出。83号・93号土坑と隣接している。

形状 円形 規模 長軸1.06m、短軸0.90m、深さ0.33mである。

埋没土 堅く締まった暗褐色土で自然埋没している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 用途は不明。時期は、埋没土の特徴から前期と推定される。

93号土坑 (第13図)

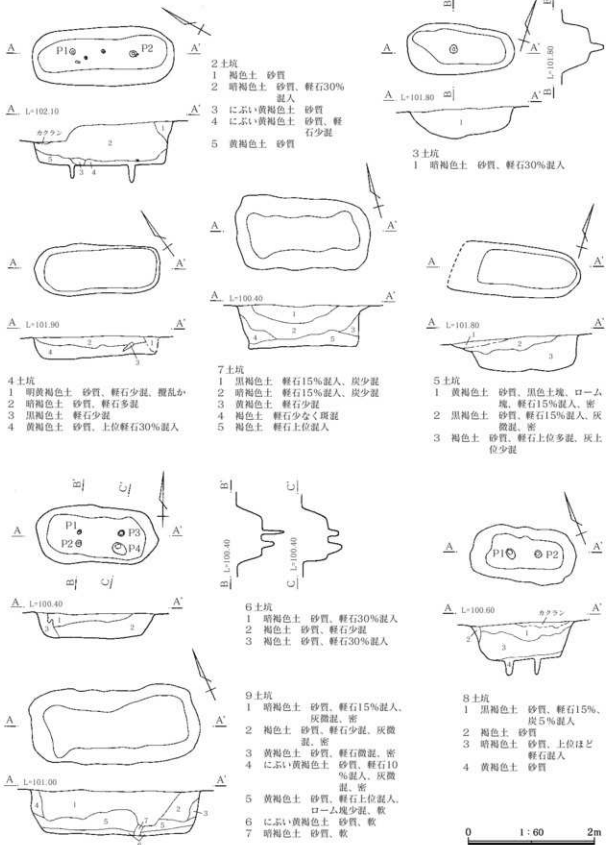
概要 A区 65S15・16グリッドのローム漸移層で検出。83号・92号土坑と隣接している。

形状 不整形 規模 長軸2.17m、短軸1.30m、深さ0.51mである。長軸方位 N20° W

埋没土 暗褐色土、褐色土、暗黒褐色土で自然埋没している。

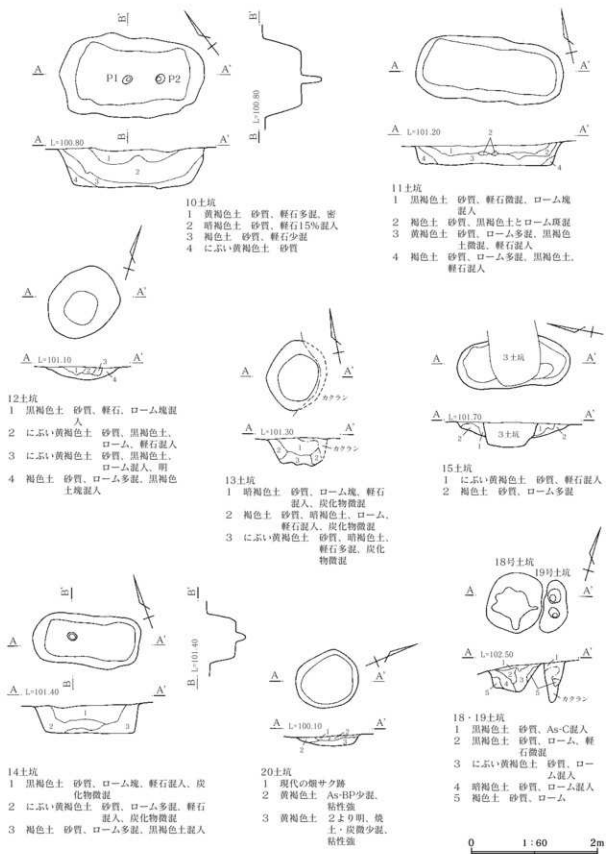
遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状の特徴から落とし穴と考えられる。時期は埋没土の特徴から前期と推定される。

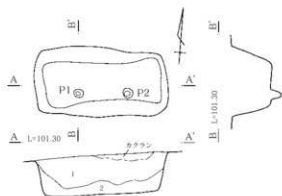


第8図 2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号土坑遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

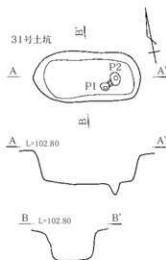


第9図 10号・11号・12号・13号・14号・15号・18号・19号・20号土坑遺構図



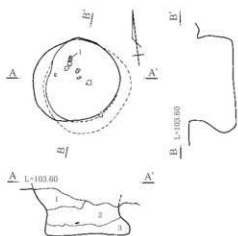
24土坑

- 1 黒褐色土 砂質、ローム多く塊状、軽石、炭化物混入
- 2 褐色土 砂質、ローム多混、軽石混入、炭化物微混



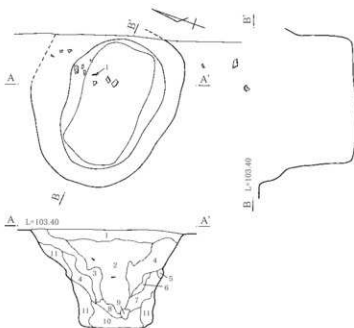
32土坑

- 1 暗褐色土 砂質、As-C 20%混入
- 2 黒褐色土 砂質、As-C、ローム減少混
- 3 褐色土 砂質、As-C少量混、ローム塊多混



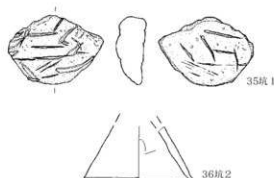
35土坑

- 1 明黄褐色土 粘質、ソフトロームの2次堆積
- 2 にふい黄褐色土 As-BP炭粒多混、堅緻
- 3 黄褐色土 堅緻



36土坑

- 1 表土 砂質、軽石混入
- 2 黒褐色土 砂質、軽石多混、ローム、炭化物混混、褐色土塊混入
- 3 黒褐色土 2に近似、ローム多混
- 4 にふい黄褐色土 黒褐色土、ローム混入、軽石多混
- 5 暗褐色土塊
- 6 にふい黄褐色土 砂質、ローム、黒褐色土多混、軽石混入
- 7 褐色土 砂質、ローム多混、黒褐色土、軽石混入
- 8 暗褐色土 砂質、ローム混入、軽石微混
- 9 ローム塊
- 10 暗褐色土 砂質、ローム混入
- 11 黄褐色土 黒褐色土微混

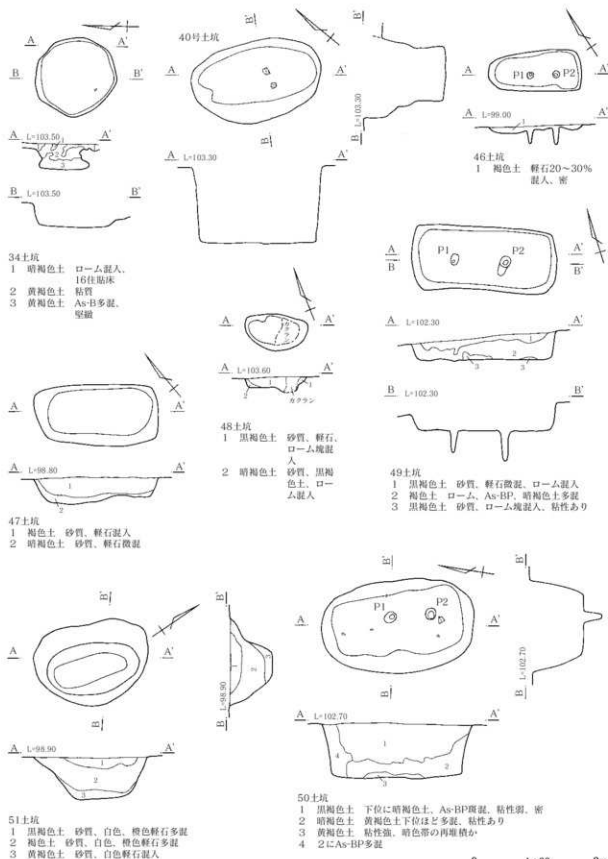


0 1:3 10cm

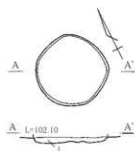
0 1:60 2m

第10図 24号・31号・32号・35号・36号土坑遺構図、35号・36号土坑遺物図

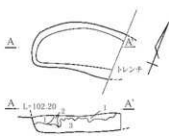
第3章 検出された遺構と遺物



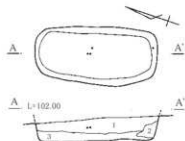
第11図 34号・40号・46号・47号・48号・49号・50号・51号土坑遺構図



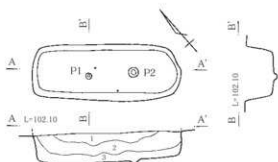
52土坑
1 暗褐色土 ローム、As-BP混入、粘性あり、堅硬



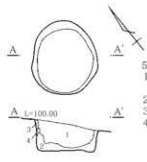
53土坑
1 褐色土 3に黒褐色土混
2 黄褐色土 As-BP多混
3 黄褐色土 粘質、As-BP多混



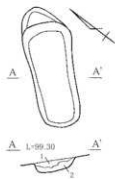
55土坑
1 暗褐色土 黒褐色土混、粘性強、密
2 明褐色土 粘質
3 1との混土 暗褐色土多混



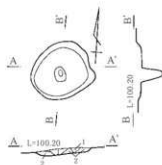
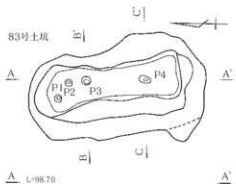
54土坑
1 褐色土 軽石30~50%、黒粒混入
2 黄褐色土 軽石20~40%混入
3 黄褐色土 軽石少混



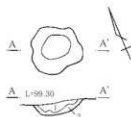
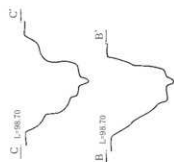
56土坑
1 黒色土 As-YPかAs-BP多混、粘性強
2 黒色土 1より暗、粘性強
3 黒褐色土 ローム混入
4 ローム塊



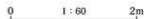
85土坑
1 暗褐色土 As-BP混、密
2 明褐色土 As-YP多混、密



81土坑
1 暗褐色土 ローム小粒少混、密
2 褐色土 暗褐色土多混、密

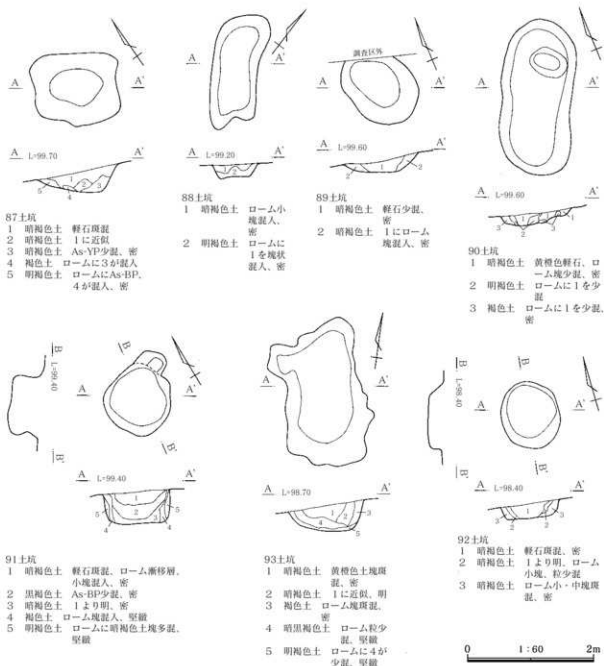


86土坑
1 暗褐色土 暗褐色土塊混入、密
2 明褐色土 ロームに暗褐色土粒少混、密



第12図 52号・53号・54号・55号・56号・81号・83号・85号・86号土坑遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

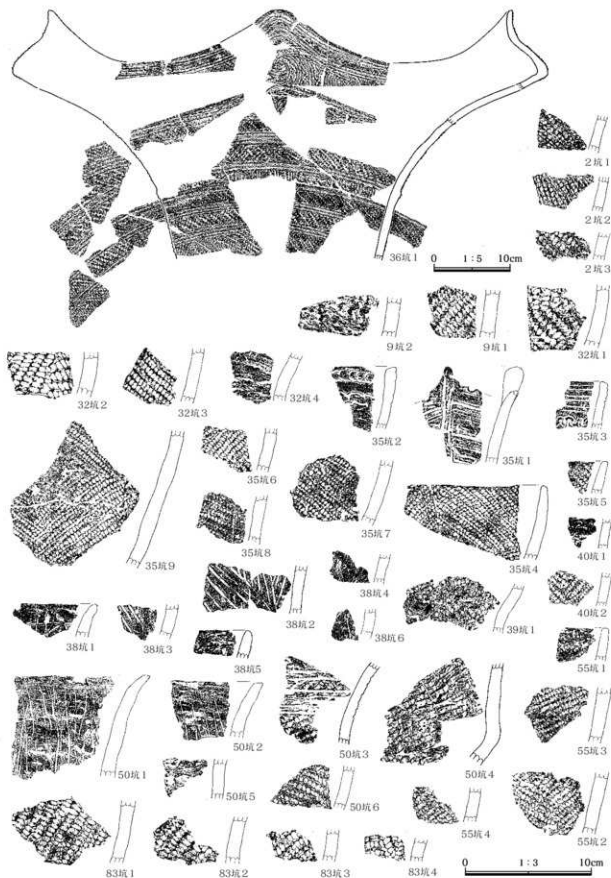


第13図 87号・88号・89号・90号・91号・92号・93号土坑遺構図

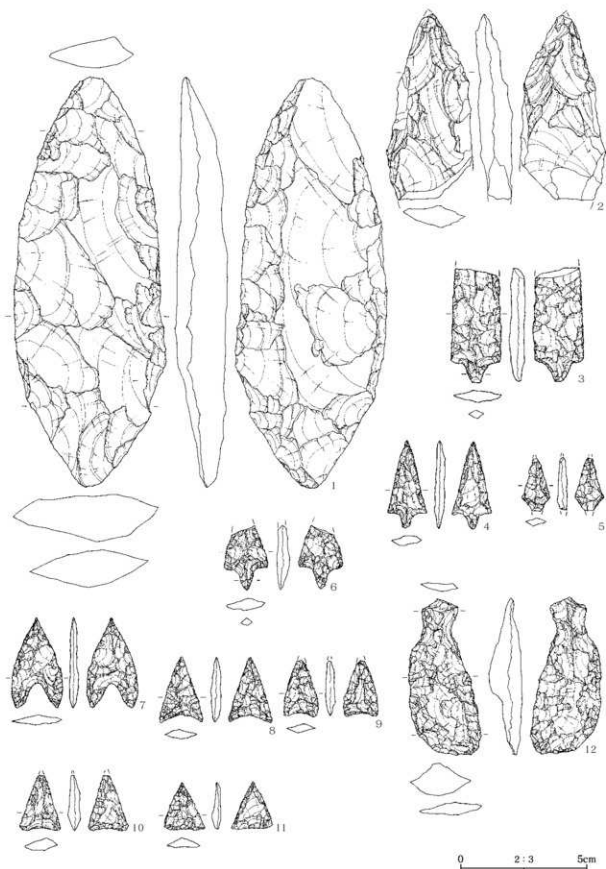
3 グリッド出土遺物 (第15~18図、P.L19・20)

遺物量は、収納箱にして60箱である。このうちグリッドから出土したのは半数、内訳としては土坑の分布と同じくD区が最も多く、A区、B区の順で

続いている。A区とB区は、谷地へ流れ込んだものが主であるのに対して、D区はローム漸移層で出土したほか、住居跡土からの出土が多い。また、水田に伴う井戸に含めたが、D区では低地という特異な出土例もある。時期は、網羅することに主眼をお



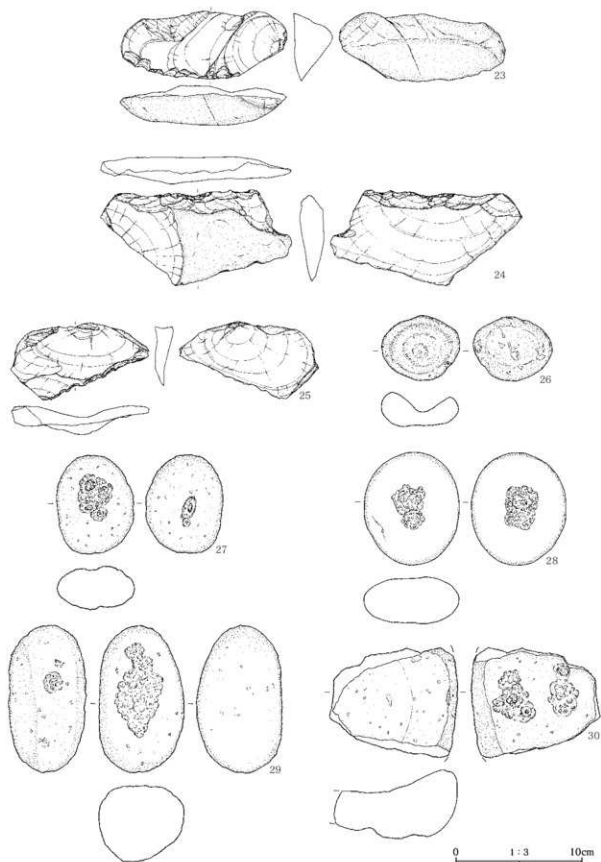
第14図 2号・9号・32号・35号・36号・38号・39号・40号・50号・55号・83号土坑遺物図



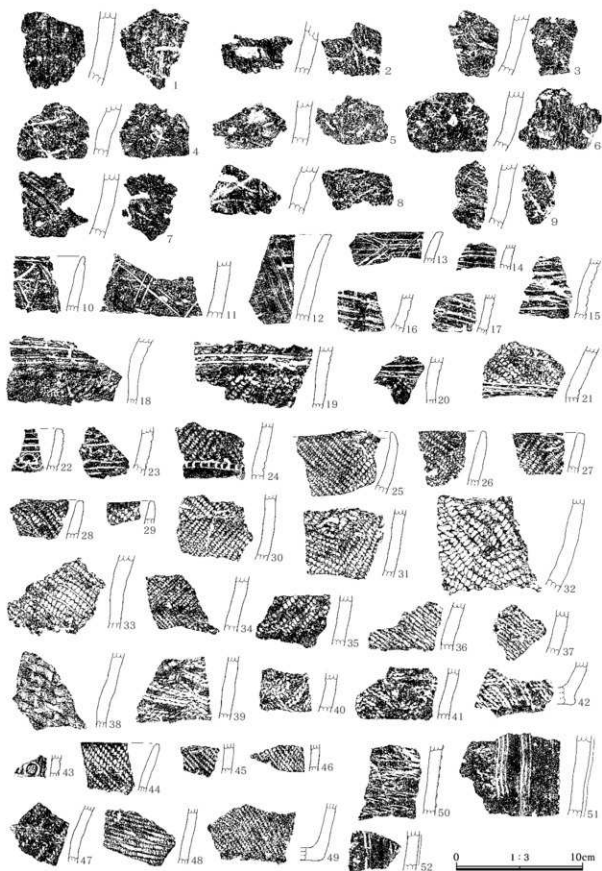
第15図 遺構外遺物図 石器 (1)



第16図 遺構外遺物図 石器 (2)



第17図 遺構外遺物図 石器 (3)



第18回 遺構外遺物図 土器

第3章 検出された遺構と遺物

富田西帯遺跡石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存	図版番号	写真番号
1	尖頭器	黒色頁岩	16.30	6.10	2.05	199.6	完形		15 20
2	尖頭器	黒色安山岩	7.35	3.45	1.50	34.7	尖端および下半部欠損		15 20
3	有舌尖頭器	黒色頁岩	4.50	2.00	0.60	5.9	先端部欠損		15 20
4	石鏃	黒色頁岩	3.50	1.55	0.40	1.6	完形		15 20
5	石鏃	チャート	2.10	1.15	0.40	0.9	先端部および舌部欠損		15 20
6	石鏃	チャート	2.55	1.75	0.55	1.9	先端部欠損		15 20
7	石鏃	チャート	3.60	2.00	0.35	2.2	完形		15 20
8	石鏃	チャート	2.60	1.75	0.40	1.5	完形		15 20
9	石鏃	黒色安山岩	2.20	1.40	0.35	1.2	先端部欠損		15 20
10	石鏃	黒色頁岩	2.20	1.60	0.50	1.4	先端部欠損		15 20
11	石鏃	チャート	1.90	1.60	0.35	0.7	完形		15 20
12	石鏃	チャート	6.20	2.80	1.30	17.3	完形		15 20
13	磨製石斧	変玄武岩	7.90	3.40	2.60	91.6	破片		16 20
14	磨製石斧	変玄武岩	6.30	5.10	2.80	142.7	基部欠損		16 20
15	打製石斧	黒色頁岩	11.70	7.00	1.80	149.8	完形		16 20
16	打製石斧	粗粒輝石安山岩	11.60	4.90	1.70	123.7	完形		16 20
17	打製石斧	黒色頁岩	10.20	5.10	2.00	103.5	完形		16 20
18	打製石斧	黒色頁岩	8.60	5.60	1.90	95.2	基部および先端部欠損		16 20
19	打製石斧	黒色頁岩	7.60	5.60	1.50	53.0	基部欠損		16 20
20	Rフレイク	黒色頁岩	9.60	4.90	3.00	139.6	完形		16 20
21	三角錐形石器	黒色頁岩	15.80	6.80	7.00	664.2	完形		16 20
22	削器	黒色頁岩	9.30	6.50	2.00	116.9	完形		16 20
23	Rフレイク	黒色頁岩	5.40	13.10	3.10	218.9	完形		17 20
24	Rフレイク	黒色頁岩	7.60	15.10	2.10	197.9	完形		17 20
25	Rフレイク	珧質頁岩	6.10	10.90	1.60	91.4	完形		17 20
26	凹石	軽石	5.10	6.30	2.50	46.4	完形		17 20
27	凹石	粗粒輝石安山岩	7.80	6.10	3.50	169.0	完形		17 20
28	凹石	粗粒輝石安山岩	8.90	7.50	3.70	370.4	完形		17 20
29	凹石	粗粒輝石安山岩	11.80	6.80	6.20	556.1	完形		17 20
30	石皿	粗粒輝石安山岩	8.80	10.20	5.40	457.1	破片		17 20

いたが前期が最も多く、早期、中期が次ぐ。

第18図は、土器を時期別に集成した。個々の特徴は、P105・106に観察表を掲載している。

1～9は早期条痕文系土器である。D区76B19・20グリッドから出土、同一個体の可能性がある。10～32は前期黒浜式である。各区のグリッドから出土したものを、繊維を含む一群として一括した。数の上では諸磯a式、同b式と並んで多い。土坑の時期を反映したものであろう。10～15は、半截竹管文を格子状に施文、D区のグリッドから出土。33～35は付加糸縄文、36～38が無節R。39～42が複節縄文、43が円形竹管文を施した諸磯a式、44～49が前期後葉、50が諸磯b式、51・52が中期阿玉台式である。

石器は、第15図～第17図に集成した。個々の法量については表のとおりである。1・2は尖頭器で

ある。1は、13号住居跡覆土からの出土、完形で長さ16.3cm、最大幅6.1cmを測る。重量は199.6gである。2は、D区、85Q5グリッドから出土、下半部を欠損しているが長さ7.3cm、幅3.4cmを測る。3は、18号住居跡覆土から出土した有舌尖頭器である。先端部を欠損しているが、長さ4.5cm、幅2.0cmである。4～11は、住居跡、溝、井戸などの覆土から出土した石鏃である。有茎と無茎とがある。12は、7号溝覆土から出土した完形の石匙である。13・14は磨製石斧、変玄武岩が使用されている。着柄の加工に特徴がある。15～19は打製石斧、17が35号土坑から出土したほかは、すべてグリッドから出土した。21は三角錐形石器、D区、75T20グリッドで出土。15.8cm、最大幅6.8cm、最大厚7.0cmを測る。20・23～25は使用痕のある剥片、22は削器、26～29は凹石、30は石皿である。

第2節 弥生時代

1 概要

D区で住居跡6軒、A区で土坑1基が検出されている。住居跡は、台地の頂部に30m四方の範囲にまとめられ、その西側半分にあたる。時期は、土師器を伴う後期後半である。住居跡の長軸方位の違いか

ら、僅差の2時期程度に分けることが可能である。

土坑は、谷地の中にある。中期前半と古く、富田宮下遺跡と関連する。特異な立地、叢が単独で出土したことから墓坑の可能性が考えられる。

2 住居跡

3号住居跡 (第19・20図 P L 3・4・23)

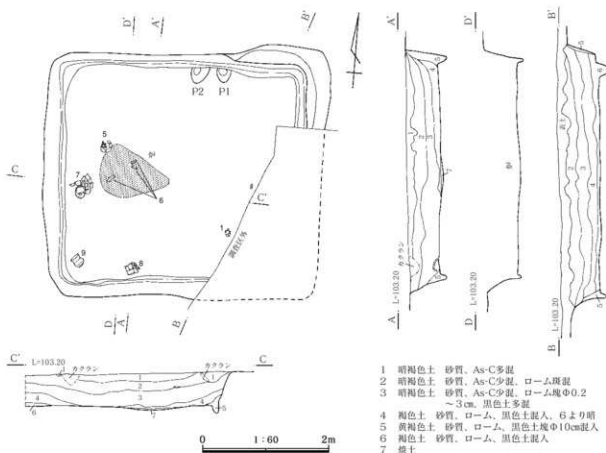
概要 D区 75M・N18・19グリッドのローム漸移層上面で検出。南東隅は調査区外である。

形状 推定方形、周溝に対応するような、北東隅だけがわずかに張り出す。面積 17.29㎡ 長軸方位 N84° E 規模 長軸4.48m、短軸3.86m、残壁高54cm 床面 平坦、堅緻である。

柱穴 北壁際の中央部の近くで、2本のピットを検

出。長軸・短軸・深さは、P1が22・20・19cm、P2が26・26・15cmである。壁が張り出す位置と一致、間隔は50cmと狭く壁の養生用であろうか。周溝 全周している。幅8~22cm前後、深さ8~20cmである。北側が広くて深い傾向にある。

炉 中央部の西側で長軸110cm、短軸80cmの範囲に焼土が広がり、床が焼けている。



第19図 3号住居跡遺構図

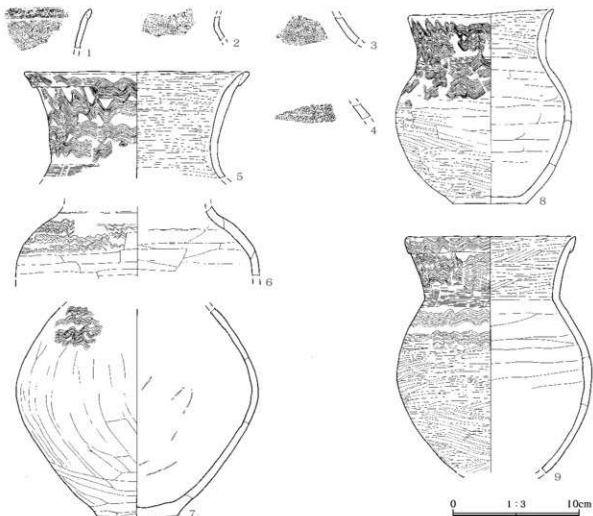
- 1 暗褐色土 砂質、As-C多混
- 2 暗褐色土 砂質、As-C少混、ローム混
- 3 暗褐色土 砂質、As-C少混、ローム塊Φ0.2~3cm、黒色土多混
- 4 褐色土 砂質、ローム、黒色土混入、6より暗
- 5 黄褐色土 砂質、ローム、黒色土塊Φ10cm混入
- 6 褐色土 砂質、ローム、黒色土混入
- 7 焼土

第3章 検出された遺構と遺物

覆土 暗褐色土、褐色土、黄褐色土で自然埋没。上位層にAs-C、下位層にロームが混入している。

遺物と出土状況 南西隅から炉にかけて、床面かそ

の近くで甕が出土。器形を残しているものが多い。所見 出土した遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。



第20図 3号住居跡遺物図

5号住居跡 (第21図 PL4・24)

概要 D区 750・P19・20グリッドのローム漸移層上面で検出。

形状 方形 面積11.22㎡ 長軸方位 N5° W

規模 長軸3.64m、短軸3.38m、残壁高44cm

床面 平坦、堅緻である。

柱穴 P1～P5が床面、P6～P9が掘り方で検出。長軸・短軸・深さは、P1が30・28・42cm、P2が32・24・67cm、P3が26・22・68cm、P4が25・18・7cm、P5が31・26・44cm、P6が15・15・15cm、P7が18・18・11cm、P8が

21・12・15cm、P9が19・19・29cmである。

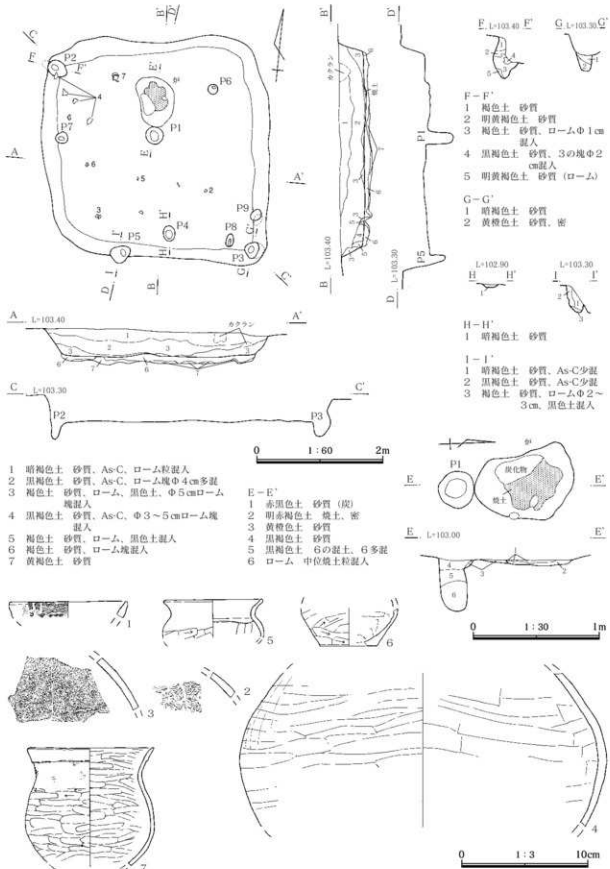
周溝 検出されていない。

炉 中央部の北寄りにある。長軸79cm、短軸55cm、深さ7cmの地床炉、焼土のほかに炭化物が残る。

覆土 暗褐色土、褐色土で自然埋没、ともにAs-Cが混入している。

遺物と出土状況 4の壺は西側から流れ込んだ状態、ほかは床面で散在している。

所見 出土した遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。



第21図 5号住居跡遺構図・遺物図

6号住居跡 (第22・23図 PL4・5・24)

概要 D区 75Q・R19・20グリッドのルーム漸移層上面で検出。形状 長方形 面積 22.59㎡ 長軸方位 N30° W 規模 長軸5.23m、短軸4.32m、残壁高53cm 床面 平坦、堅緻である。柱穴 掘り方まで含めて8本を検出。半数が埋際にある。長軸・短軸・深さは、P1が17・15・22cm、P2が52・41・54cm、P3が52・39・24cm、P4が32・21・31cm、P5が20・18・23cm、P6が24・22・14cm、P7が37・18・18cm、P8が22・14・15cmである。周溝 検出されていない。

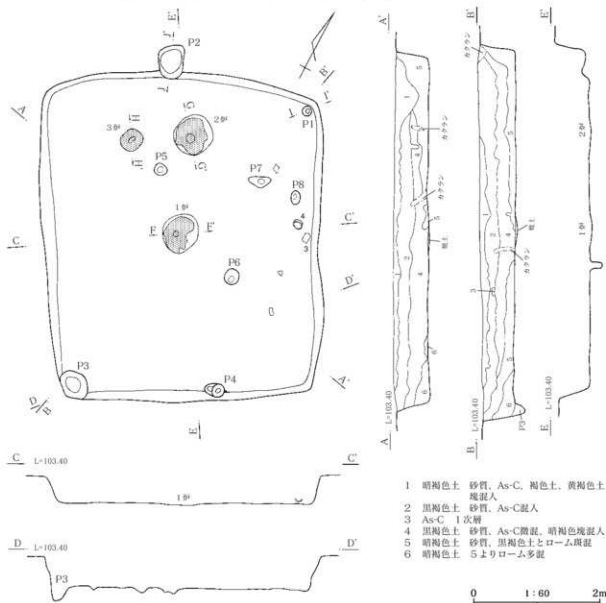
貯蔵穴 南西隅、P3をあてる。

炉 中央部の北寄りで南北に1号、2号、脇に3号がある。長軸・短軸・深さは、1号が66・58・4cm、2号が63・60・5cm、3号が36・36・4cmである。

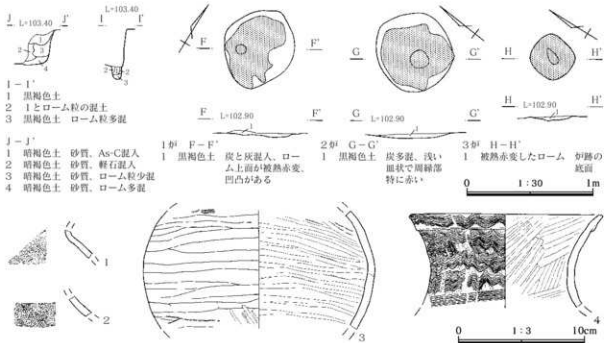
覆土 暗褐色土、黒褐色土で自然埋没、3層がAs-Cの1次層ブロックである。

遺物と出土状況 甕、壺が床面に散在している。

所見 出土した遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。



第22図 6号住居跡遺構図(1)



第23図 6号住居跡遺構図(2)・遺物図

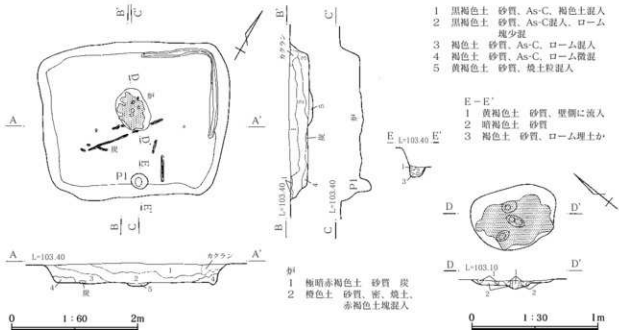
7号住居跡(第24図 PL5)

概要 D区 75P・Q19・20グリッドのローム漸移層上面で検出。焼失住居である。形状 方台形
面積 7.17㎡ 長軸方位 N57° E
規模 長軸2.95m、短軸2.43m、残壁高32cm。南

壁が北壁よりも30cm狭い。

床面 平坦、堅緻である。

柱穴 南壁際の中央部にP1がある。長軸・短軸・深さは、28・24・18cmである。



第24図 7号住居跡遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

周溝 北東隅だけで検出、長さ1mあまり、幅7～11cm、深さ3cmである。

炉 中央部に長軸68cm、短軸49cm、深さ4cmの地床炉がある。焼土の量が多い。

覆土 黒褐色土、暗褐色土で自然埋没、As-Cが混入している。

8号住居跡 (第25～27図 P L 5・24・25)

概要 D区 85P・Q1・2グリッドのローム漸移層上面で検出。形状 方形 面積 14.59㎡

長軸方位 N73°E 規模 長軸3.90m、短軸3.74m、残壁高50cm

床面 平坦、堅緻である。

柱穴 2本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が31・28・17cm、P2が33・26・16cmである。P3～P6は屋外で検出した。P3が41・37・32cm、P4が42・36・45cm、P5が37・28・37cm、P6が51・42・40cmである。

遺物と出土状況 垂木とみられる炭化材が住居の南側、床面に近い状態で出土。東西、南北でY字状に交差している。5点を分析し、クスギ節、コナラ節と同定された。

所見 未掲載の覆土遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。

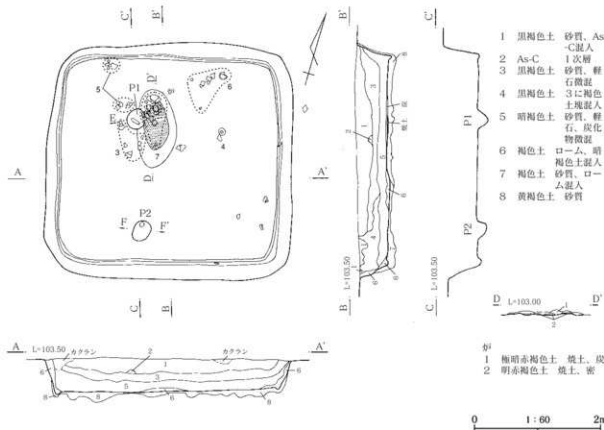
周溝 全周している。幅8～14cm、深さ3～5cmである。

炉 中央部北寄り、長軸112cm、短軸62cm、深さ7cmの地床炉、焼土とともに7の糞が出土。

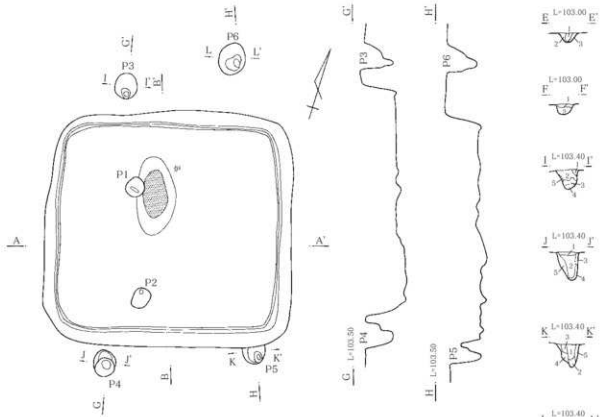
覆土 黒褐色土、暗褐色土で自然埋没、2層がAs-Cの1次堆積層である。

遺物と出土状況 壺、糞が出土、7は炉に据えられていて、周囲の床面には壺などの破片が散在する。

所見 出土した遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。



第25図 8号住居跡遺構図(1)



E-E'

- 1 黒褐色土 Φ5mmローム混入
- 2 にぶい・黄褐色土 黒色土と黄色土ローム混入、軟
- 3 黄褐色土 地山に近似、硬

I-I'

- 1 黄褐色土 砂質
- 2 黒褐色土 砂質、As-C30%混入、ローム、黒色土混入
- 3 褐色土 砂質、軽石少混、ローム多く混入
- 4 褐色土 砂質、ローム多く混入、下位堅硬
- 5 にぶい・黄褐色土 砂質

K-K'

- 1 黒色土 As-C30%混入
- 2 にぶい・黄褐色土 As-C、黒色土 (Φ3~4cm) 混入
- 3 黒褐色土 As-C30%混入
- 4 褐色土 ロームに黒色土 (Φ3~4cm) 混入
- 5 黄褐色土 砂質、密

F-F'

- 1 暗褐色土 ロームと黒色土混入
- 2 黄褐色土 Φ1cmのローム塊混入

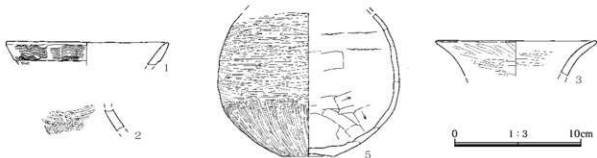
J-J'

- 1 黒褐色土 砂質、As-C30%混入、ローム、黒色土混入
- 2 暗褐色土 砂質、As-C混入、ローム、黒色土混入
- 3 褐色土 砂質、As-C混入、ローム、黒色土混入
- 4 暗褐色土 砂質、ローム、黒色土混入
- 5 暗褐色土 砂質、ローム、黒色土混入、軟

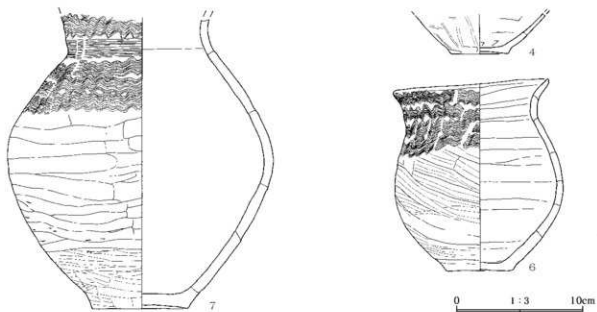
L-L'

- 1 黒褐色土 砂質、As-C30%混入
- 2 褐色土 砂質、As-C、黄色土多く混入
- 3 黒褐色土 砂質、As-C、黒色土多く混入
- 4 黄褐色土 砂質、軟
- 5 暗褐色土 砂質、黄色土多く混入
- 6 にぶい・黄褐色土 砂質

0 1:60 2m



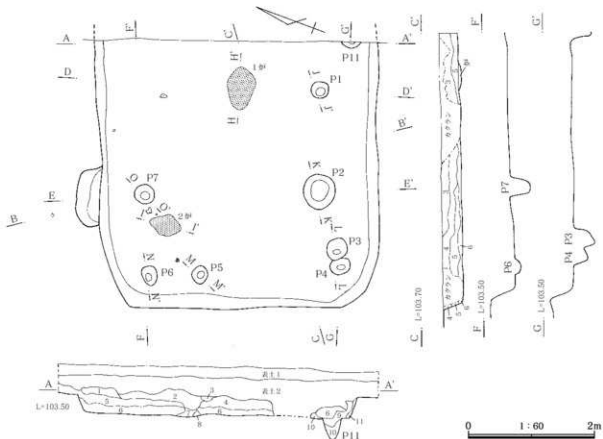
第26図 8号住居跡遺構図(2)・遺物図(1)



第27図 8号住居跡遺物図(2)

9号住居跡 (第28・29図 P.L.5・6・25)

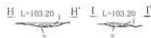
概要 D区 85P・Q2・3グリッドのローム漸移 層上面で検出。形状 推定方形、東側は調査区外で



第28図 9号住居跡遺構図(1)

A-A'

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 1 褐色土 砂質、軽石少混、ローム混入全体に黄変 | 6 黒褐色土 砂質 |
| 2 黒褐色土 砂質、軽石混入20% | 7 褐色土 砂質、軽石多混、2に近似 |
| 3 黒褐色土 砂質 | 8 黄褐色土 砂質、ローム混入 |
| 4 暗褐色土 砂質、As-C混入20% | 9 にふい黄褐色土 砂質 |
| 5 黒褐色土 砂質、As-C混入 | 10 褐色土 ローム多く黒色土混入 |
| | 11 黄褐色土 砂質 |



- 1 1st H-H'・2nd I-I'
1 黒褐色土 砂質、炭化物、灰混入
2 黄土

B L-103.70



B'

- B-B'・C-C'
1 暗褐色土 砂質、軽石多混
2 褐色土 砂質、軽石、暗褐色土塊混入
3 黒褐色土 砂質、As-C混入
4 暗褐色土 砂質、ローム混入、軽石微混
5 黒褐色土 砂質、軽石微混
6 黄褐色土 暗褐色土混入

D L-103.50



D'

E L-103.50



E'

M-M'

- 1 黒褐色土 砂質、軽石微混、ローム混入

J L-103.10



K L-103.10



L L-103.10



M L-103.10



N L-103.10



O L-103.20



J-J'・K-K'

- 1 黒褐色土 砂質、軽石、ローム微混
2 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入

L-L'

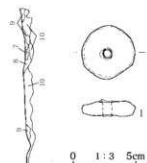
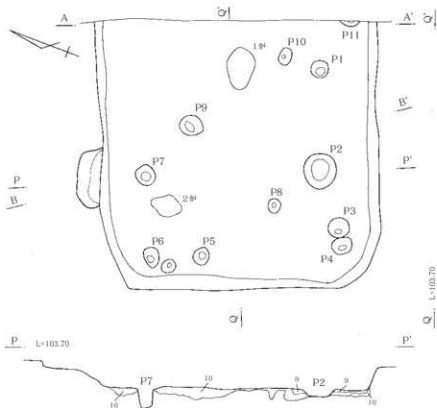
- 1 黒褐色土 砂質、軽石、ローム微混
2 黄褐色土 砂質、ローム多混、黒褐色土混入
3 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入
4 黒褐色土 砂質、ローム、炭化物微混
5 暗褐色土 砂質、ローム多混

N-N'

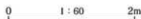
- 1 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入

O-O'

- 1 黒褐色土 砂質、軽石、ローム微混、炭化物混入
2 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入



- 掘り方
7 黄土
8 褐色土 暗褐色土混入
9 暗褐色土 砂質、ローム混入、密
10 黄褐色土 砂質



第29図 9号住居跡遺構図(2)・遺物図

第3章 検出された遺構と遺物

ある。北壁の一部に間口191cm、奥行37cmの張り出しがある。面積 18.48㎡以上

長軸方位 N69° E 規模 長軸4.38m以上、短軸4.22m、残壁高35cm 床面 平坦、堅緻である。柱穴 掘り方を含めて11本を検出、推定4本のうち、P2、P7が主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P2が55・52・12cm、P7が32・29・36cmである。ほかの9本は長軸が30cm前後の円形、深さが8～43cmである。周溝 検出されていない。

3 土坑

82号土坑 (第30図 P L15・29)

概要 A区 65S17・18グリッド、谷地の中央部にある。ローム漸移層で検出。

形状 正方形 規模 長軸78cm、短軸75cm、深さ

16cmである。長軸方位 N70° E

覆土 黒褐色土で埋没。その中央部に灰褐色土が分布。楕円形をしていて、糞をつつみこんだような状態である。灰褐色土は、糞の中まで詰まっている。遺物と出土状態 中央部で日縁部を北西側にむけた糞が出土。糞は、埋没していた土坑にあらかじめ穴を掘り、据えたように見える。胴部には灰褐色土が詰まった状態で、糞が倒れたというよりも、横に寝かされていた可能性の方が高い。糞の中にあつた土の洗浄等

炉 中央部東寄りで1号、北西寄りで2号を検出。長軸・短軸・深さは、1号が67・44・8cm、2号が50・35・7cmである。

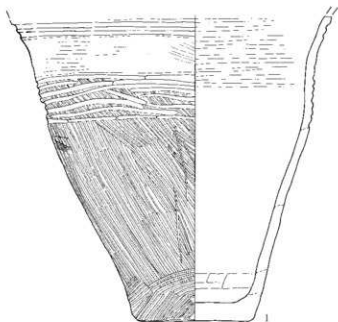
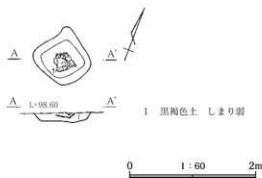
覆土 暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土などで自然埋没。As-Cが混入している。

遺物と出土状況 覆土から糞の破片が少量出土した。1は土製円盤である。

所見 出土した遺物から、住居跡の時期は弥生時代後期である。

はしていない。

所見 出土した遺物から、時期は弥生時代中期前半である。糞を利用した再葬墓と考えられる。



第30図 82号土坑遺構図・遺物図

第3節 古墳時代

1 概要

住居跡18軒、土坑4基が検出されている。住居跡は、17軒がD区に集中していて、南端といえる1軒だけがB区にある。前期が11軒、中期が5軒、時期不明が2軒である。20mあまりの距離をおい

て、南北2つの群に分けることができる。北が13軒、南が5軒、大勢は北が前期、南が中期である。前期は19号を典型とする焼失住居、中期では一辺が8m近い超大型の住居のあることが特徴である。

2 住居跡

1号住居跡 (第31~34図 P L 3・21・22)

概要 D区 75O~Q-14~16グリッドのローム漸移層で検出。南隅は削平、掘り方で検出する。

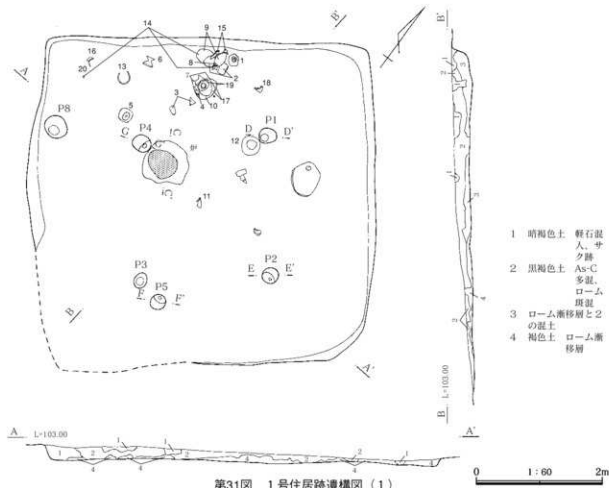
形状 方形 面積 28.38㎡ 長軸方位 N54° E

規模 長軸5.50m、短軸5.16m、残壁高37cm

床面 平坦、ロームを多く含む暗褐色土で貼床。

柱穴 掘り方を含めて10本を検出した。長軸・短

軸・深さは、P1が32・26・46cm、P2が24・24・14cm、P3が26・20・33cm、P4が30・20・20cmである。周溝 はっきりとした掘り方は検出されていない。貯蔵穴 検出されていない。炉 北壁寄りの中央部、長軸71cm、短軸66cm、深さ6~9cmの楕円形をした地床炉である。



第31図 1号住居跡遺構図(1)

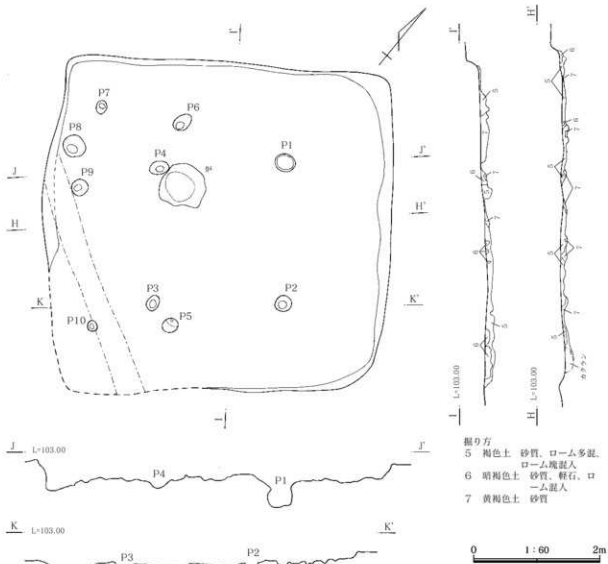
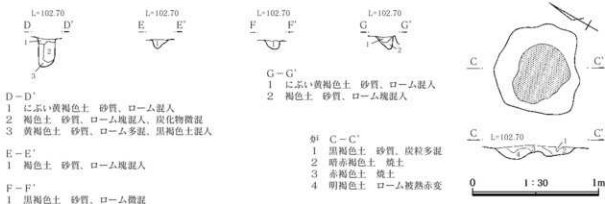
第3章 検出された遺構と遺物

覆土 黄褐色土、暗褐色土、褐色土で自然埋没。

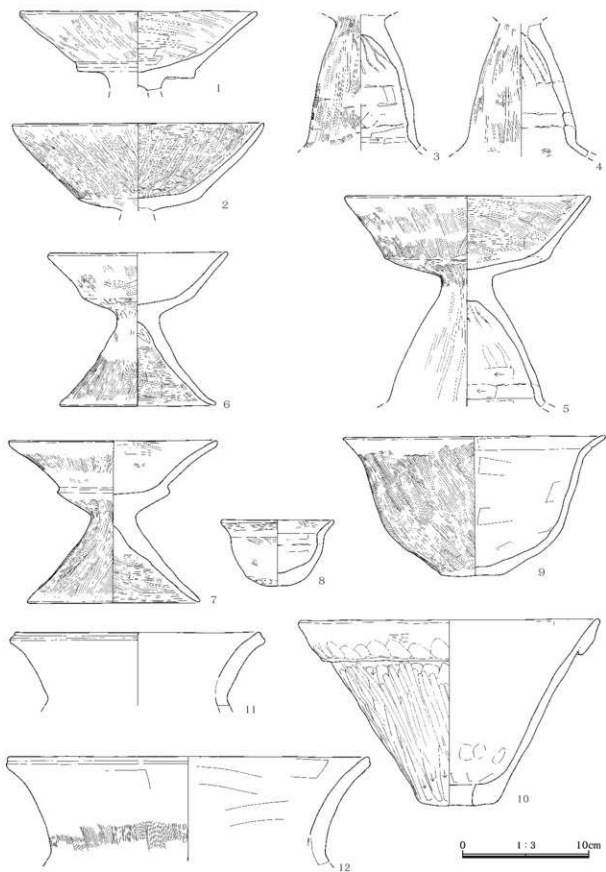
遺物と出土状態 高坏、甕など完形に近いものが北西壁沿いに集中している。原位置にあり、壁際に立

てかけていたものか。

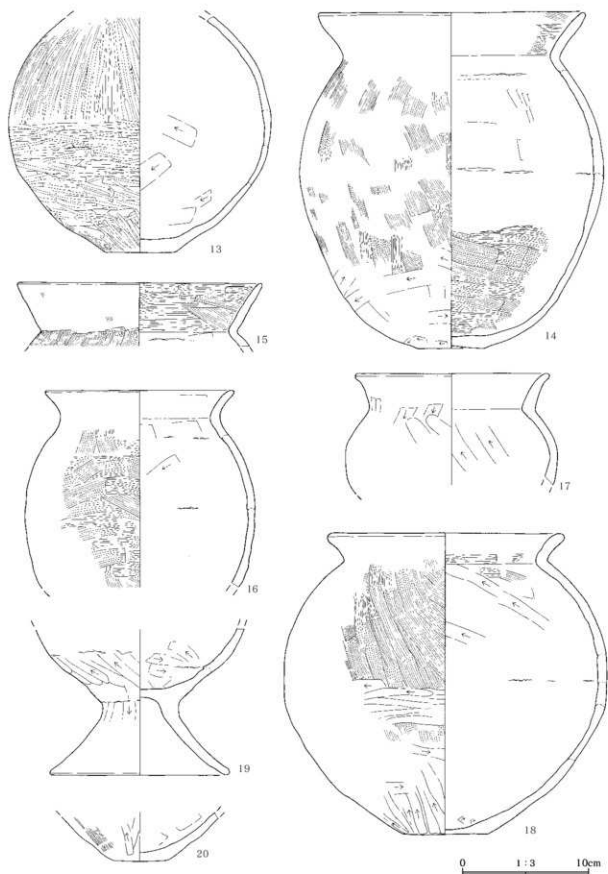
所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代中期である。



第32図 1号住居跡遺構図(2)



第33図 1号住居跡遺物図(1)

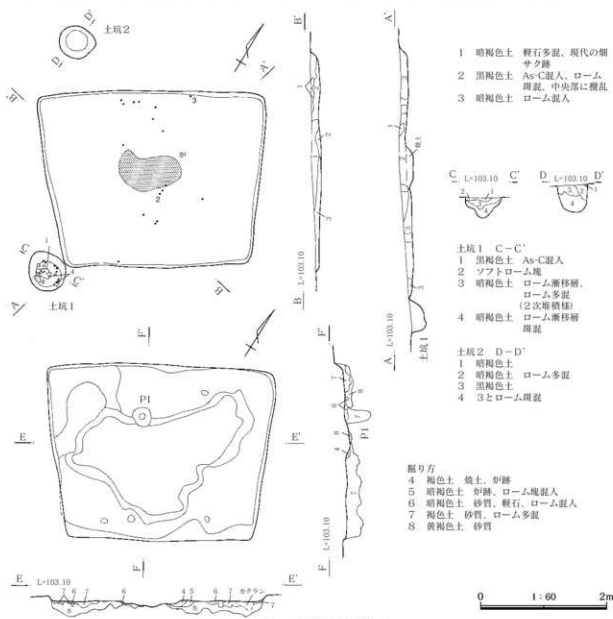


第34図 1号住居跡遺物図(2)

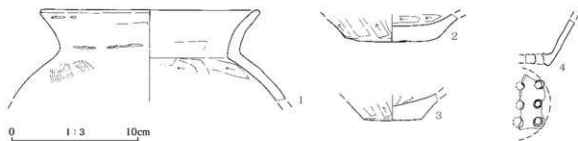
2号住居跡 (第35・36図 P L 3・23)

概要 D区 75O16・17グリッドのローム漸移層で検出。形状 方台形 北壁75cm広い。面積 9.03㎡ 長軸方位 N59° E 規模 長軸北壁3.60m、南壁2.85m、短軸2.80m、残壁高14~17cm、南西側は床が露出、土坑1を含めて長方形の可能性もある。床面 掘り込んだローム上に薄い貼り床。掘り方は、壁際の全体が一段低くなる。柱穴 中央部の北寄り、掘り方で1本を検出した。竈に接している。長軸・短軸・深さは、30・27・42cmである。周溝 検出されていない。貯蔵穴 検出されていない。

い。屋外にある2基の土坑に可能性がある。土坑1は、長軸66cm、短軸59cm、深さ35cmの方形。甕と甕が出土した。土坑2は、長軸53cm、短軸50cm、深さ45cmの円形である。出土した遺物はない。竈 北壁寄りの中央部、長軸95cm、短軸50cm、深さ12cmの楕円形、厚く焼土を残す。覆土 黒褐色土とロームの斑状混土で自然埋没。遺物と出土状態少量の上に大半が細片で、接合率も低い。1の甕と4の甕は土坑1から出土した。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代中期である。



第35図 2号住居跡構造図



第36図 2号住居跡遺物図

4号住居跡 (第37～42図 P L 4・23・24)

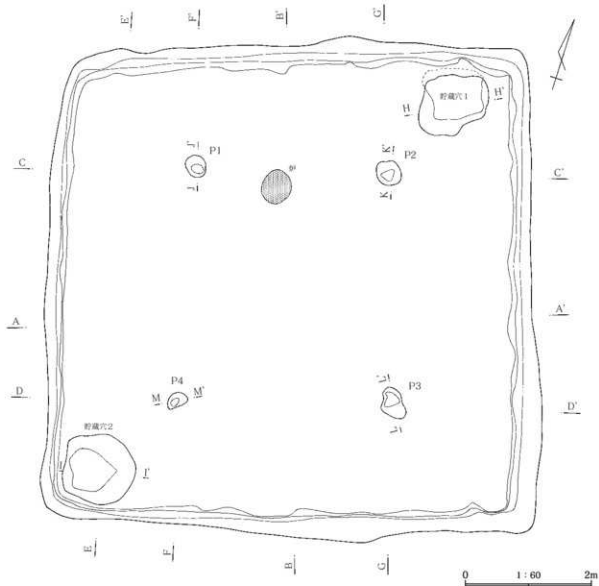
概要 D区 75O～Q-17～19グリッドのローム

漸移層で検出。31号土坑と重複。本跡が新しい。

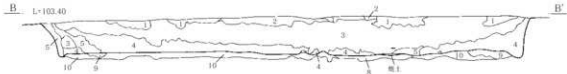
形状 方形 面積 60.14㎡ 長軸方位 N17°W

規模 長軸7.78m、短軸7.73m、残壁高51～64cm

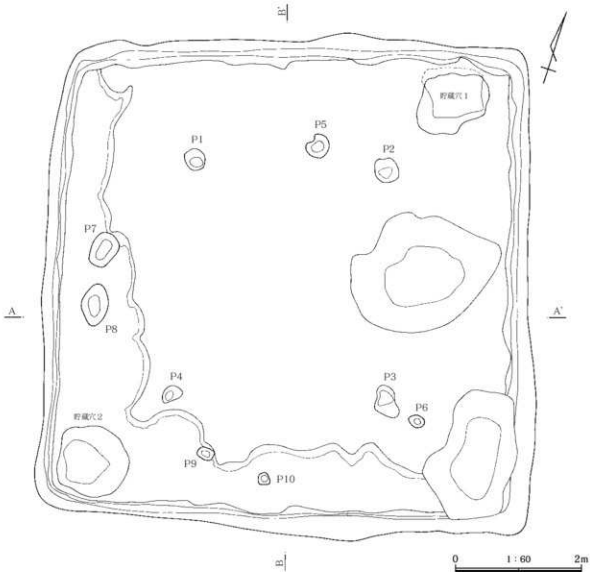
床面 平坦で堅緻である。掘り方は、西と南の壁際が一段深く掘り下げられている。



第37図 4号住居跡遺構図(1)



- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 軽石多混、現代の耕作土 | 6 焼土塊 4が被熱強い赤変、南西隅は上位に炭化材 |
| 2 As-B 1次層 | 7 黄褐色土 壁際の崩落土か |
| 3 黄褐色土 砂質、As-C上位多混、下位暗褐色土混 | 8 褐色土 砂質、焼土多混、ローム塊混入 |
| 4 暗褐色土 砂質、ローム塊混入、中位ローム、壁際に暗褐色土多混 | 9 褐色土 砂質、ローム多混 |
| 5 暗褐色土 ローム粒少混、4に近似、4より暗 | 10 黄褐色土 砂質 |



第38図 4号住居跡遺構図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

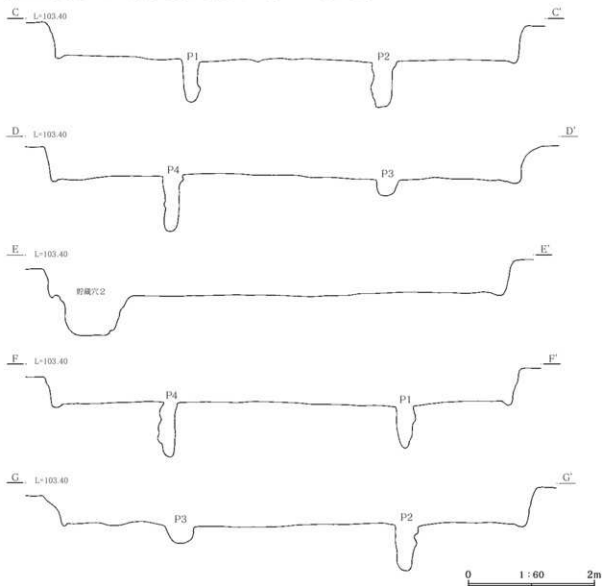
柱穴 掘り方を含めて10本を検出。P1～P4が
 主柱穴、P9、P10が入口施設である。長軸・短
 軸・深さは、P1が34・30・60cm、P2が37・37
 ・73cm、P3が54・35・25cm、P4が35・22・
 90cmである。P9が55・41・7cm、P10が66・
 42・18cmである。残りは、長軸が18～38cm、短
 軸が18～35cm、深さ17～27cmである。P2、P3
 は、東に心をずらせて建て替えをしている。

周溝 全周。幅12～26cm、深さ3～9cmである。
 貯蔵穴 新田2基がある。北東隅の1号が掘り方で、
 南西隅の2号が床面で検出。1号は、長軸126cm、短
 軸104cm、深さ30cmの方形。北側が壊れている。

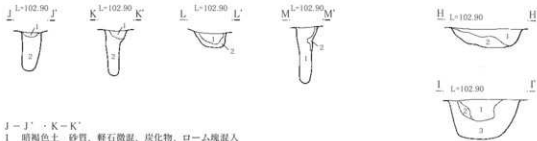
人為埋没。2号は、長軸112cm、短軸111cm、深さ
 62cmの方形。3層下位で、上蓋らしい炭化物を検出。
 炉 北壁寄りの中央部、長軸54cm、短軸47cm、楕
 円形をした浅い掘り込みである。

覆土 上面にAs-Bが堆積、黒褐色土、暗褐色土で
 自然埋没。東壁際で焼土を伴う炭化物が出土。

遺物と出土状態 北西を除く、炉の北東から南西、
 床面から10cm前後の高さに多い。1の高坏、9の甕
 が4m四方に散在するほかは、単独の破片のままで
 ある。南西の破片は、2号住居跡1の甕と接合する。
 所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代中
 期である。



第39図 4号住居跡遺構図(3)



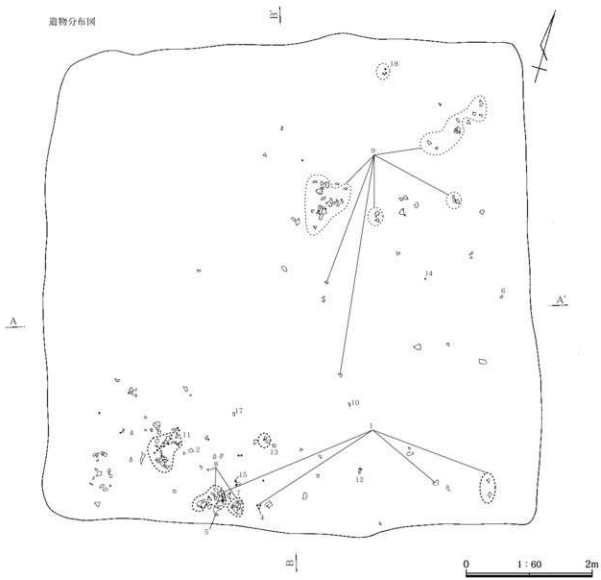
J-J' · K-K'
 1 暗褐色土 砂質、軽石微混、炭化物、ローム塊混入
 2 にぶい黄褐色土 砂質、軽石、黒色土塊、ローム塊混入

L-L'
 1 暗褐色土 軽石微混、炭化物、ローム塊混入
 2 黄褐色土 砂質、ローム多混、暗褐色土混入

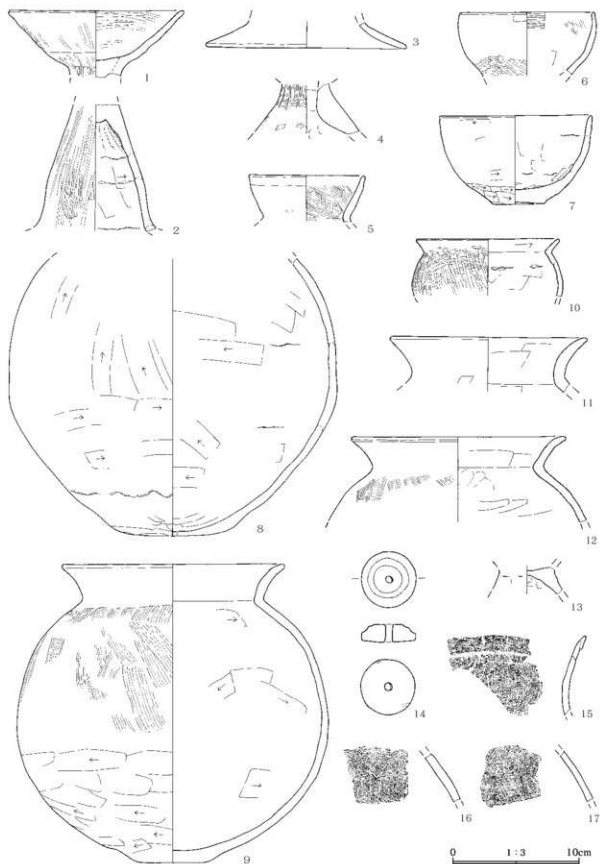
M-M'
 1 にぶい黄褐色土 砂質、軽石、黒色土塊、ローム塊混入
 2 にぶい黄褐色土 砂質、ローム多混、ローム塊混入

貯蔵穴1 H-H'
 1 黒褐色土 砂質、軽石混入、ローム塊微混
 2 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入、ローム塊多混

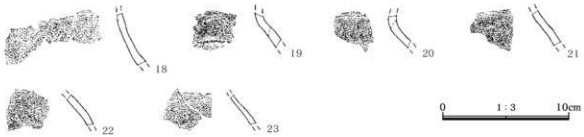
貯蔵穴2 I-I'
 1 暗褐色土 ローム粒多混
 2 暗褐色土 砂質、粗粒
 3 暗褐色土 下位に炭化物多混



第40図 4号住居跡遺構図(4)



第41図 4号住居跡遺物図(1)

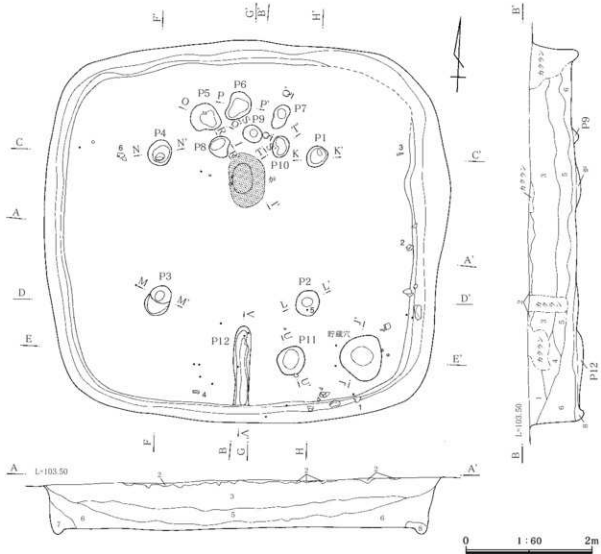


第42図 4号住居跡遺物図(2)

10号住居跡 (第43~46図 P.L.6・25)

概要 D区 85R・S4・5グリッドのローム漸移層で検出。写真の白線は、周堤帯の痕跡と考えた。
 形状 方形 面積 38.18㎡ 長軸方位 N86°E
 規模 長軸6.30m、短軸6.06m、残壁高80cm

床面 平坦で堅緻である。南壁の中央から間仕切り溝が付く。長さ1.28m、幅35cm前後、深さ15~18cmである。P11と対になり入口の跡か。掘り方は、南壁からP2とP3までの間が土坑状に窪む。



第43図 10号住居跡遺構図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

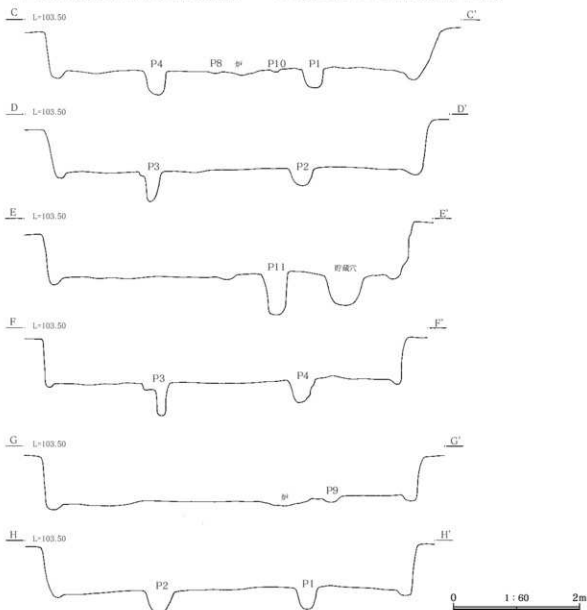
柱穴 掘り方を含めて11本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が35・31・32cm、P2が40・40・32cm、P3が49・38・52cm、P4が40・38・50cmである。P5～P10は、長軸が30～50cm、短軸が23～44cm、深さが7～14cmである。P11は、長軸44cm、短軸43cm、深さ67cmで深い。周溝 全周している。幅20cm、深さ9cmである。貯蔵穴 南東隅にある。長軸70cm、短軸68cm、深

さ48cmの方形。*炬* 北壁寄りの中央部、長軸86cm、短軸55cm、深さ9cmの楕円形である。

覆土 検出面にAs-Bが堆積している。As-Cが混入した暗褐色土、黒褐色土で自然埋没。

遺物と出土状態 少量で半数以上は覆土上位での混入である。3の器台、2の鉢、6の台付甕が床から3～5cmで出土。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。

- | | |
|---------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 砂質 | 5 黒褐色土 As-C混入 |
| 2 As-B 1次層 | 6 暗褐色土 砂質、軽石、黒褐色土、ローム混入、周溝の流れ込みか |
| 3 黒褐色土 As-C、褐色土塊混入 | 7 暗褐色土 砂質、軽石、ローム微混 |
| 4 にぶい黄褐色土 砂質、As-C、黒褐色土塊混入 | 8 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入、軽石微混 |



第44図 10号住居跡遺構図(2)



剖面 J-J'

- 1 褐色土 砂質、ローム、黒褐色土混入、焼土粒混入
2 赤褐色土 砂質、ローム、焼土多混入、黒褐色土混入

貯蔵穴 J-J'

- 1 黒褐色土 砂質、ローム粒、焼土粒混入、軽石混入

K-K'

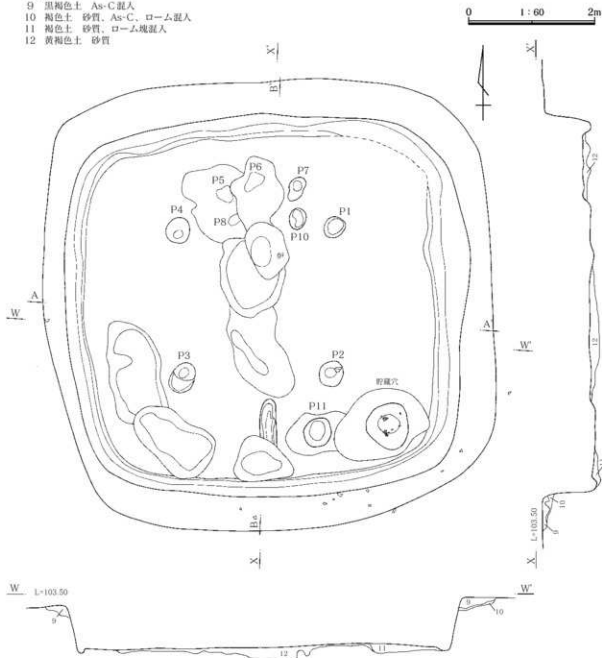
- 1 黒褐色土 砂質、ローム塊混入、軽石混入
2 褐色土 砂質、黒褐色土、ローム混入

L-L'・M-M'

- 1 褐色土 砂質、黒褐色土、ローム塊混入
2 褐色土 砂質、ローム多混入

掘り方

- 9 黒褐色土 As-C混入
10 褐色土 砂質、As-C、ローム混入
11 褐色土 砂質、ローム塊混入
12 黄褐色土 砂質



第45図 10号住居跡遺構図(3)

第3章 検出された遺構と遺物



N-N'

- 1 黒褐色土 砂質、軽石、ローム塊混入
- 2 褐色土 砂質、黒褐色土、ローム塊混入
- 3 褐色土 砂質、ローム多混

O-O' ~ T-T'

- 1 黒褐色土 砂質、ローム塊混入、下に焼土
- 2 褐色土 砂質、ローム多混

U L=102.80 U'



V L=103.50 V'

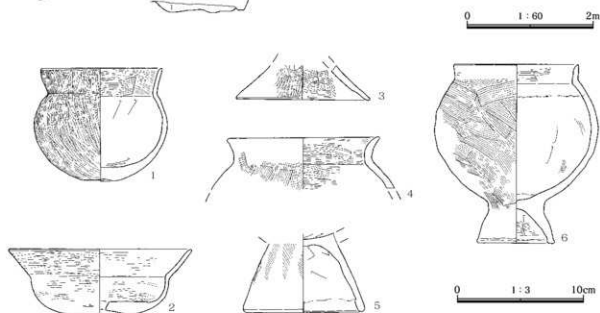


U-U'

- 1 黒褐色土 砂質、ローム混入、軽石、炭化物微混
- 2 褐色土 砂質、ローム多混、黒褐色土塊、焼土粒混入

V-V'

- 1 に近い黄褐色土 砂質、ローム多混、炭化物微混



第46図 10号住居跡遺構図(4)・遺物図

11号住居跡(第47図 P L 6・25)

概要 D区 86A4・5グリッドのローム漸移層

で北東隅から南東隅を検出。残りは土地改良で削平。

南東隅は15号住居跡と重複している。

形状 推定方形 面積 6.72㎡以上

長軸方位 N-S 規模 長軸4m以上、短軸1.68m以上、残壁高20cm

床面 ロームを含む褐色土、黄褐色土で貼り床。

柱穴 検出されていない。

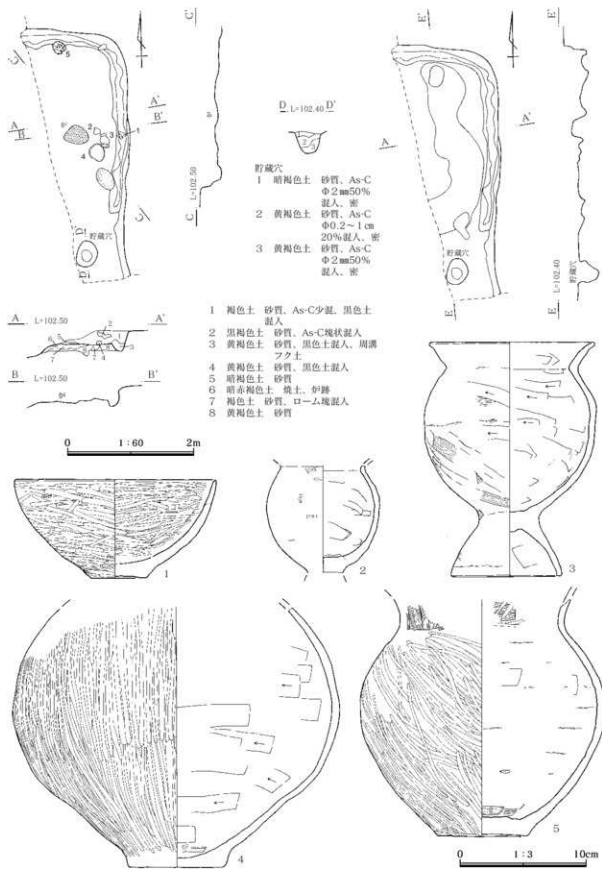
貯蔵穴 南東隅、長軸44cm、短軸41cm、深さ35cm

の方形。褐色土ほかで自然埋没。

炉 中央部の壁寄りで、東壁から50cmの所に長軸40cm、短軸30cmの楕円形で、浅い掘り込みがある。覆土 褐色土で自然埋没。

遺物と出土状態 炉の脇で2・3の台付甕、4の壺が出土。台付甕は南に倒れた状態。1の鉢は、周溝にかかり壁の上から崩落したものであろう。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第47図 11号住居跡遺構図・遺物図

12号住居跡 (第48図 P L 7・25)

概要 D区 85R・S7・8グリッドのローム漸移層で検出。縄文時代の35号土坑に南西隅が重複。

14号、20号住居跡とは、接するような状態にある。

形状 方形 面積 9.24㎡ 長軸方位 N79° W

規模 長軸3.06m、短軸3.02m、残壁高18cm

床面 ローム層まで掘り込み平坦にする。特に硬化した面はない。掘り方は、P2と炉を境にした北西側が浅い土坑の連続したようになっている。

柱穴 2本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が22・20・26cm、P2が26・22・32cmである。

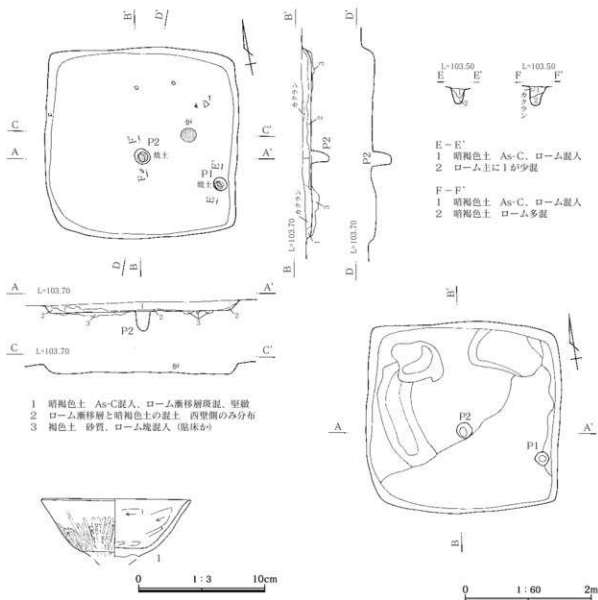
ともに上面には焼土が堆積している。

周溝・貯蔵穴 検出されていない。

炉 中央部の東壁から70cmの所に長軸24cm、短軸22cmの円形、浅い掘り込みがある。強く焼けている。

覆土 ロームブロックが混入する暗褐色土で埋没。遺物と出土状態 炉の北東で1の高坪が出土。その他は小さな破片で、縄文土器片、剥片も混入している。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第48図 12号住居跡遺構図・遺物図

13号住居跡 (第49・50図 P L 7・26)

概要 D区 85R 7・8グリッドのローム漸移層で検出。掘り方の中央で土坑が検出されている。東側は、調査区外である。形状 方形 面積 13.70 m²以上 長軸方位 西壁で計測 N 4° W 規模 長軸4.42m、短軸3.10m以上、残壁厚26cm 床面 ローム層を掘り込み平坦にする。硬化した面はない。柱穴 南壁際の中央で2本を検出した。入口施設とみられる跡で約50cmの間隔で対になる。長軸・短軸・深さは、P 1が24・24・38cm、P 2が62・30・29cmである。周溝 検出されていない。

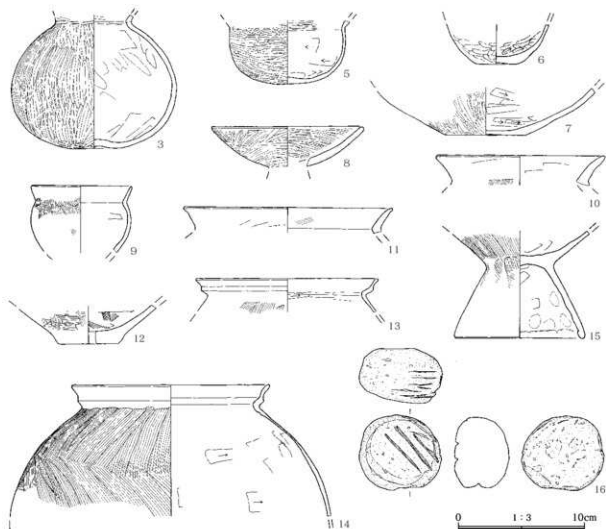
貯蔵穴 南西隅にある。長軸60cm、短軸56cm、深さ34cmの方形。黒褐色土で埋没。遺物はない。

炉 中央部の北壁寄りにある。長軸63cm、短軸41cmの楕円形をした浅い掘り込みである。覆土 人為埋没の可能性がある。黒褐色土、暗褐色土などで埋没。1層と2層の境に薄い焼土層がある。遺物と出土状態 壁際に器形を残すものが点在する。ただし、13~15の台付甕など出土位置は高く、1層下位が2層に含まれている。貯蔵穴の周囲にある2~6、8が壁際在原位置である。1層には縄文時代の打製



第49図 13号住居跡遺構図・遺物図(1)

石片などが混入している。所見 出土した遺物の特 徴から、時期は古墳時代前期である。



第50図 13号住居跡遺物図(2)

14号住居跡 (第51図 P L 7)

概要 D区 85S 7グリッドのローム漸移層で検出。12号住居跡とは接する状態で、2基の土坑と重複している。長軸・短軸・深さは、1号が96・84・24cmの方形、2号が262・116・34cmの隅丸長方形である。長軸線上に小ピットがあく。2基ともに縄文時代の可能性がある。

形状 方形 面積6.92㎡

長軸方位 N57° E

規模 長軸2.86m、短軸2.42m、残壁高12cm

床面 ローム漸移層まで掘り込み平坦にしている。

柱穴 東西の長軸線上で2本を検出した。土坑との

重複で壁と接しているが、2本は壁よりも外側にある。長軸・短軸・深さは、P1が22・20・32cm、P2が25・20・32cmである。

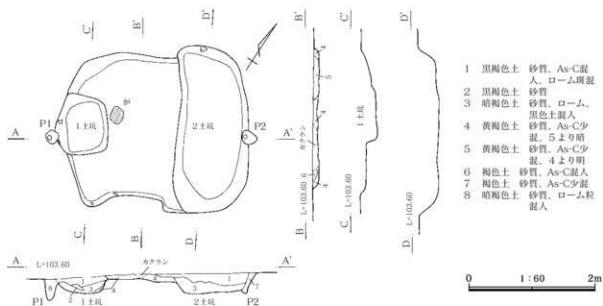
周溝・貯蔵穴 検出されていない。

炉 中央部から西壁寄りにある。長軸27cm、短軸23cmの円形をした地床炉である。強く焼けていて焼土は硬化している。

覆土 黄褐色土、褐色土で自然埋没。

遺物と出土状態 縄文土器片、剥片が出土。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第51図 14号住居跡遺構図

15号住居跡 (第52・53図 P L 8・26)

概要 D区 86A 3・4グリッドのローム漸移層で北東隅から南東隅を検出。残りは土地改良で削平。北西部は11号住居跡と重複している。

形状 推定方形

面積 10.26㎡以上

長軸方位 N6°E 東壁で計測

規模 長軸4.62m以上、短軸 2.22m以上、残壁高20cm 床面 平坦で堅緻である。

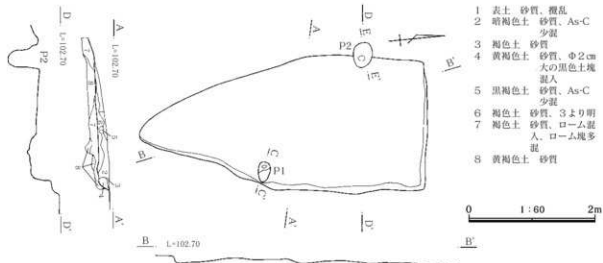
柱穴 掘り方を含めて2本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が31・20・30cm、P2が39・30・50cmである。

周溝・貯蔵穴・炉 検出されていない。

覆土 黄褐色土、暗褐色土、褐色土で自然埋没。

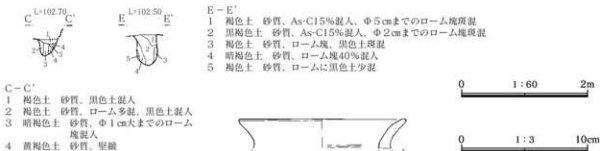
遺物と出土状態 1の甕は覆土で出土した。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第52図 15号住居跡遺構図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

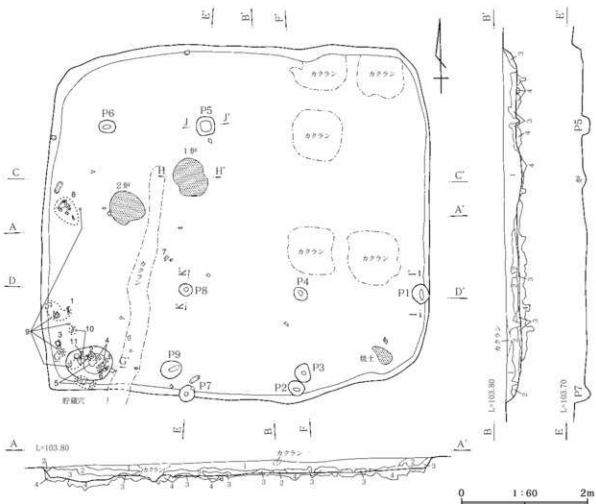


第53図 15号住居跡遺構図(2)・遺物図

16号住居跡 (第54~56図 P.L.8・26)

概要 D区 85R~T9・10グリッドのローム漸移層で検出。34号土坑と重複。本跡が新しい。攪乱は民家の地業跡で、7本のピットは床束の跡か。住居跡とは区別ができず、柱穴の可能性のまま掲載する。形状 方形 面積 34.62㎡ 長軸方位 N89°

W 規模 長軸6.16m、短軸5.62m、残壁高21~28cm 床面 ローム層まで掘り込み平坦にする。硬化面はない。掘り方は、西から南の壁沿いが幅1mで深く、ロームと黒褐色土の混土で貼床をする。柱穴 掘り方を含めて特定できるものはない。



第54図 16号住居跡遺構図(1)

周溝 検出されていない。貯蔵穴 南西隅にある。長軸72cm、短軸54cm、深さ58cmの方形。覆土の中位からは、器台、鉢が出土。

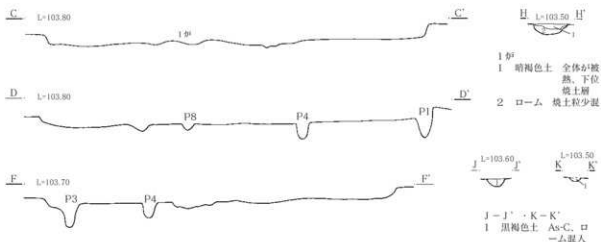
炉 中央部からみて北西寄りに2基がある。長軸・短軸・深さは、1号が64・50・18cm、2号が58・50cmのともに円形をした掘り込みの浅い地床炉である。中心には炭が多く、周縁の方が強く焼けてい

る。南東隅の焼土塊は炭化材に伴う。

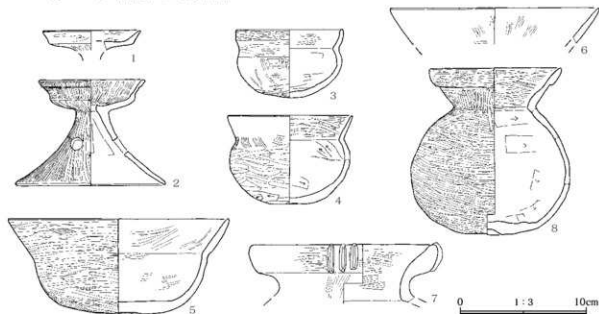
覆土 ロームブロックを含む暗褐色土で自然埋没。遺物と出土状態 南西隅から西壁際で出土。なかでも貯蔵穴とその周囲に集中している。壁際は置かれた状態。甕は少なく、小型の鉢、器台が多い。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。

- 1 As-C混暗褐色土 壁際にローム粒多混
- 2 ローム漸移層を主に1が少混 壁際はローム多く混
- 3 ローム漸移層とロームの混土
- 4 ソフトロームと黒褐色土の混土

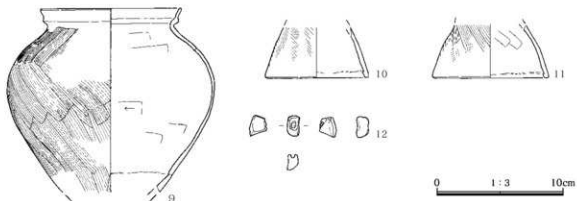
- G L=103.50 G' 貯蔵穴
- 1 暗褐色土 軽石少混、ローム多混
 - 2 1が攪拌された状態
 - 3 黒褐色土 ローム塊混入
 - 4 黄褐色土 ローム多混



- L-103.60 L' 1-1'
- 1 黒褐色土 砂質、ローム粒多混
 - 2 黒褐色土 ローム粒1より多混
 - 3 黒褐色土 ローム多く攪拌



第55図 16号住居跡遺構図(2)・遺物図(1)

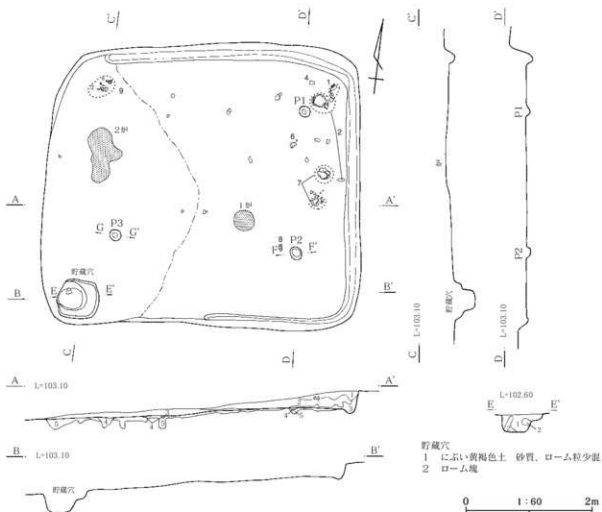


第56図 16号住居跡遺物図(2)

17号住居跡 (第57・58図 P L9・27)

概要 D区 85T7・8、86A・B7・8グリッ
下のローム漸移層で検出。西壁から約2mの範囲ま
では床面まで削平。プランは掘り方で決める。形状

方形 面積 22.16㎡ 長軸方位 N82° E
規模 長軸4.98m、短軸4.45m、残壁高30cm 床
面 ローム層まで掘り込み平坦にする。1号炉があ



第57図 17号住居跡遺構図(1)

る中央部は堅緻である。柱穴 4本主柱穴のうち北西側をのぞき3本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が17・17・4cm、P2が22・18・6cm、P3が19・17・9cmである。周溝 西壁を除いて検出。幅15~20cm、深さ3~10cmである。貯蔵穴 南西隅にある。60cm四方の掘り方の中に、一段低くして長軸47cm、短軸42cm、深さ30cmの方形のものがある。炉 中央部からみて南東寄りか1号、西壁寄

りで検出されたのが2号である。長軸・短軸は、1号が34・31cmの円形、2号が88・48cmの小判型である。2号は、複数が連続したものでらしく、甕を据えた跡にも見える円形の痕跡が2箇所もある。

覆土 暗褐色土で自然埋没。遺物と出土状態 東壁寄りで1・2の壺、6の器台、7の台付甕が出土。9の台付甕だけが北西隅にある。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。

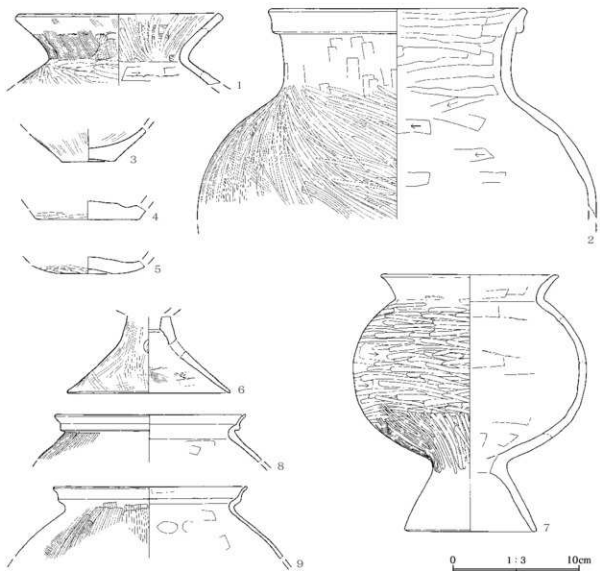
- 1 暗褐色土 軽石混入
- 2 暗褐色土 As-C土混、壁際ローム粒多混
- 3 暗褐色土 ローム層砂層混入
- 4 褐色土 砂質、ローム混入
- 5 黄褐色土 砂質



F-F' 1 暗褐色土 ローム粒多混



0 1:60 2m



第58図 17号住居跡遺構図(2)・遺物図

18号住居跡 (第59・60図 P.L.9・27)

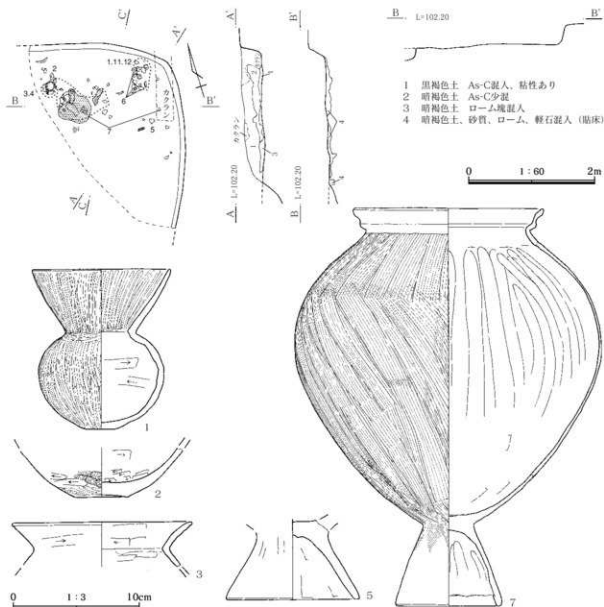
概要 D区 86C・D10・11グリッドのローム漸移層で検出。焼失住居。北東隅だけで、残りは土地改良等で削平。形状 推定方形 面積 7.45㎡以上 長軸方位 N38° E、東壁で計測 規模 長軸 2.98m以上、短軸2.50m以上、残壁高39cm 床面 ローム漸移層まで掘り込み平坦にする。ロームを混入した暗褐色土で薄い貼床。硬化面は見られない。柱穴・周溝・貯蔵穴 検出されていない。周溝は、本来なかった可能性が高い。

炉 北壁寄りに長軸55cm、短軸52cmの円形をした浅い掘り込みがある。

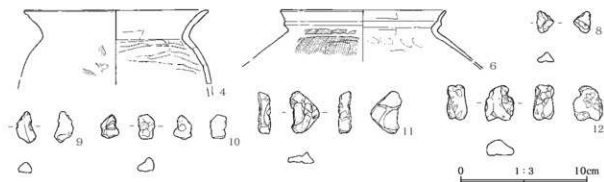
覆土 暗褐色土、黒褐色土で埋没、焼失住居のために炭化物が多く混入する。

遺物と出土状態 器形がわかるものでは、炉の脇で7のS字状口縁台付甕、壁際で1の直口壺が出土。ほかは破片状態である。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第59図 18号住居跡遺構図・遺物図 (1)

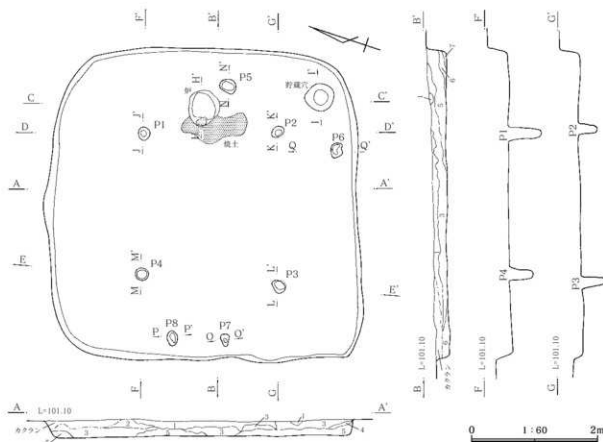


第60図 18号住居跡遺物図(2)

19号住居跡 (第61~64図 P.L.9・10・28)

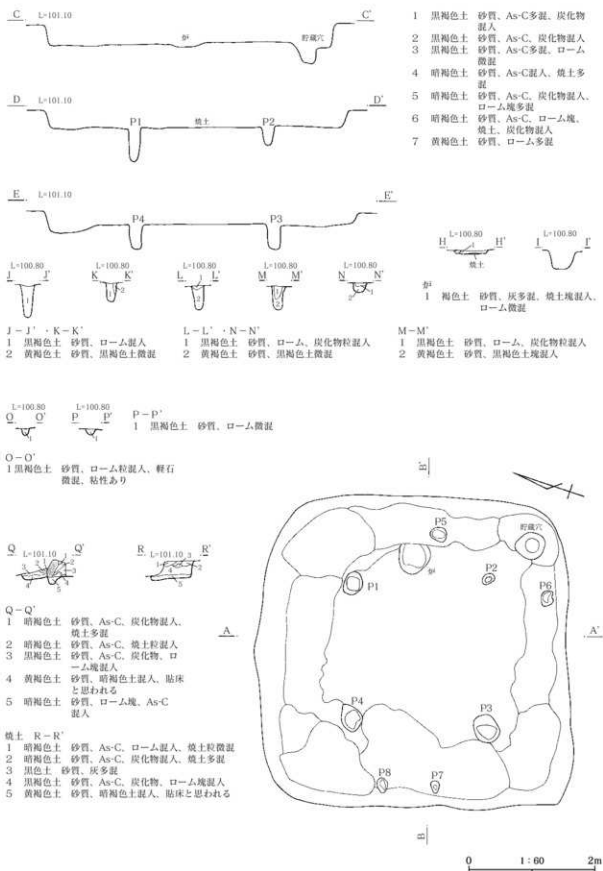
概要 D区 86D・E8・9グリッドのローム漸移層で検出。焼失住居。形状 方形 面積 24.35㎡ 長軸方位 N18°W 規模 長軸4.97m、短軸4.90m、残壁高31cm 床面 ローム層まで掘り込み平坦にする。堅壁である。掘り方は、主柱穴から壁の間が一段深く、暗褐色土に黒褐色土、ロームを混ぜた土で貼床をしている。

柱穴 8本を検出した。P1~P4が主柱穴、P7・P8が入口施設である。長軸・短軸・深さは、P1が21・18・53cm、P2が21・16・27cm、P3が23・17・38cm、P4が20・20・36cmである。P5が27・22・17cm、P6が23・19・16cm、P7が20・13・10cm、P8が24・16・9cmである。周溝 検出されていない。貯蔵穴 南東隅にある。

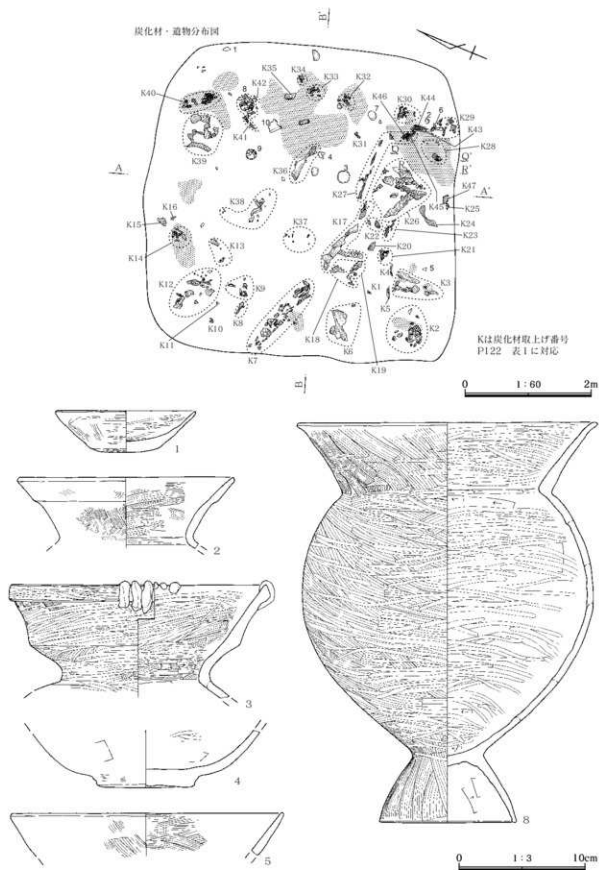


第61図 19号住居跡遺構図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第62図 19号住居跡遺構図(2)



第63図 19号住居跡遺構図(3)・遺物図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

長軸45cm、短軸42cm、深さ29cmの方形。

炉 北壁寄りの中央部、長軸55cm、短軸49cm、深さ11cmの楕円形をした掘り込みである。南端に季大の緑石がある。焼土は緑石の南側にも広く分布。

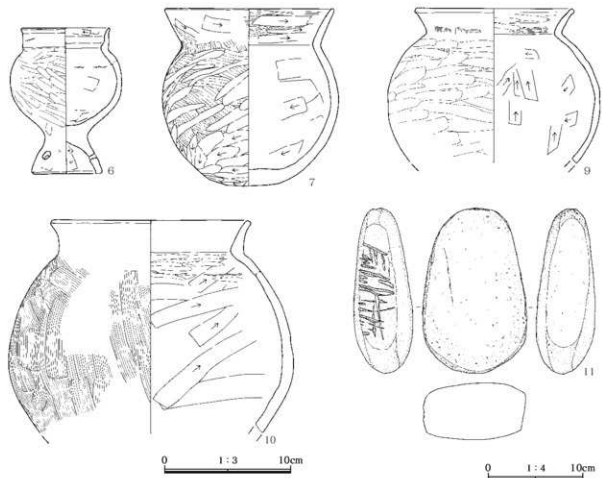
覆土 黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で埋没。

炭化材の出土状態 中央から放射状に広がる。幅は

10cm弱のものが多い。47点のうち38点がクスギ節、2点がコナラ節、不明2点の分析結果である。

遺物と出土状態 炉の西で8の台付甕、貯蔵穴の周囲で6の台付甕、7の甕が出土。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



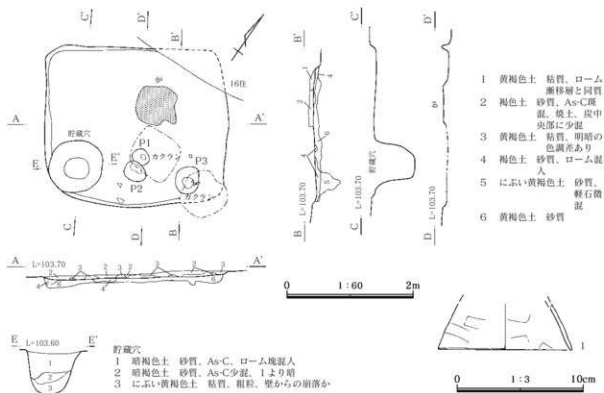
第64図 19号住居跡遺物図(2)

20号住居跡 (第65図 P L10・28)

概要 D区 85S8・9グリッドのローム漸移層で検出。南端は12号住居跡と接して、北端は16号住居跡と重複。本跡の方が古い。形状 方形 面積 7.39㎡ 長軸方位 N58°E 規模 長軸2.92m、短軸2.53m、残壁高9cm 床面 ローム層の上りまで掘り込み平坦にする。6層は貼床、掘り方は壁際がわずかに低い。柱穴 掘り方で3本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が28・22

・31cm、P2が37・30・41cm、P3が43・38・40cmである。周溝 検出されていない。貯蔵穴 南西隅にある。長軸88cm、短軸80cm、深さ70cmの方形。炉 北壁寄りの中央部、長軸60cm、短軸59cmの円形をした地床炉である。掘り込みは浅い。

覆土 黄褐色土、褐色土で自然埋没。遺物と出土状態 1の器台は南東隅の擾乱から出土。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。



第65図 20号住居跡遺構図・遺物図

21号住居跡 (第66図 P L10)

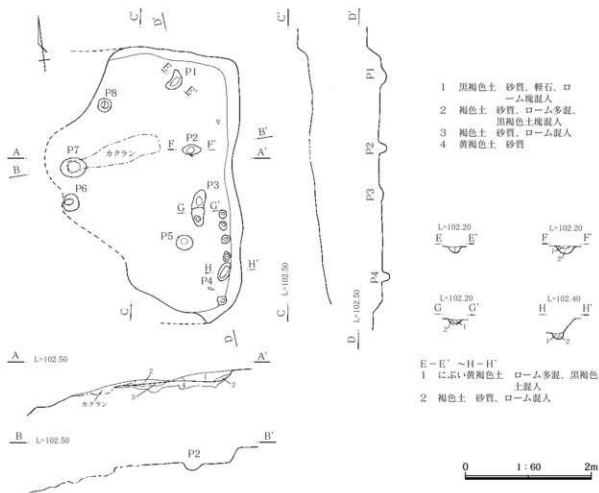
概要 DI区 86B6・7グリッドのローム漸移層で検出。西側は、土地改良で削平。東壁に沿って地震の地割れ跡が見られる。形状 推定方形 面積 12.11㎡以上 長軸方位 N5° E、東壁で計測。規模 長軸4.42m、短軸2.74m以上、残壁高18cm 床面 ローム漸移層まで掘り込み平坦にする。4層が貼床である。柱穴 掘り方を含めて8本を検出した。主柱穴として確定できるものはなく、P1～P3は地割れの可能性もある。P5～P8は掘り方

で検出。長軸・短軸・深さは、P5が26・23・44cm、P6が27・25・39cm、P7が42・30・34cm、P8が21・20・31cmである。周溝 P4を含めて東壁際の小ピットが填跡か。延長の箇所でもわずかに窪んでいる。貯蔵穴・炉 検出されていない。覆土 黒褐色土、褐色土で埋没。遺物と出土状態 土師器の細片が出土。所見 形状や長軸方位、覆土の様子から、時期は古墳時代とする。

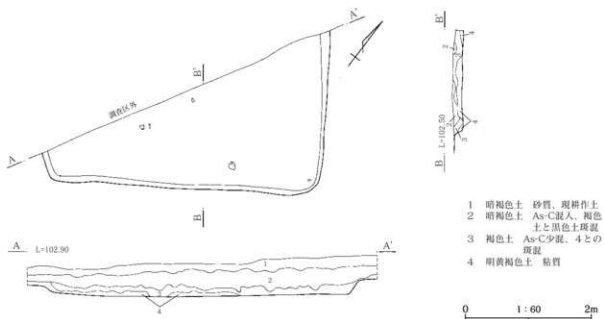
22号住居跡 (第67・68図 P L10・28)

概要 B区 75M・N15・16グリッドのローム漸移層で検出。西側は市道にかり調査区外である。形状 推定方形 面積 12.19㎡以上 長軸方位 N57° E 規模 長軸4.45m、短軸2.74m以上、残壁高24cm 床面 ローム漸移層まで掘り込み平坦にする。

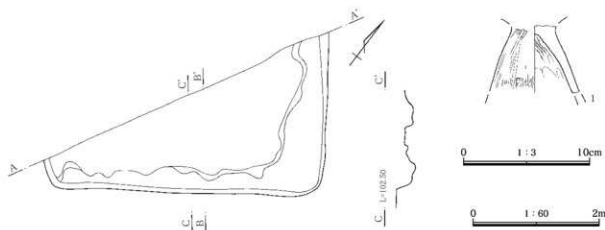
柱穴 掘り方でも検出されていない。周溝・貯蔵穴・炉 検出されていない。覆土 黄褐色土、暗褐色土で自然埋没。遺物と出土状態 1の高坏は、2層下位で出土。所見 形状や長軸方位、覆土の様子から、時期は古墳時代である。



第66図 21号住居跡遺構図



第67図 22号住居跡遺構図(1)



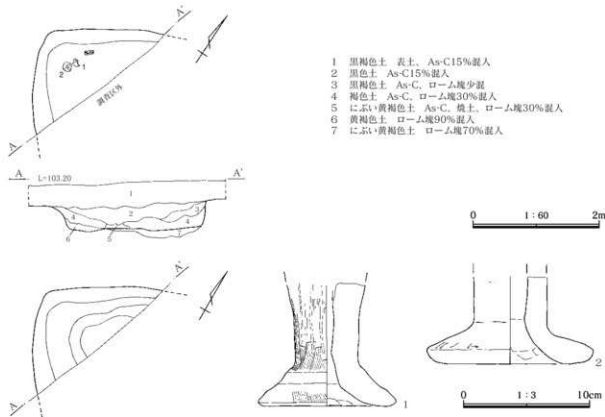
第68図 22号住居跡遺構図(2)・遺物図

23号住居跡 (第69図 P.110・28)

概要 D区 75N17・18グリッドのローム漸移層で検出。北西隅を検出しただけで、残りは市道にかかり調査区外である。形状 推定方形 面積 3.73㎡以上 長軸方位 N60° E、北壁で計測。

規模 長軸2.22m以上、短軸1.68m以上、残壁高44cm 床面 ローム層まで掘り込み平坦にする。

掘り方では、壁際が一段低くなる様子が見られる。柱穴・周溝・炉・貯蔵穴 検出されていない。覆土 黄褐色土、褐色土、黒褐色土で自然埋没。遺物と出土状態 床面で1・2の高坪が出土。近くでは長さが15cmの炭化材が出土。所見 出土した遺物から、時期は古墳時代中期である。



第69図 23号住居跡遺構図・遺物図

3 土坑

土坑は、住居跡からは離れていて、しかも住居跡のようにまともらずに点在している。B区では、対照的な立地で2基が検出されている。台地上にあるのが21号土坑、前期の土器が投棄されていて竪穴状の施設かと思われる。もう1基の60号土坑は、前期の土器を伴っているが谷地の中にある。掘り込み

16号土坑 (第70図 P L12)

概要 D区 86G9グリッドのローム層上面で検出。倒木痕に重複している。倒木痕の一部と見ることできるが、上面が整った形状であること、倒木痕とは覆土を異にすることから人為的なものと判断した。

形状 長楕円形 規模 長軸1.56m 短軸0.88m 残壁高1.04m 長軸方位 N69° E

覆土 黒褐色土、暗褐色土で埋没。3層はAs-Cの厚さが10cmの1次層である。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 時期は、覆土の様子から古墳時代前期である。

21号土坑 (第70図 P L12・29)

概要 B区 75K3グリッド、台地の西側斜面、ローム層上面で検出。形状 方形、関係は不明であるが、西壁中央部の外に小ピット1基がある。壁は垂直に近く、床も堅くて平坦である。規模 長軸1.35m 短軸1.18m 残壁高31cm 長軸方位 N50° W 南西壁で計測 覆土 黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で埋没。1層に炭化物が多く含まれている。

遺物と出土状況 甕、高坏が2層上位、床上10cm前後で出土。埋没中に流れ込んだような状態である。所見 出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代前期である。住居跡ではなく、竪穴状の施設である。

42号土坑 (第70図 P L13・29)

概要 D区 85S3グリッドのローム層上面で検出。ただし、プランを確認し、遺物を取り上げた

の浅い井戸の可能性もある。集落の展開が台地だけでなく、低地まで及んでいることを教えてくれる。

D区の1基は、倒木痕の可能性も否定できないがAs-Cの1次層が堆積している唯一の遺構である。残る1基は、規模がやや大きい住居跡の貯蔵穴の可能性もある。

けで、土坑本来の調査はしていない。そのため平面、断面の記録はないので掲載していない。以下は調査時の所見である。形状 方形 規模 長軸0.48m 短軸0.40m 深さ・長軸方位の計測値はない。

覆土 上面では暗褐色土にわずかに焼土の混入しているのが観察できた。遺物を伴い、覆土に焼土の混入しているのが遺構と判断した理由である。

遺物と出土状況 台付甕が出土。

所見 出土した遺物から、時期は古墳時代前期である。住居跡の貯蔵穴の可能性もある。しかし、周囲に掘り込みを確認することはできなかった。隣接する10号住居跡の上面にあるAs-Bとのレベルの差はなく、地表面の大きな変化がないとすると平地式の建物であった可能性もある。

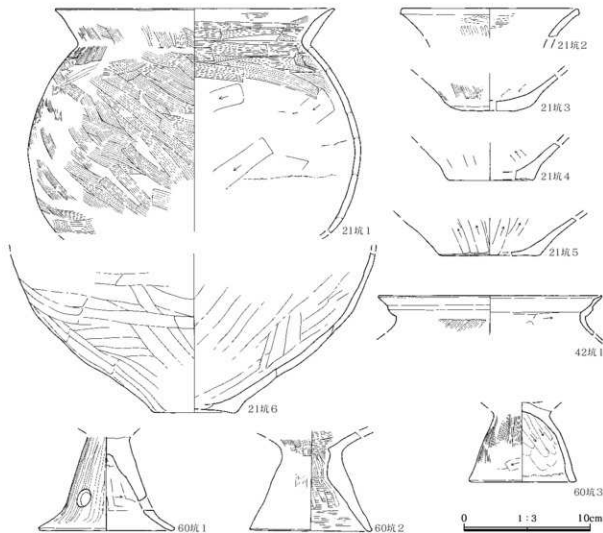
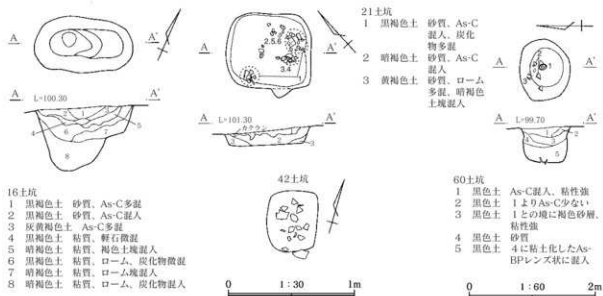
60号土坑 (第70図 P L14・29)

概要 B区 75I・J7グリッドで検出。谷地の中でも、台地に変わる際にある。掘り込みが確認できるのは、水田耕作土下の黒褐色土である。形状や覆土の特徴が4号井戸とよく似ている。

形状 楕円形 規模 長軸0.96m 短軸0.81m 残壁高57cm 長軸方位 N75° E

覆土 黒色土で埋没。3層上面に細砂層、5層から遺物が出土。遺物と出土状況 台付甕2個体と高坏1個体が出土。

所見 出土した遺物から、時期は古墳時代前期である。立地や形状、覆土の様子が4号井戸とよく似ている。



第70図 16号・21号・42号・60号土坑遺構図、21号・42号・60号土坑遺物図

4. 井戸

4号井戸 (第71図 PL18)

概要 A区 66B18グリッド、ローム漸移層で検出。谷地の中央部にある。旧石器確認調査のグリッドにかかって北側の半分を検出。南半分は推定である。形状 推定円形、素掘

規模 長軸0.80m・短軸0.80m・深き70cm

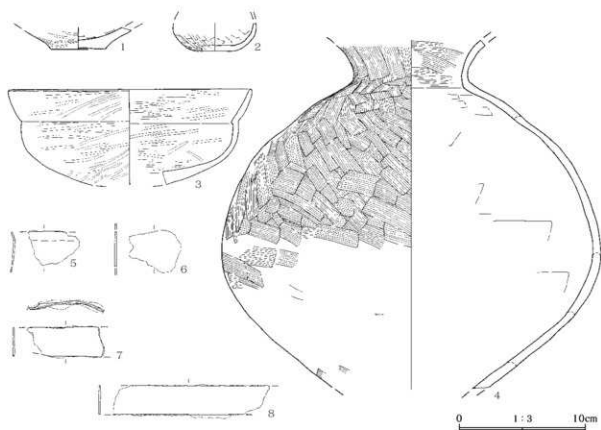
断面形 円筒形、上に向かって開き気味である。壁が荒れた様子はない。底面は平坦である。

覆土 上層から底面まで黒灰土で埋没。底面はへドロ化している。上層には川砂が混入している。遺物と出土状況 出土遺物はない。第72図の遺物は、井戸の周囲から出土したものを一括した。

所見 平安時代としたが、形状と覆土の様子はB区の谷地にある古墳時代前期の60号土坑と似ている。



第71図 4号井戸遺構図



第72図 A区遺構外遺物図

第4節 平安時代

1 概要

土坑13基、水田とそれに伴う溜井3基、そして井戸1基が検出されている。

土坑は、A区が2基、D区が台地4基、低地7基である。72号～78号は、水田耕作土の下で検出された。出土した遺物はなく歪んだ掘り方で、覆土はシルト質土と黒褐色土とが混じる。基盤のシルト質土を採掘した跡と考えた。台地の4基は、柱穴や貯蔵穴といった性格のものである。

水田は、As-B下で検出、B区では段による区画、

2 土坑

17号土坑 (第73図 P L12)

D区 85S6グリッドのローム漸移層で検出。楕円形 長軸1.12m、短軸0.98m、深さ28cm
長軸方位 N84° W 出土した遺物はない。住居跡の貯蔵穴の可能性もある。

41号土坑 (第73図 P L13)

D区 85Q3グリッドのローム漸移層で検出。2基が重複。外側の楕円形が古く、内側の長方形が新しい。楕円形 長軸2.02m、短軸1.45m、深さ60cm 長軸方位 N80° W、長方形 長軸1.50m、短軸1.05m、深さ60cm 長軸方位 N76° E 出土した遺物はない。覆土の特徴から平安時代とした。

43号土坑 (第73図)

D区 85S2・3グリッドのローム漸移層で検出。円形 長軸0.29m、短軸0.26m、深さ43cm 住居跡か掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。

44号土坑 (第73図)

D区 85R3グリッドのローム漸移層で検出。円形 長軸0.33m、短軸0.27m、深さ34cm 土師器

D区は溜井が特徴である。大泉坊川沿いにある一部で、D区は台地の縁辺部、B区は支谷の様子が明らかとなった。下層でも褐色土を第2面、As-C下の黒色土を第3面として作業したが、水田と断定することはできなかった。溜井は、1号がAs-B下の時期で、残る2基は古くなる可能性がある。

祭祀遺構は、6世紀中頃のものであるが水田の変遷に関係するとして、ここに掲載する。

甕の細片が出土。住居跡か掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。

72号土坑 (第73・85図)

D区 86I6グリッドで検出。楕円形 長軸2.22m、短軸1.98m、深さ40cm 長軸方位 N84° E 土師器細片が出土。2号井戸の湧水部のひとつである。

73号土坑 (第73・85図 P L14)

D区 86J10・11グリッド、水田耕作土下で検出。円形 長軸1.40m、短軸1.16m、深さ37cm 出土した遺物はない。

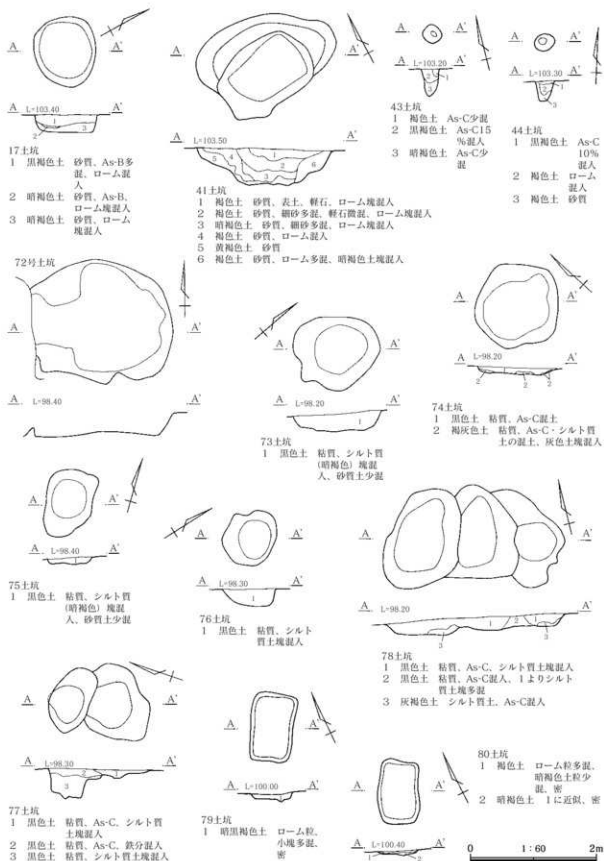
74号土坑 (第73・85図 P L14)

D区 86K10・11グリッド、水田耕作土下で検出。円形 長軸1.33m、短軸1.30m、深さ16cm 出土した遺物はない。

75号土坑 (第73・85図 P L14)

D区 86J12グリッド、水田耕作土下で検出。不整形 長軸1.11m、短軸0.76m、深さ17cm 出土した遺物はない。

第3章 検出された遺構と遺物



第73図 17号・41号・43号・44号・72号～80号土坑遺構図

76号土坑 (第73・85図 P L14)

D区 86K12グリッド、水田耕作土下で検出。円形 規模 長軸0.94m、短軸0.80m、深さ27cm 出土した遺物はない。

77号土坑 (第73・85図 P L14)

D区 86K11・12グリッド、水田耕作土下で検出。不整形 長軸1.60m、短軸1.12m、深さ47cm 出土した遺物はない。

78号土坑 (第73・85図 P L14・15)

D区 86L・M13グリッド、水田耕作土下で検出。不整形 長軸2.70m、短軸1.55m、深さ34cm 長軸方位 N69° W 出土した遺物はない。

79号土坑 (第73図 P L15)

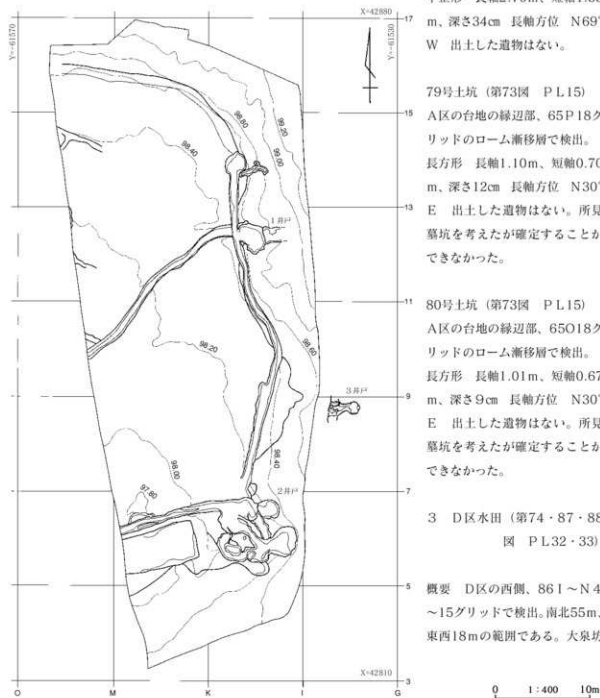
A区の台地の縁辺部、65P18グリッドのローム漸移層で検出。長方形 長軸1.10m、短軸0.70m、深さ12cm 長軸方位 N30° E 出土した遺物はない。所見墓坑を考えたが確定することができなかった。

80号土坑 (第73図 P L15)

A区の台地の縁辺部、65O18グリッドのローム漸移層で検出。長方形 長軸1.01m、短軸0.67m、深さ9cm 長軸方位 N30° E 出土した遺物はない。所見墓坑を考えたが確定することができなかった。

3 D区水田 (第74・87・88 図 P L32・33)

概要 D区の西側、86I～N4～15グリッドで検出。南北55m、東西18mの範囲である。大泉坊



第74図 D区水田遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

川に面して開口する支谷の出口にあたる。谷地は、まだ北に続いているが、地形の勾配からみて北限は明らかにできたものと思われる。畦はなく、一面に鵜跡か足跡が付けられているだけの状態である。溜井により灌漑されている。

区画 溝を畦の代わりとした不定形のものである。1号井戸の導水路を境に2つの区画に分けられる。北が約300㎡、南が約500㎡である。

田面標高 調査区の西壁にあるAs-B直下で計測すると、北端の16ライン付近が98.86m、南端の2号井戸付近が97.70mである。中間の1号井戸の導

水路がかかる箇所で98.15mである。この高低差からすると、棚田のような状態に復原できる。

灌漑方法 溜井のほかに、祭祀遺構の両脇で水口に相当するののか、鉄分の凝集した箇所が2箇所ある。

鵜痕 全体に残されている。

耕作土 粘性に富んだ黒褐色土。10cm前後の厚さである。As-Bは、厚さが5cm前後である。

遺物 弥生土器、土師器、陶磁器

時期 As-Bの堆積から天仁元年（1108）を下限とする水田である。

4 井戸

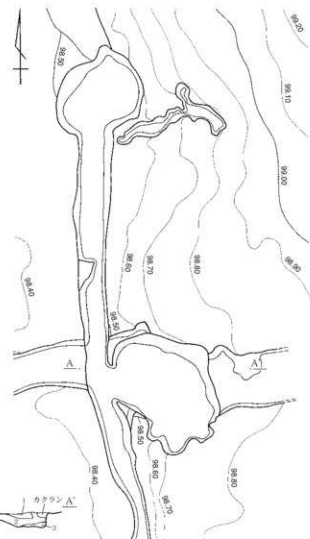
1号井戸（第75図 P L18）

概要 D区 86I～J・11・12グリッドで検出した溜井である。長い導水路が付けられていて、湧水部は水田の一角に浅い土坑を掘り、しみ出した水を溜める構造となっている。湧水部の出口にあたる箇所では、低地の際をめぐる溝と交差している。この溝の北端にも湧水部を思わせる土坑状のものがあり、溝の南端は2号井戸に接続している。規模 全長は導水路を含めると23.5m、湧水部は長軸3.00m・短軸2.10m・深さ30cmの楕円形、導水路は幅が1m前後で一定、深さは10cmである。

覆土 導水路はAs-Bで埋没、湧水部は黒色土、暗

- 1 黒色土 砂質、軽石少混
- 2 暗褐色土 砂質、軽石少混
- 3 黒褐色土 粘質、下位にシルト質土塊混入
- 4 暗褐色土 砂質、細砂互層混入
- 5 灰黄褐色土 砂質、細砂混入
- 6 褐灰色土 粘質、シルト質土塊混入

A L-98.90



0 1:50 1m

0 1:100 2m

第75図 D区1号井戸遺構図

褐色土で埋没。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 導水路にAs-Bが堆積することから、平安時

2号井戸 (第76・78～83図 P.L18・30～32)

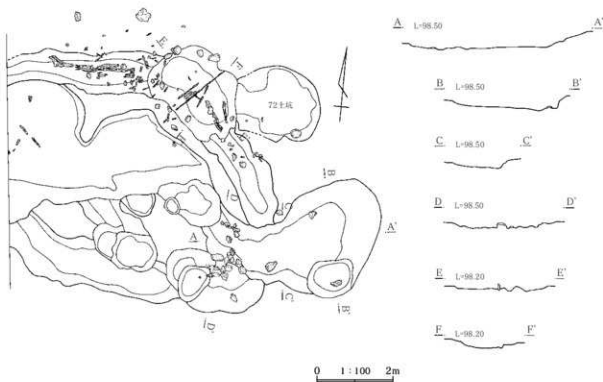
概要 D区 861～K5・6グリッドで検出した灌井で、湧水部と導水路の一部である。谷地の中では最も低い南東隅にあたり、緩く曲がる台地の際を掘り込んで作られている。湧水部は2ないし3基があり、これに対応して導水路は最大5条に分けられる。埋没したら作るというように、頻繁に付け替えがされていたようであるが個々に特定することはできなかった。また導水路の大半は、西側の調査区外である。

最後の時期といえる土坑には、護岸を養生する杭や止水のための堰板、さらに流れを調整するためか、拳大の石で溝を仕切る様子が見られた。また、検出した3基の中で、唯一湧水が認められた。立地からすると、検出した水田よりも一段低くなり、大泉坊

代の水田に伴う灌漑用井戸と考えられる。導水路にあたる溝については、水田の区画を兼ねたものではないだろうか。

川寄りの水田に配水されていた可能性が高い。なお、72号土坑は、湧水部のひとつである。

規模 南が全長9.65m、北が全長8.28m、湧水部は南が長軸3.40m・短軸2.50m・深さ28cmの楕円形、北が72号土坑で長軸2.22m・短軸1.98m・深さ40cmの楕円形である。導水路は、幅が1m前後、広いものでも1.50m程度、検出部分での傾斜は20cm弱である。途中の箇所に先述の湧水部をひとまわり小型にした土坑が付けられている。そのうちのひとつ、土坑に付く堰板は、長さ1.62m、厚さ1.0～1.5cm、幅5～7cmである。上半部を失っていたが、節の少ない柵目材が使われていた。板の両側には固定のための小杭が複数差し込まれていた。また、これとは別に、水路の端でための杭が4本打ち込まれ



第76図 D区2号井戸遺構図

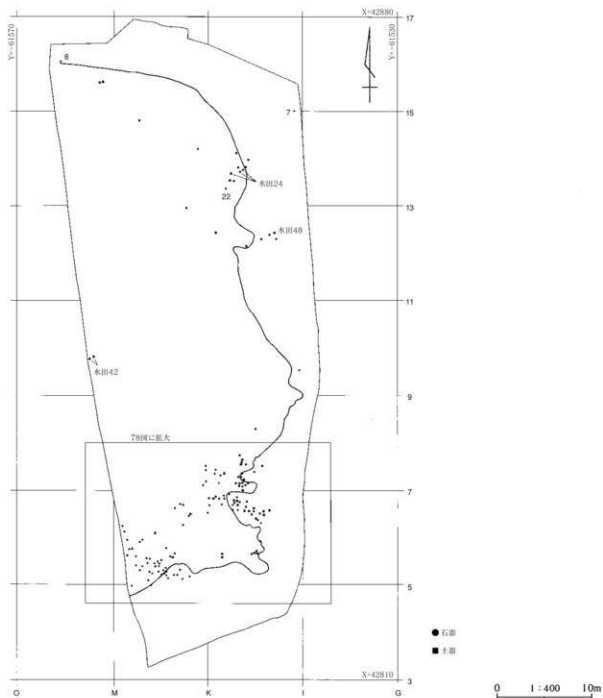
ている。なお堀板は、取り上げ後に乾燥して遺物としては残されていない。

覆土 有機物が多く含まれた黒褐色土で埋没。淀んだような状態である。

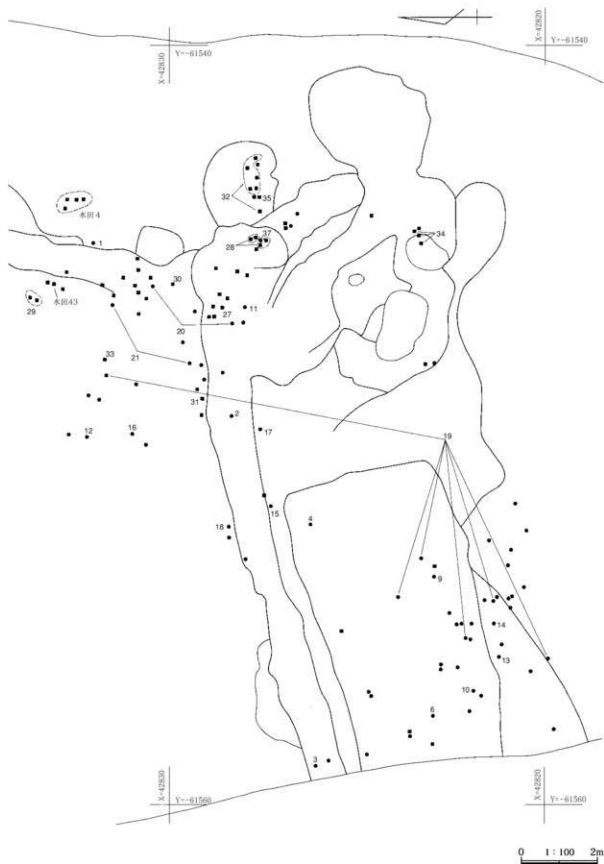
遺物と出土状況 地山からの粗粒輝石安山岩に混じって土師器や石器が出土。石器については混入とみ

られるが、2ないし3個体の接合資料が含まれている。

所見 As-Bの状態からすると1号井戸と併存する時期もあるが、湧水部の様子から見て使用された期間に幅を持たせることは可能で、上限は3号井戸に続くものであろう。

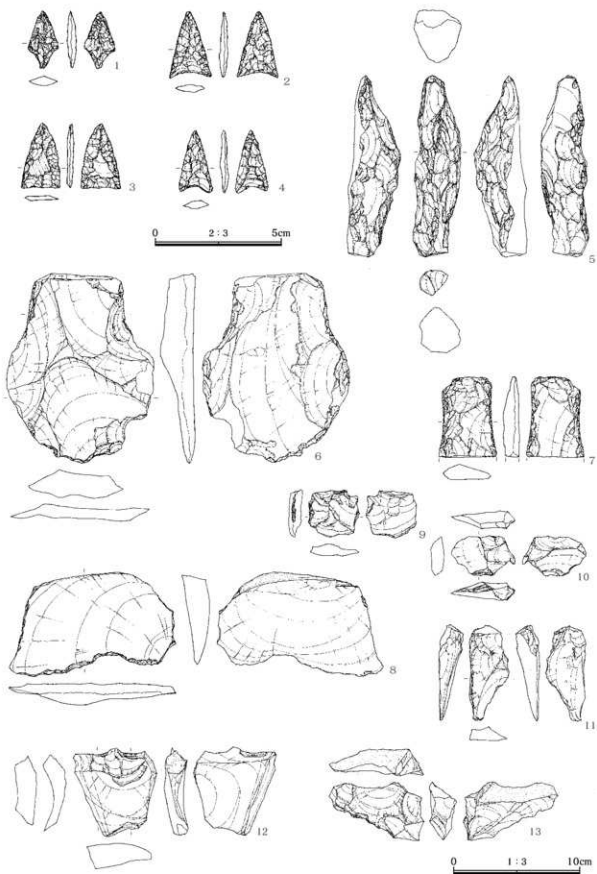


第77図 D区水田石器・土器分布図

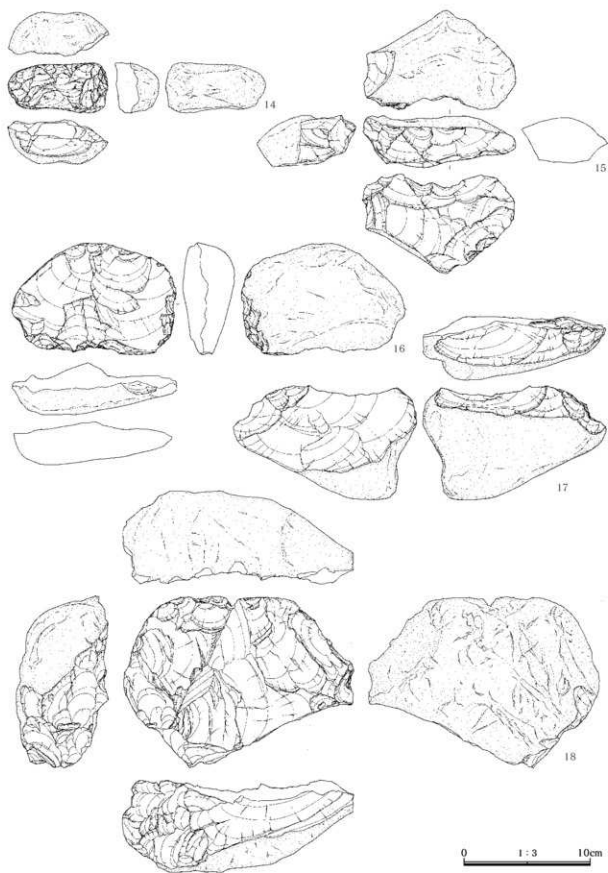


第78図 D区2号井戸石器・土器分布図

第3章 検出された遺構と遺物



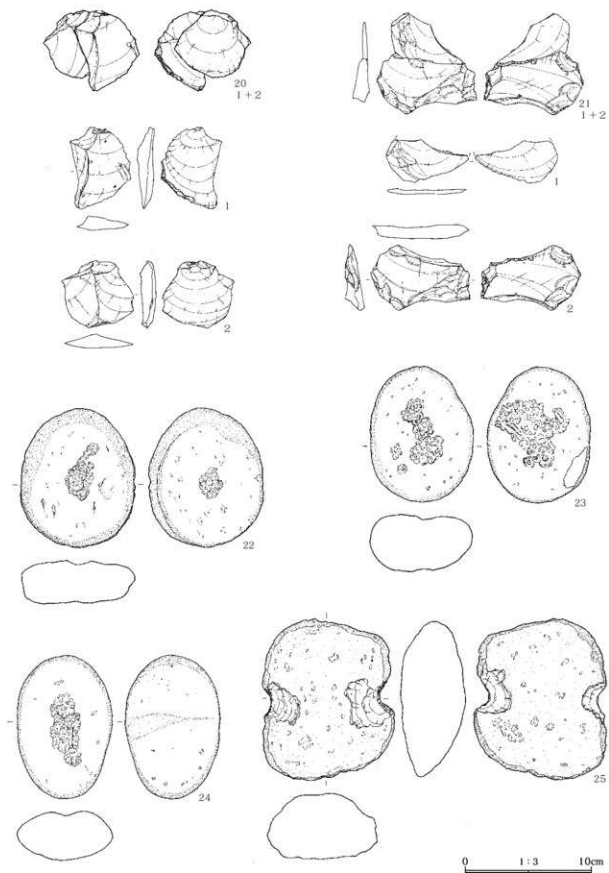
第79図 D区2号井戸遺物図 石器(1)



第80图 D区2号井戸遺物图 石器(2)

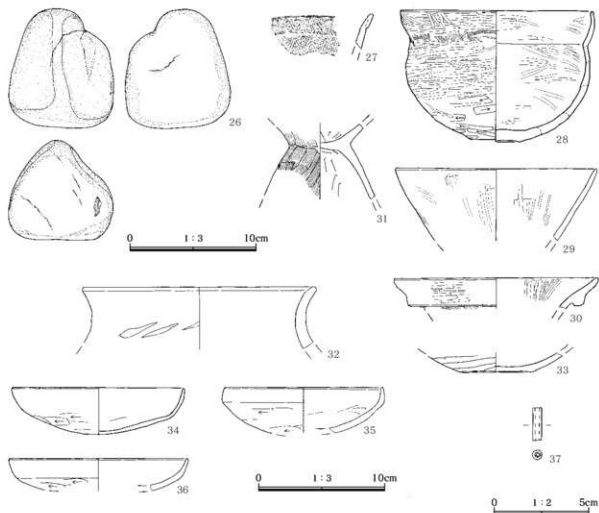


第81図 D区2号井戸遺物区 石器(3)



第82図 D区2号井戸遺物図 石器(4)

第3章 検出された遺構と遺物

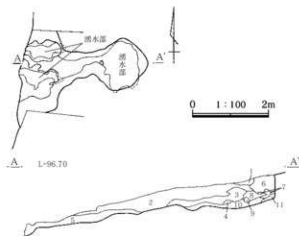


第83図 D区2号井戸遺物図 石器(5)・土器

3号井戸(第84図 PL18)

概要 D区 86G・H8グリッドで検出。台地の

肩口に作られた溜井で、16号土坑付近を谷頭とす



第84図 D区3号井戸遺構図

- 1 暗褐色土 砂質、ローム、黒色土混入
- 2 黒褐色土 砂質、軽石20%混入、ローム塊少混
- 3 暗褐色土 砂質、互層
- 4 黒褐色土 砂質
- 5 褐色土 砂質、ローム塊30%混入、互層
- 6 褐色土 砂質、3と近似、管蝕
- 7 黒褐色土 砂質、黒色土、軽石混入
- 8 灰白色土 砂質、ローム混入
- 9 褐灰色土 粘質、塊状、堅緻
- 10 褐灰色土 粘質、密
- 11 暗褐色土 砂質、ローム、黒色土互層

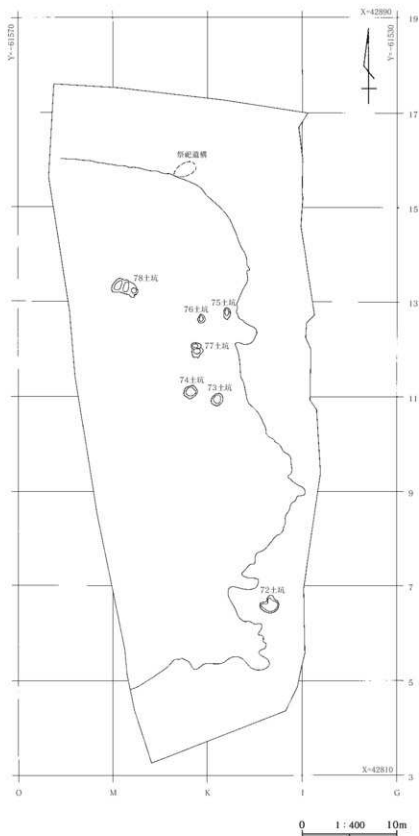
る小さな窪みが利用されている。1号・2号井戸の位置よりは一段高く、約2mの高低差がある。水田には、この高低差が利用されて配水されている。水量は、豊富にあったようで大胡火砕流の直上付近の壁が強く扶られ、鉄分の凝集しているのが見られた。湧水部は、覆土の様子では1号の先端部が先行し、手前にある2号、3号が後出する。

規模 全長3.23m、湧水部は長軸1.35m・短軸1.20m・残壁高35cmの円形、導水部は長さ2.13m、幅50~90cm、深さ20cmである。湧水部と導水部の高低差は最大で25cm、緩い傾斜である。

覆土 砂が多く混入する黒褐色土、暗褐色土などで埋没。堆積には、水の影響を強く受けている。

遺物と出土状況 土師器の細片が出土。2号湧水部では、導水部との境を仕切る箇所に直径5cmの杭が打ち込まれている。水量を調整した、しからみ状の杭の1本と見られる。

所見 年代を特定できるものはないが、1号、2号井戸との立地の違いから3基の中では最も古い可能性がある。



第85図 D区祭記遺構、72号～78号土坑位置図

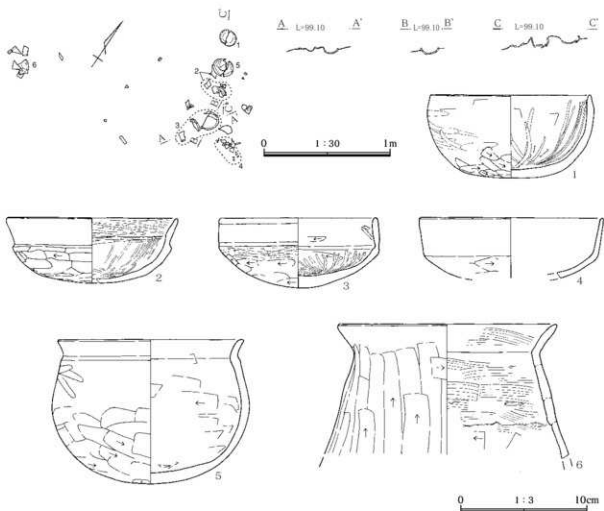
5 祭祀遺構 (第85・86図 P.L33)

概要 D区 86K15グリッドで検出された土器の集中部である。谷地の中央部、水田から見ると北東に3m離れていて、水田面からは一段高い位置にある。出土したレベルが一定していること、口縁部を上にして統一感があることから人為的なものと判断した。近くには、水口と推定される鉄分の凝集があり、水田の水口を対象としたまつりの跡である。

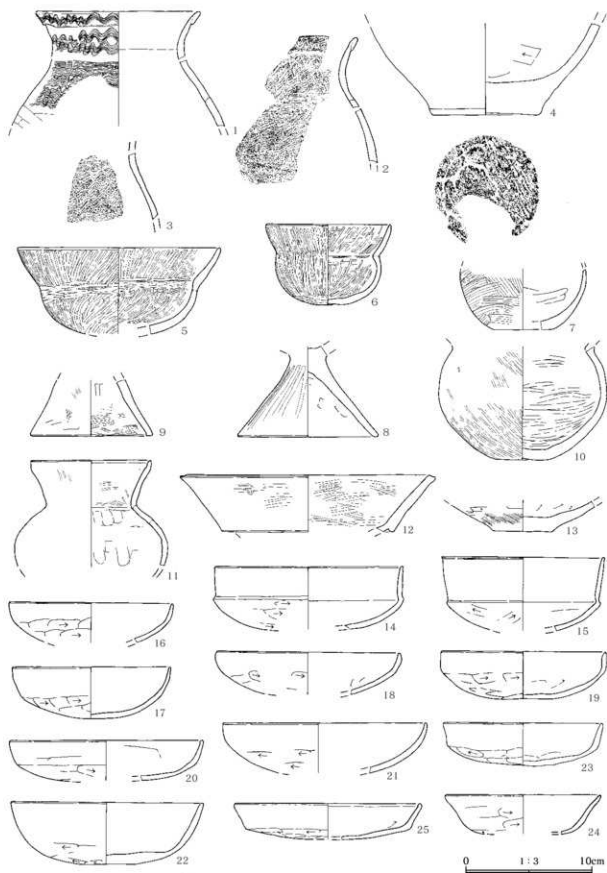
規模 土器があるのは東西2m、南北1.50mの範囲である。これに伴う掘り込みなどは検出することができず、焼土や炭化物もなかった。土器は露出していた可能性がある。覆土 黒褐色土で自然埋没している。遺物と出土状況 坏4個体が南北方向で接するように並んでいて、その中に5の小型鉢が混在

している。土器があるだけで、周囲に掘り込みはない。坏は、口縁部を上にして据えられていたような印象を受ける。ただし、南の3個体と北端の1個体とでは10cmの高低差があり、これが時差にも読み取れる。西へ1.20m離れて、単独に長胴の甕1個体がある。こちらは、土層の傾斜とは逆の北に倒れた状態で出土した。2号井戸からは、碧玉製の管玉が1点出土している。土器の時期とは年代観に差があるように見えるが、このような水田の祭祀で使用されたものであろうか。

所見 出土した遺物の特徴から、時期は、古墳時代後期6世紀中頃である。相当する水田は検出されていないが、水口を対象としたまつりの跡である。

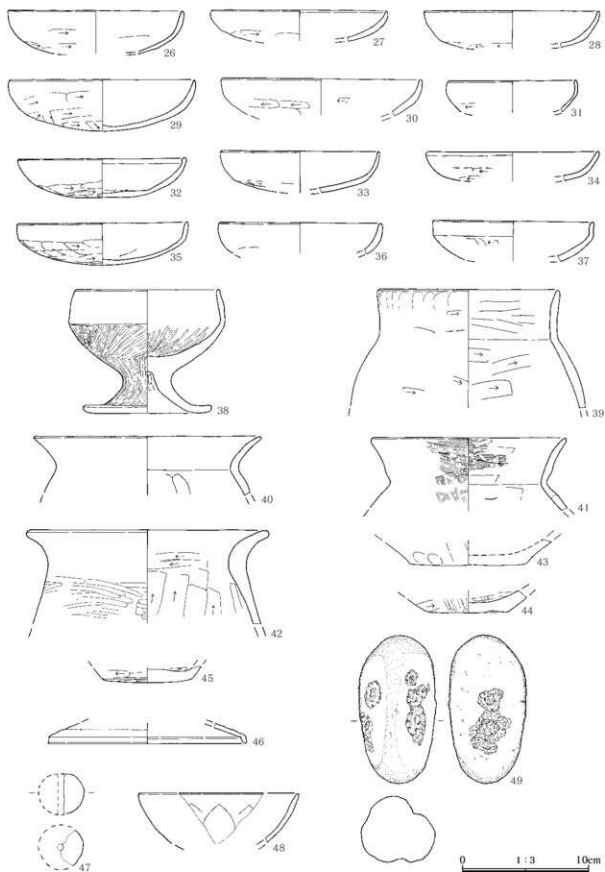


第86図 D区祭祀遺構遺構図・遺物図



第87図 D区水田遺物図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第88図 D区水田遺物図(2)

6 B区水田 (第89・90図 P.L18)

概要 B区の中央部、両側を台地にはさまれた75 I~Q 2~13グリッドで検出。範囲は、南北50m、東西25mである。谷頭に近い位置かとみられるが、北へはさらに続く様子である。反対の南へは、A区の南端まで続いているのが確認されている。ただし、A区は、宅地として利用されていたために攪乱され

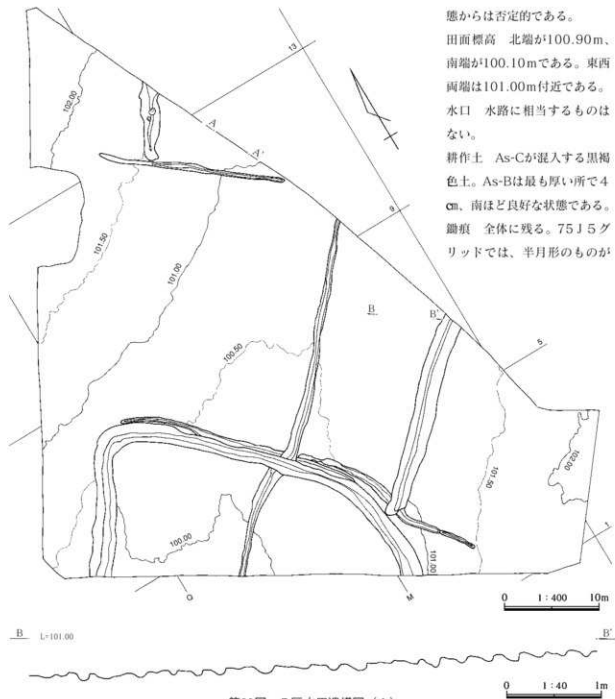
ている箇所の方が多くて、わずかに調査区南端の壁際付近にAs-Bと、水田らしい凹凸のある様子が残されていたにすぎない。そのため、ここではB区だけを報告する。

区画 特定できる区画はない。畦として記録をした箇所もあったが、その存在は鋤痕が連続している状態からは否定的である。

田面標高 北端が100.90m、南端が100.10mである。東西両端は101.00m付近である。水口 水路に相当するものはない。

耕作土 As-Cが混入する黒褐色土。As-Bは最も厚い所で4cm、南ほど良好な状態である。

鋤痕 全体に残る。75 J 5グリッドでは、半月形のもの

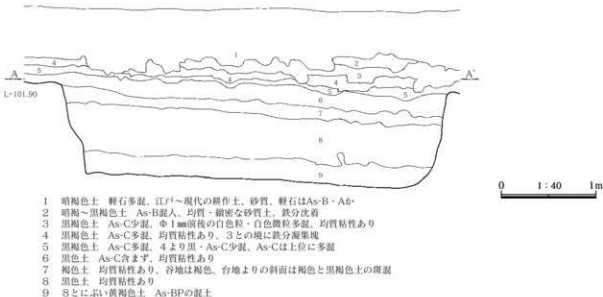


第89図 B区水田遺構図(1)

列を作り、東西方向に複数並んでいるのがわかる。列は、1人の作業単位で4～5m前後の長さがある。溝の間隔は40～45cmで一定している。これを荒起こし作業の跡とみると、手慣れた動作に復原することができる。

時期 As-Bの堆積から天仁元年(1108)を下限と

する水田である。D区と同様に下層の水田を確かめるために調査をしたが、検出できたのはこの1面だけである。ただし、プラントオバールの分析では、わずかながらも水田があった可能性を示す数値が検出されている。



第90図 B区水田遺構図(2)

第5節 中世～近世

1 概要

11条の溝が検出されている。B区が8条、D区が3条である。水田が畑を区画していたもので、低地とその縁辺といった立地にある。時期は、As-B以降は確かであるが、特定できる資料はなく中世から近世までと幅をもたせざるを得なかった。出土した陶磁器類は、下限を示す資料と考えておきたい。D区の北端にある1号溝だけが中世の可能性が高く、屋敷を区画するものである。屋敷の本体は、市道をはさんで北側の富田高石遺跡で検出されている。ここで検出できたのはその南辺にあたる。

3人の地権者からは、分家した昭和30年頃はD区が松林であったこと、城南病院のあたりが本丸でC区に物見台があったという伝承、A区に眠り石と呼ぶ大きな石があったことなど、教示を受けること

ができた。しかし、C区は基盤まで削平されて跡形もなく、A区は宅地で掘乱されていた。

検出できた遺構は、土地改良の削平を免れた低地だからといえそうでもあるが、台地に遺構が多かったかといえば、遺物の内容から見て否定的である。むしろ、遺構は少なくて閑散としていたといってもよいであろう。富田村の中心は、神社や寺を中心に泉道沿いにある。地権者のひとりであった井上案治氏(故人)は、「泉道の西では、井戸を掘っても水が出なかった。水が湧くのは泉道沿い。そこは本家筋が持っていて泉道に沿って縦に並んでいた。だから、分家は本家のまわりにするもので、わざわざ西側に分家する人は代々いなかった。この調査区のあたりでは、一部が畑になっていくらいで生えてい

るのは松の方が多かった。」といわれていた。現在とは驚くほどの違いで、「上野国郷村帳」によれば明治の前半にまで連れそうな景色である。

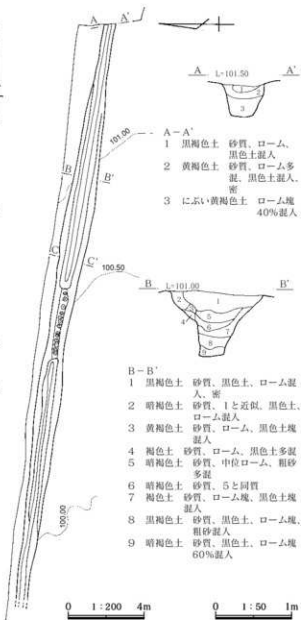
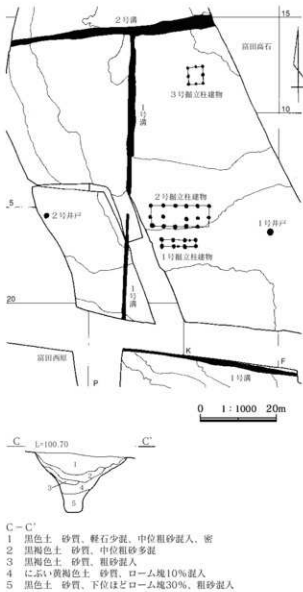
なお、10号溝は、記録ではD区にある1号井戸の導水路をさしている。1号井戸の一部として扱ひ、本報告では欠番とする。

2 溝

1号溝 (第91・92図 P.L16・28)

概要 D区 86D～K16・17グリッドで検出。東西方向に抜けている。東端は86-Eラインまで、その先では検出できないことから北へ折れ曲がっている。

るものと思われる。北への延長上には、台地を削平してできた高さ1mほどの段差がある。西端は、86-Nライン付近で同じく北へ折れ曲がるが、延長上



第91図 D区1号溝遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

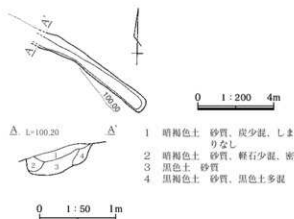
は段ではなく溝である。全体は、東西が50～60m前後の方形で、1号溝はその南辺にあたる。

規模 検出長44m、上面幅は最大152cmを測るが、壁の中段以下は50cm前後、底面ではさらに狭くなって25～35cmである。深さは40～85cm、北側の壁が垂直、南側が外へ傾斜している。底面に水で洗われるなど荒れた様子は少なく、所々に波板状の掘削痕が残されている。走向 N82° W

覆土 新旧2時期がある。中位にある細砂層を境に上下に分けられる。上位には、砂が多く混入する黒褐色土が堆積し、水の流れ込みやすい環境にあったことがわかる。これに対して下位では、砂ではなく

2号溝 (第92図 P L16・28)

概要 D区 86H～N15～17グリッドで検出。西端は、市道にかかり、東端は全体図に示した範囲を調査しただけで、全貌については不明点が多い。北西方向から南東方向への傾斜があり、さらに南東へと続いていて低地の際をめぐるか、低地に注ぎ込んでいたかと思われる。灌漑用の水路である。1号溝とは重複し、本跡が新しい。



第92図 D区2号溝遺構図、1号・2号溝遺物図

3号溝 (第93～95図 P L16・34)

概要 B区 75I～L3～6グリッドで検出。北東から南西方向にのびる台地の裾に掘り込まれ、谷地との境界となるように南北に縦断する。南端が5号溝と重複、本跡の方が新しい。埋没するたびに幅が

ローブロックが顕著である。土塁が崩落して流れ込んだとも見られる堆積状態である。

特記事項 86H-17ライン付近に橋を架けた入口状のものがある。南辺の中央部ともいえる位置で、間口が4m、そこだけ底面がほかよりも高くなっている。波板状の掘削痕の中に、直立する直径20cm前後、深さ50cmの穴が2本、150cmの間隔であいている。遺物 覆土には土師器細片が混入しているが、このほかに年代を特定できるものはない。

時期 覆土にAs-Aは混入していない。富田高石遺跡で検出された遺構や遺物の状況からすると、中世から近世の時期と考えられる。

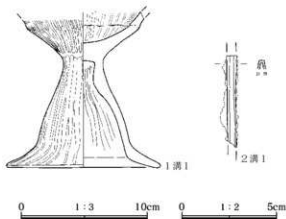
規模 検出長12.50m 幅1m前後 深さ44cm

走向 N57° W

覆土 暗褐色土、黒褐色土、黒色土で自然埋没。

遺物 土師器環の細片が出土しているが混入である。

時期 近世、土地改良時には機能していないが、上限については明らかにすることはできなかった。



狭く、そして浅くなっている。規模 検出長21.40m 最大幅2m以上 壁高44cm 走向 N47° E
覆土 細砂で埋没を繰り返している。第94図にある断面Aを見ると、砂はレンズ状の互層状態で5期

かそれ以上に細分することができる。8層が当初の溝で、2層が最終末の状態である。新しくなるにつれて、幅が狭く、そして浅くなっている。

遺物 掘跡は最下層から出土した。時期 掘り込みがわかるのは、断面AによるとAs-Bが混入した褐色土の下層である。遺物は、近世であることを示しているが、それ以前にさかのぼる可能性もある。

4号溝 (第93～95図 P L 16・17・34)

概要 市道をまたいで、A区とB区の谷地にある。南に開口するコの字状にめぐる。A区では、東側の端が途切れて南西方向にくの字に折れ曲がる。一方の西端は、直線のままに市道の下に伸びている。畑か水田を区画するというのが素直な見方ではあるが、耕作土との関係は明らかではない。周囲から流れ込む水を集め排水するのが目的で、あわせて溝を境に段差をつけて、地形勾配を解消しようとしたのではないだろうか。水路ならば、規模の大きさからみて幹線に匹敵する。7号溝と交差する箇所には、路肩の養生も兼ねてしがらみ状の堰が設けられている。6号、7号溝と重複し、新旧関係は7号が最も古く、6号、次いで4号の順序である。規模 検出長124m 幅1.06～1.83m 壁高11～86cm 走向 N45° E前後 覆土 砂の混入が多い。第94図の断面Bには、6号・7号溝との重複関係、断面Dには4号溝自身の変遷があらわれている。

遺物 灯明皿、碗、陶磁器、砥石、火打ち金、刀子、釘が出土。時期 近世

5号溝 (第93～95図 P L 17・34)

概要 B区 75K～M2～5グリッドで検出。4号溝の北側で、重複をさけるように併走している。東西両端は途切れている。7号溝との重複関係は本跡の方が新しい。6号溝と同一の可能性もあるが、直接には結びついていない。規模 検出長21m 幅0.20m 壁高18cm 走向 N33° W前後 覆土 にぶい黄褐色土で埋没。遺物 碗 時期 近世

6号溝 (第93・94図)

概要 B区 75M～P5～8グリッドで検出。4号溝の北側で平行する。一部は4号溝と重複しているが、本跡の方が古い。5号溝とは規模や走向がよく似ていて同一の可能性もある。

規模 検出長19m 幅0.28～0.60m 壁高5～18cm 走向 N45° W 覆土 暗褐色土で埋没。

遺物 出土した遺物はない。時期 近世

7号溝 (第93～95図 P L 16・17・34)

概要 A・B区 A区65R20、75P～R1・2、B区75J～O4～9グリッドで検出。谷地の中央を南北に縦断、区画の基準として利用されていたのであろう。B区では4号～6号溝と重複しているが、新旧関係は7号が最も古く、5・6号、次いで4号の順序である。南端は浅くなって途切れているが、延長した先には11号溝があり、1本の溝としてつながっていた可能性もある。3号・4号溝とは平行し、5号・6号・8号溝とは直交している。

規模 検出長55.2m 最大幅1.14m 深さ10～45cm 第93図断面Gによると、掘り込みがわかるのはAs-Bが残る黒色土面である。上面が削平されているが、掘り込みは浅い。走向 N42° E

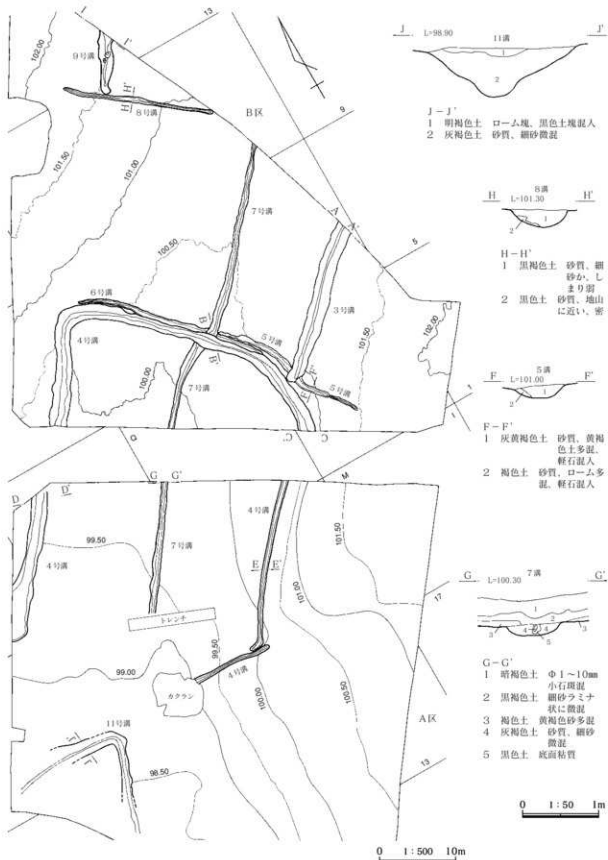
覆土 軽石、川砂が混入した暗褐色土で自然埋没。遺物 陶磁器皿、刀子 時期 近世

8号溝 (第93～95図 P L 17・34)

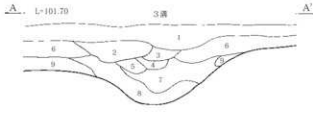
概要 B区 75J～N10～13グリッドで検出。谷地の中央から台地の斜面中段を東西に横断、谷地とは直交している。5号～7号溝と規模や形状がよく似ていて5号・6号とは平行、7号とは直交している。9号溝とは重複しているが、本跡が古い。6号溝との間は、南北28mである。東西は約25mと面積にして約700m²、7畝の区画となる。

規模 検出長19.6m 幅0.32～0.80m 残壁高22cm 走向 N50° W 覆土 黒褐色土で埋没。

遺物 陶器碗か?が出土。時期 近世

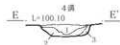


第93図 A区・B区3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号・11号溝遺構図(1)



- B-B'
- 1 暗褐色土 砂質、炭化物、細砂微混
 - 2 暗褐色土 砂質、細砂多混
 - 3 暗褐色土 砂質、色は暗、軽石微混
 - 4 暗褐色土 砂質、粘質土多混
 - 5 暗褐色土 砂質、細砂ラミナ状、黒褐色粘質土塊混入、軽石微混
 - 6 暗褐色土 砂質、黒褐色土、軽石微混
 - 7 暗褐色土 砂質、細砂ラミナ状、軽石、黒褐色土混入

- A-A'
- 1 暗褐色土 砂質、現在の耕作土
 - 2 褐色土 砂質、黄褐色粗砂少混
 - 3 にふい黄褐色土 砂質、黄褐色粗砂が互層混入
 - 4 にふい黄褐色土 砂質、黄褐色粗砂が縞状に混入
 - 5 暗褐色土 砂質、一部縞状互層
 - 6 褐色土 砂質、Φ1~10mm小石黄混
 - 7 黒褐色土 砂質、褐色砂層が互層混入
 - 8 暗褐色土 砂質、底面粘質、7近くに薄い砂層
 - 9 暗褐色土 As-C混入、砂質、堅緻(地山)



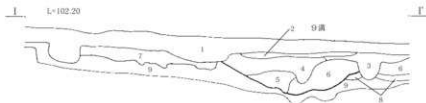
- E-E'
- 1 暗褐色土 上位に黒色土ラミナ状に堆積、密
 - 2 暗褐色土 1に近似、密
 - 3 褐色土 地山に近い、堅緻



- C-C'
- 1 暗褐色土 砂質
 - 2 暗褐色土 ローム粒混入
 - 3 黒褐色土 ローム粒混入
 - 4 暗褐色土 ローム粒混入



- D-D'
- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1 黄褐色土 客土 | 8 暗褐色土 ガラス質の産物少混、密 |
| 2 暗褐色土 灰土 | 9 黒褐色土 As-C少混、密 |
| 3 暗褐色土 白色軽石粒多く混入、しまりあり | 10 暗褐色土 砂質、灰色細砂混入 |
| 4 黒褐色土 3より明、As-YP混入、しまり弱 | 11 暗褐色土 砂質、密 |
| 5 暗褐色土 4に近似、明 | 12 暗褐色土 砂質、粗砂混入、密 |
| 6 黒褐色土 ローム粒少混、密 | 13 黒褐色土 砂質、11に近似、明、密 |
| 7 黄褐色砂層 細砂混入、しまり弱 | |



- I-I'
- 1 暗褐色土 砂質、現在の耕作土、軽石混入
 - 2 褐色土 砂質、碎多混、軽石混入
 - 3 暗褐色土 砂質、軽石混入
 - 4 黒褐色土 砂質、As-C、暗褐色砂質土混入
 - 5 褐色土 砂質、As-C混入
 - 6 暗褐色土 砂質、As-C混入、小礫多混
 - 7 黒褐色土 As-C混入、地山
 - 8 黒褐色土 砂質、軽石微混、粘性あり
 - 9 ローム層砂層

0 1:50 1m

第94図 A区・B区3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号・11号溝遺構図(2)

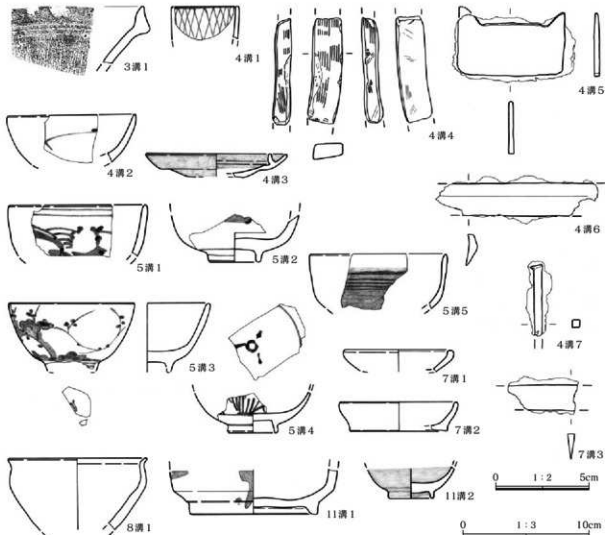
9号溝 (第93・94図 P L17)

概要 B区 75L・M12・13グリッドで検出。
 台地の斜面中段を南北に縦断、南端は8号溝と接している。延長線上には、4号溝がある。
 規模 検出長6.5m 幅0.96~1.96m前後 壁高9~64cm 西壁は崩落して幅が広がっている。
 一段深い掘り方は、直線的で幅も60~70cmと狭いものである。走向 N30° E
 覆土 褐色土、黒褐色土、暗褐色土で自然埋没。
 遺物 出土した遺物はない。時期 近世

11号溝 (第93~95図 P L18・34)

概要 A区 66A~C14~17グリッドで検出。調査区南西隅でV字状になっている。中間は途切れて

はいるが、北側は4号溝から、東側は7号溝からの延長線上にある。ただし、底面は、4号・7号溝よりも一段深くなっていて違いを見せている。谷地が南西方向へ曲がる様子からみて、4号溝の北東辺に相当するもので、ここでも区画を兼ねながら地形勾配の解消、排水を目的としたものではないだろうか。
 規模 検出長22.50m 上面の幅は、東が1m前後、北側がやや広い。しかし、壁の中段以下では、幅が30~50cmと狭くなっている、上下に2本の溝が重複しているか、下部が暗渠のような構造にもとれる。壁高は50~70cmで、西に向かって傾斜している。中段以下が狭いのは、3号溝や4号溝の傾向でもある。走向 北辺がN45° W 覆土 砂が混入している灰褐色土で埋没。遺物 碗 時期 近世



第95図 A区・B区3号・4号・5号・7号・8号・11号溝遺物図

第6節 時代不明

1 概要

ここでは、出土した遺物がなく、時期の特定ができなかった遺構を集め、時代不明として一括する。所見では、可能性として考えられる時代を明記した。

住居跡が1軒、土坑が9基である。

なお、土坑は93基のうち、報告から除外したものが10基ある。次の、22号・25号・38号・39号・52号・57号・58号・62号・63号・64号がそれぞれに、掘り方の様子から倒木痕か、ローム漸移層前後にできた自然のしみのようで、いずれも人為

性の乏しいことが理由である。ただし、調査時に作成した図面や写真は、欠番とはしないで当時のままである。これは、付図とした遺跡全体図の中でも同様で、調査時の番号をつけて位置を表示した。

最後は、遺構外遺物を掲載する。おもに遺構確認の際に出土した中から、時代を問わずに特徴的なものを集成した。17の緑釉は、遺構の数が少ない平安時代のものである。25の骨器は、半裁された脛骨に雉で穴があげられている。

2 住居跡

24号住居跡 (第96図 P L10)

概要 D区 85Q5グリッドのローム漸移層で南西隅を検出。調査区の断面で暗褐色土と黒褐色土が落ち込んでいた。壁際にトレンチを設定して確認したところ、周囲で検出した住居跡とも類似していたので住居跡と判断した。残りは調査区外である。

形状 推定方形 規模 長軸1.60m以上 短軸0.86m以上 残壁高19cm

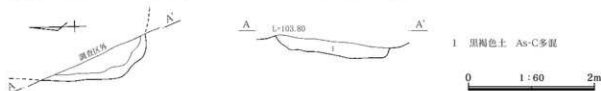
長軸方位 西辺でN5°Eを計測。

床面 ローム漸移層を約20cm掘り込んでいる。硬化面らしいものは見あたらない。また、周囲の住居跡よりも掘り込みが浅い。

周溝 検出されていない。覆土 黒褐色土で埋没している。As-Cが混入している。

遺物と出土状態 土師器製の破片が出土。

所見 想定される長軸方位は、古墳時代前期の住居跡に見られる。



第96図 24号住居跡遺構図

3 土坑

1号土坑 (第97図 P L11)

概要 D区 85T5グリッド、ローム漸移層で検出。10号・11号・16号住居跡の間にある。地震の地割れと重複し、本跡が新しい。形状 円形

規模 長軸1.30m・短軸1.18m・深さ0.30m

覆土 黒褐色土で埋没。As-Bらしい微砂とローム

ブロックが混入している。調査時の所見では、人為埋没が指摘されている。

遺物と出土状況 高坏の脚部破片が出土。

所見 平安時代とした17号土坑によく似ている。時期とすれば、平安時代の可能性が高い。

23号土坑 (第97図)

概要 D区 75O・P20グリッドのローム漸移層で検出。27号・28号・32号土坑と隣接。形状 円形 規模 長軸0.76m・短軸0.69cm・深さ0.40m 覆土 黒褐色土、黒色土、褐色土で埋没。As-Cが混入している。3～5層は柱痕である。遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 柱穴か。27号～29号・32号とは接近しているが掘立柱建物跡で調査したが、確定することはできなかった。

26号土坑 (第97図 PL12)

概要 D区 75O18グリッドのローム漸移層で検出。25号土坑に接している、30号土坑とは2mの距離である。形状 円形 規模 長軸0.77m・短軸0.66m・深さ0.25m 覆土 にぶい黄褐色土、黄褐色土で埋没。As-Cが混入している。遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 覆土の特徴では、時期は古墳時代以降である。

27号土坑 (第97図)

概要 D区 75P20グリッドのローム漸移層で検出。23号土坑と28号土坑の間にある。形状 円形 規模 長軸0.31m・短軸0.28m・深さ0.47m 覆土 黒褐色土、褐色土で埋没。2層が柱痕か。遺物と出土状況 土師器製の破片が出土。所見 形状や大きさの特徴から柱穴の可能性はある。

28号土坑 (第97図)

概要 D区 75P20、85P1グリッドのローム漸移層で検出。27号土坑と29号土坑の中間にある。形状 円形 規模 長軸0.54m・短軸0.43m・深さ0.47m 覆土 黒褐色土、褐色土、黒色土で埋没。遺物と出土状況 出土した遺物はない。所見 形状や大きさの特徴から柱穴の可能性はある。

29号土坑 (第97図 PL12)

概要 D区 85O・P1グリッドのローム漸移層

で8号住居跡の南2mで検出。形状 円形

規模 長軸0.94m・短軸0.84m・深さ0.19m 覆土 黒褐色土、黄褐色土で埋没。1層にAs-Cが混入している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状や大きさの特徴から柱穴の可能性はある。

30号土坑 (第97図 PL12)

概要 D区 75O18グリッドのローム漸移層、3号住居跡と4号住居跡にはさまれて検出。形状 楕円形 規模 長軸1.40m・短軸0.83m・深さ0.40m 長軸方位 N70° W 覆土 黒褐色土、暗褐色土、褐色土で埋没。As-Cが混入している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 形状や大きさの特徴から柱穴の可能性はある。

33号土坑 (第97図 PL12)

概要 D区 75P19グリッドのローム漸移層、4号住居跡と8号住居跡にはさまれて検出。形状 円形 規模 長軸0.33m・短軸0.29m・深さ0.22m 覆土 黒褐色土、褐色土、明黄褐色土で埋没。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

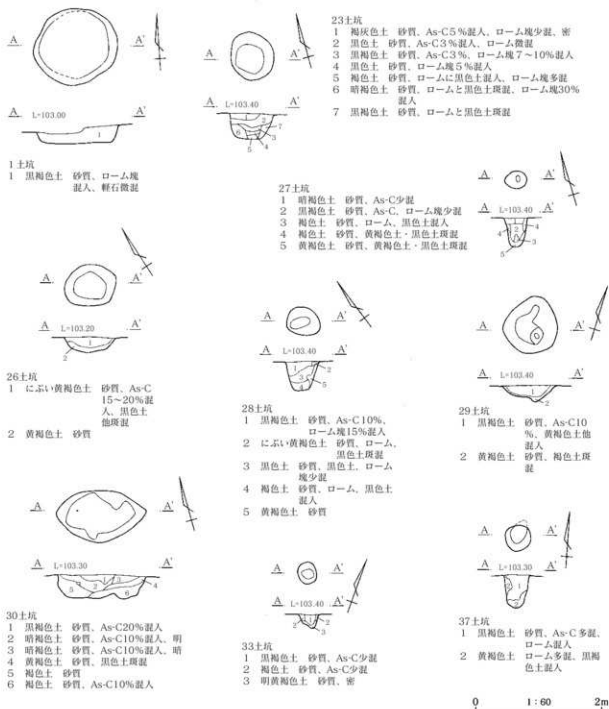
所見 形状や大きさの特徴から、5号住居跡の柱穴を検討したが確定することができなかった。

37号土坑 (第97図)

概要 D区 85S3グリッドのローム漸移層で検出。42号～44号土坑とそれぞれ2m前後の距離にある。形状 円形 規模 長軸0.40m・短軸0.40m・深さ0.52m 覆土 黒褐色土、黄褐色土で埋没。As-Cが混入している。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。

所見 柱穴の可能性はある。対になるピットは検出することができなかったが、37号土坑からみて南西方向に古墳時代前期の遺物が集中する42号土坑がある。これを貯蔵穴と考え、住居跡の南西部を検出したことになるが確定することができなかった。

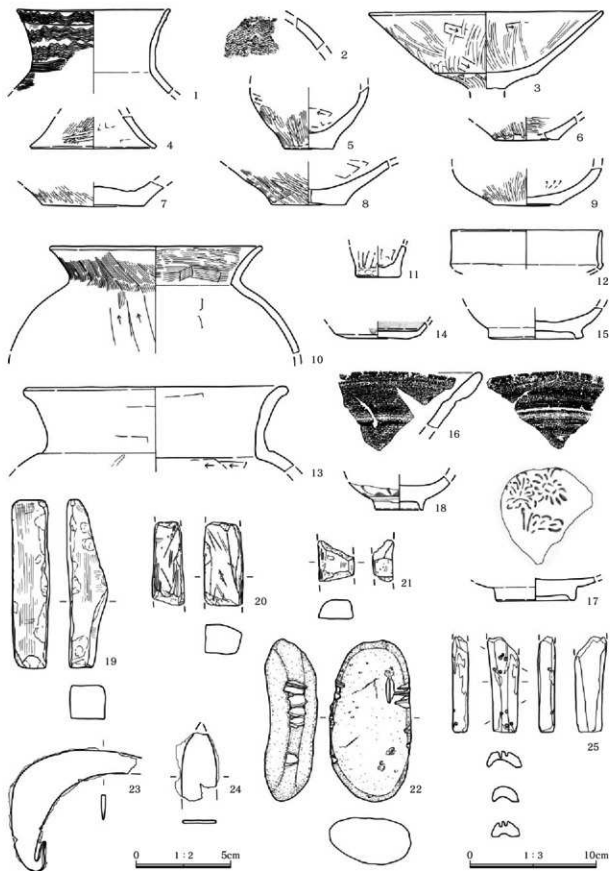


第97図 1号・23号・26号・27号・28号・29号・30号・33号・37号土坑遺構図

4 遺構外遺物 (第98図 P.L34)

1・2が弥生土器、3~13が古墳時代の土師器である。11は、本遺跡では数少ない手づくねである。17の縁軸には陰刻花文がある。23が鎌、24が

鉄鎌である。25の兵器は、D区の遺構確認時に出土したもので時期について特定することができない。また、穿孔は不規則で意図も不明である。



第98図 遺構外遺物図

富田西帯遺跡縄文土器観察表

遺物番号	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様	等	備考	回数	写真
2坑1	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		前期後章	14	19
2坑2	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		前期後章	14	19
2坑3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
9坑1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	0段多糸L.R.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
9坑2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	単部L.R.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
32坑1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	単部R.L.縄紋を施紋する。		黒浜式	14	19
32坑2	深鉢	胴部片				32坑1と同一個体。		黒浜式	14	19
32坑3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	暗赤褐	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
32坑4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	斜位に黒糸紋?を施す。		黒浜式	14	19
35坑1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい黄橙	ふつつ	波状口縁。波頭部下から沈線垂下させ、肋骨紋を施す。口唇外縁に刻みを付す。		黒浜式	14	19
35坑2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつつ	口縁下にC字状爪形紋、コンパス紋をめぐらす。内面研磨。		黒浜式	14	19
35坑3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつつ	口縁下に3本の平行沈線、コンパス紋を施す。口唇部、内面研磨。		黒浜式	14	19
35坑4	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	附加条縄紋による羽状構成。		黒浜式	14	19
35坑5	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	黒褐	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。内面研磨。		黒浜式	14	19
35坑6	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつつ	単部L.R.L.縄紋による羽状構成。		黒浜式	14	19
35坑7	深鉢	胴部片				35坑4と同一個体。			14	19
35坑8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
35坑9	深鉢	胴部片				35坑4と同一個体。			14	19
36坑1	深鉢	口縁・胴部	粗砂	橙	ふつつ	口縁が大きく外反する器形で、最先状の波状口縁を呈す。胴部に1段の屈曲部を有す。浮線による横帯構成で、地紋に単部R.L.縄紋を施紋。3条ないし4条1単位の浮線間に刺突を充て施紋する。屈曲部上の横帯間に刺突、X字状の浮線を施す。はじめに沈線で全体のモチーフを描き、沈線の凹みの中に浮線用の白・粘土を流し込むといった方法で製作している。		諸磯式	14	19
38坑1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	良好	口縁下から斜位に沈線を施す。		黒浜式	14	19
38坑2～38坑6						38坑1と同一個体。			14	19
39坑1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
40坑1	深鉢	胴部片				40坑2と同一個体。			14	19
40坑2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつつ	単部R.L.L.縄紋による羽状構成。		黒浜式	14	19
50坑1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい黄橙	ふつつ	内側ぎの口唇部。縦位沈線を施す。		黒浜式	14	19
50坑2	深鉢	口縁部片				50坑1と同一個体。			14	19
50坑3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	単部L.R.縄紋を地紋とし、半截竹管による平行沈線を横位多段に施す。		黒浜式	14	19
50坑4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつつ	無部L.R.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
50坑5	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつつ	角押状刺突を横位施紋する。		黒浜式	14	19
50坑6	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつつ	単部R.L.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
55坑1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい赤褐	ふつつ	単部L.R.縄紋を横位施紋する。内面研磨。		黒浜式	14	19
55坑2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつつ	単部R.L.L.縄紋による菱形構成。		黒浜式	14	19
55坑3・55坑4						55坑2と同一個体。			14	19
83坑1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にふい赤褐	ふつつ	単部L.R.縄紋を横位施紋する。		黒浜式	14	19
83坑2～83坑4						83坑1と同一個体。			14	19

遺構外遺物

遺物番号	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様	等	備考	回数	写真
1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維、繊維	にふい橙	ふつつ	内外面に部分的に粗い条痕を施す。器口の凹凸顕著。		早期後半条痕紋系	18	19
2～9						1と同一個体。			18	19

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 番号	器種	部 位	胎 土	色 調	焼 成	紋 様 等	備 考	図 版	写 真
10	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい・黄橙	ふつう	多載竹管状工具による沈線で幾何学モチーフを置く。内面研磨。	黒浜式	18	19
11	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半載竹管による平行沈線で斜格子目モチーフを置く。	黒浜式	18	19
12	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい・黄橙	ふつう	内削ぎの口唇部。縦位沈線を施す。	黒浜式	18	19
13	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい・黄橙	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位、斜位に施す。	黒浜式	18	19
14	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
15	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
16	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
17	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
18	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にふい・黄橙	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位、斜位に施し、以下、無節L・R縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	地紋に単節L・R縄紋を横位施し、半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
20	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施し、以下、単節L・R縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
21	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にふい・赤褐	ふつう	地紋に単節R・L縄紋を横位施し、半載竹管による平行沈線を横位に施す。内面研磨。	黒浜式	18	19
22	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい・橙	ふつう	口縁下に半載竹管による横位沈線、コンパス紋を施す。内面研磨。	黒浜式	18	19
23	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半載竹管による平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式	18	19
24	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	C字状爪形紋を横位に施し、以下、単節R・L、L・R縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	18	19
25	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	波状口縁で細く内湾する器形。単節R・L、L・R縄紋による羽状構成。	黒浜式	18	19
26	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	赤褐	ふつう	単節R・L縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
27	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	赤褐	ふつう	単節L・R縄紋を横位施す。内面研磨。	黒浜式	18	19
28	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にふい・黄橙	ふつう	附加条縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
29	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	単節R・L縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
30	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	単節R・L、L・R縄紋による羽状構成。	黒浜式	18	19
31	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	単節R・L、L・R縄紋による菱形構成。内面研磨。	黒浜式	18	19
32	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節R・L縄紋を施す。	黒浜式	18	19
33	深鉢	胴部片	粗砂、結晶片岩、繊維	橙	ふつう	附加条縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
34	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にふい・黄橙	ふつう	附加条縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
35	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節L・R縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
36	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	良好	無節R・L縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
37	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	無節R・L縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
38	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	無節R・L縄紋を横位施す。	黒浜式	18	19
39	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	2条1単位の無糸紋Rを斜位施す。	黒浜式	18	19
40~42						39と同一個体。		18	19
43	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	地紋に単節R・L縄紋を施し、円形刺突を施す。	諸磯a式	18	19
44	深鉢	口縁部片	粗砂	橙	良好	単節R・L縄紋を横位施す。	前期後章	18	19
45	深鉢	胴部片	粗砂	赤褐	良好	単節R・L縄紋を横位施す。	前期後章	18	—
46	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	単節R・L縄紋を横位施す。	前期後章	18	—
47	深鉢	胴部片	粗砂、結晶片岩	明赤褐	良好	単節L・R縄紋を横位施す。	前期後章	18	19
48	深鉢	胴部片	粗砂	明赤褐	良好	O段多条R・L縄紋を横位施す。	前期後章	18	19
49	深鉢	底部片				45と同一個体。		18	19
50	深鉢	胴部片	粗砂	黄橙	ふつう	浮線を横位多段に施し、浮線間に弧状モチーフを置く。	諸磯b式	18	19
51	深鉢	胴部片	粗砂、金雲母	橙	良好	階線を垂下させ、3条1単位の沈線を沿わせる。	阿玉台式	18	19
52	深鉢	胴部片				51と同一個体。		18	19

35・36号土坑

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
35坑 1	石製品 砥石	完形	縦 7.5 厚 1.4	覆土	①胎土	縦目目は粗く深い。 横25.5g	10 28
36坑 2	土師器 台付甕か	胴部破片	高(4.2) 底(8.4)	覆土	①雲母、赤・白色粒、角閃石 ②灰黄	外面 風化。黒ナデカ。 内面 指面風・黒ナデカ。	10 28

3号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	口縁部破片	高(3.1)	南東部 3.5	①白色粒、角閃石 ②にふい檜	外面 折り返し口縁。6本1組の波状文。 内面 ナテ。	20 23
2	弥生 甕	胴部～肩 部破片	高(2.0)	覆土	①白色粒 ②にふい檜	外面 波状文。5本1組の縞状文。 内面 ナテ。	20 23
3	弥生 甕	肩部破片	高(2.0)	覆土	①白・黒色粒 ②檜	外面 5本1組の波状文。 内面 ナテ。	20 23
4	弥生 甕	肩部破片	高(1.2)	覆土	①砂粒 ②にふい檜	外面 波状文。研磨。 内面 ナテ。	20 23
5	弥生 甕	口縁部～ 胴部1/2	口(17.9) 高(8.4)	西部 2.0	①砂粒、赤色粒 ②にふい檜	外面 折り返し口縁。8本1組の波状文。縞 状文。内面 磨き。	20 23
6	弥生 甕	胴部1/2	高(5.6)	西部 3.0	①石英 ②にふい檜	外面 4本1組の波状文。黒ナテ輪積風。 内面 黒ナテ。	20 23
7	弥生 甕	胴部～底 部3/4	高(16.5) 底 6.4	西部 2.0	①砂粒、赤色粒、石英 ②にふい檜	外面 2本1組の波状文。黒ナテ。底部隆起 り。内面 黒ナテ。	20 23
8	弥生 甕	略完	口 11.6 高 15.3	南西部 2.5	①砂粒、角閃石、赤色粒 ②赤	外面 6本1組の波状文。縞状文。黒ナテ後、 磨き。底部隆起り。黒底。内面 黒ナテ。	20 23
9	弥生 甕	口縁部～ 胴部3/4	口 13.6 高(18.6)	南西部 3.5	①赤色粒 ②檜	外面 折り返し口縁。4本1組の波状文。頂 部縞状文。黒ナテ。内面 黒ナテ。	20 23

5号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	口縁部破片	口(9.5) 高(1.3)	覆土	①白色粒 ②にふい檜	外面 縞目目後。4本1組の波状文。 内面 ナテ。	21 24
2	弥生 甕	肩部破片	高(2.1)	東部 8.5	①砂粒 ②にふい檜	外面 4本1組の波状文。 内面 ナテ。	21 24
3	弥生 甕	肩部破片	高(4.0)	南西部 1.0	①砂粒 ②にふい檜	外面 3本1組の波状文。黒磨き。 内面 黒磨き。	21 24
4	弥生 壺	胴部破片	高(12.2)	北西部 1.5	①白・黒色粒 ②にふい檜	内外面 黒ナテ。	21 24
5	弥生 小型甕	口縁部～ 胴部破片	口(8.0) 高(3.0)	中央部 0.5	①砂粒、赤色粒 ②檜	外面 ナテ・黒ナテ。胴部隆起り。 内面 黒ナテ。	21 24
6	弥生 甕か	胴部～底 部	高(3.0) 底(4.5)	西部 1.0	①赤・白色粒、針、角閃石 ②灰褐	外面 隆起り。赤彩。 内面 黒ナテ。赤彩。	21 24
7	弥生 壺	4/5	口 10.0 高(9.4)	北西部 床面直上	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角閃石 ②灰黄	外面 折り返し口縁。横ナテ後、黒ナテ・ナ テ。隆起り後、黒磨き。口縁部～胴部黒底。 内面 横ナテ・黒磨き。	21 24

6号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	胴部～肩 部破片	高(2.2)	覆土	①砂粒 ②にふい檜	外面 縞状文。4本1組の波状文。 内面 ナテ。	23 24
2	弥生 甕	肩部破片	高(1.6)	覆土	①白色粒 ②にふい檜	外面 4本1組の波状文。 内面 黒磨き。	23 24
3	弥生 壺	胴部中位 1/4	高(9.4)	東部 4.0	①砂粒、赤・白色粒 ②赤褐	外面 波状文・黒ナテ。 内面 黒磨き。縦付着。	23 24
4	弥生 甕	口縁部～ 胴部破片	口(15.5) 高(7.4)	東部 2.0	①砂粒、白色粒 ②にふい檜	外面 折り返し口縁。縞目目後。6本1組の 波状文。肩部黒底。内面 黒磨き。	23 24

8号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	口縁部破片	口(13.0) 高(1.8)	覆土	①砂粒 ②檜	外面 黒ナテ後。5本1組の波状文。 内面 黒ナテ。	26 24
2	弥生 甕	胴部～肩 部破片	高(1.8)	覆土	①黒色粒 ②にふい檜	外面 縞状文・波状文。 内面 黒磨き。	26 24

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
3	弥生 壺	口縁部 1/5	口(12.8) 高(2.8)	西部 5.0	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい橙	内外面 粗い段磨き。黒斑。	26 24
4	弥生 壺	胴部～底 部破片	高(3.2) 底 4.5	東部 26.5	①赤・白色粒、針、角四石 ② ②黒褐	外面 段ナ字後、粗い段磨き・段ナテ。 内面 段ナテ。	27 24
5	弥生 壺	胴部～底 部	高(10.4) 底 4.2	北西部 4.5	①雲母、白色粒、針、角四石 ②にふい橙	外面 段磨き・段削り。黒斑。 内面 段ナテ。黒斑。	26 24
6	弥生 甕	2/3	口 11.4 高 15.2 底 5.3	北部 4.0	①白色粒 ②赤	外面 段磨き後、6本1組の波状文。全面保 付着。 内面 段ナテ。底部段ナテ。	27 24
7	弥生 甕	胴部～底 部	高(23.0) 底 7.7	中央部・ 北部 0.5	①赤・白色粒、角四石 ②淡黄	外面 胴部6本1組の波状文。胴部8本1組 の波状文。6本1組の波状文。段ナテ・段磨 き。胴部黒斑。内面 ナテ。	27 25

9号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土製品 紡錘車	定形 様	厚 1.4 径 4.2 孔 0.7	北側掘出 部 34.5	①砂粒、白色粒 ②橙	形状はやや歪んでいる。 重21.2g	29 25

82号土坑

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	胴部～底 部1/2	高(24.1) 底 8.8	掘土	①砂粒、赤色粒 ②淡黄橙	外面 傾位の磨き・洗刷。棒状工具による 調整。胴部上位保付着。底面木炭灰。 内面 段削り。全面保付着。	30 29

1号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真	
1	土師器 高坏	坏部2/3	口 18.8 高(6.1)	北部 3.0	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②橙	外面 刷毛目後、段磨き。段ナテ後、ナテか。 内面 段ナテ後。段磨き。風化。	33 21	
2	土師器 高坏	坏部1/2	口 20.0 高(6.9)	北部 -0.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②橙	外面 刷毛目後、粗い段磨き。赤彩か。内面 刷毛目後。粗い段磨き。風化顕著。赤彩か。 内面 刷毛目後、段磨き。内面 上部1/3破 り。中央段ナテ。下部1/3段削り。	33 21	
3	土師器 高坏	脚部2/3	高(10.7)	北部 3.5	①雲母、砂粒、白色粒、針、 角四石 ②明赤褐	①赤・白色粒、針、角四石 ② ②淡黄	外面 刷毛目後、段磨き。赤彩か。 内面 破り。段ナテ。底部段削り。赤彩か。	33 21
4	土師器 高坏	脚部3/5	高(10.5)	北部 4.0	①赤・白色粒、針、角四石 ② ②淡黄	外面 刷毛目後、段磨き。赤彩か。 内面 破り。段ナテ。底部段削り。赤彩か。	33 21	
5	土師器 高坏	口縁部～ 脚部4/5	口 19.8 高(16.6)	北西部 2.5	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②にふい黄橙	外面 口縁部～脚部段ナテ。段磨き。 内面 破り・指面痕。段ナテ。	33 21	
6	土師器 高坏	4/5	口 14.3 高 12.1 底 12.4	北西部 -3.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②明赤褐	外面 刷毛目後。ナテか。黒斑。 内面 刷毛目。黒斑。	33 21	
7	土師器 高坏	3/4	口 16.6 高 12.8 底 13.6	北部 2.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②明赤褐	外面 横ナテ・刷毛目。 内面 粗い段磨き。刷毛目。口縁部ナテ。	33 21	
8	土師器 小型鉢	3/4	口(8.8) 高 5.2	北部 0.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②明赤褐	外面 刷毛目後、横ナテ。底部段削り後ナテ。 内面 段ナテ。	33 21	
9	土師器 鉢	4/5	口 20.8 高 11.0 底 5.1	北部 床面直上	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②赤	外面 刷毛目後、横ナテ・刷毛目。底部段削 り。赤彩か。 内面 段ナテ後、横ナテ・段ナテ。	33 21	
10	土師器 甕	3/4	口 23.9 高 14.7 底 5.8	北部 9.5	①雲母、石粒、砂粒、赤・白 色粒、針、角四石 ②上半: 赤褐 下半:にふい橙	外面 段ナテ後、横ナテ・指面痕。 内面 被熱。刺痕。指面痕。底部に1孔。孔 径2.1cm。	33 21	
11	土師器 壺	口縁部 1/3	口(19.4) 高(5.8)	中央部 -5.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい橙	内外面 横ナテ。	33 21	
12	土師器 壺	口縁部 4/5	口 28.6 高(8.2)	中央部北 部P1 2.5	①雲母、砂粒、白・黒色粒、 針、角四石 ②にふい黄橙	外面 刷毛目後、段ナテか。 内面 段ナテか。	33 21	
13	土師器 壺	胴部～底 部3/5	高(14.5) 底 5.4	北西部 6.5	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 段ナテ後、段磨き。黒斑。赤彩。 内面 段ナテ。黒斑。	34 22	
14	土師器 甕	2/3	口(20.8) 高 26.4 底 5.3	北部・北 西部 0.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい赤褐	外面 刷毛目後、横ナテ・段ナテ。 内面 刷毛目後、横ナテ・段ナテ。	34 22	
15	土師器 甕	口縁部 1/4	口(19.2) 高(5.0)	北部 0.5	①雲母、赤・白色粒、針、角 四石 ②赤褐	外面 刷毛目後、横ナテ。胴部刷毛目。 内面 刷毛目後、横ナテ・段ナテ。	34 22	
16	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/3	口(15.0) 高(15.6)	北西部 7.5	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ・粗い刷毛目。保付着。 内面 段ナテ。炭化物付着。	34 22	
17	土師器 甕	口縁部～ 胴部2/3	口(15.4) 高(8.8)	北部 2.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②黄橙	外面 口縁部横ナテ。胴部段削り後、段ナテ。 一部赤彩。内面 段ナテ。口縁部赤彩。	34 22	

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
18	土師器 甕	1/3	口(18.8) 高 23.7 底 6.8	北部 4.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にふい縄	外面 横ナ字、刷毛目後、段削り・段ナ字。 内面 刷毛目後、横ナ字。段ナ字・ナ字。底部被熱。	34 22
19	土師器 台付甕	胴部～脚部	高(12.3) 底 14.3	北部 2.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい縄	外面 粗い段ナ字。被熱で赤化。 内面 粗い段ナ字。段ナ字後、粗い横ナ字。	34 22
20	土師器 甕	胴部～底部	高(13.9) 底 4.2	北西部 7.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰褐	外面 段ナ字・刷毛目。底部段削り。被熱で赤化。内面 段ナ字。炭化物付着。	34 22

2号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 甕	口縁部～胴部	口(17.3) 高(7.2)	南西1坑内 10.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄褐	外面 段ナ字後、横ナ字。刷毛目後、段ナ字、黒肌。内面 段ナ字、黒肌。	36 23
2	土師器 甕	底部1/3	高(2.2) 底(7.2)	中央部 5.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段削り。 内面 段削り・段ナ字。	36 23
3	土師器 甕	底部1/4	高(2.1) 底(4.6)	北部壁際 床高直上	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰褐	外面 段ナ字。 内面 段ナ字、黒色。	36 23
4	土師器 甕	胴部～底部	高(3.7)	南西隅1坑内 5.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい縄	外面 段削りか、平底、6孔遺存。 内面 段ナ字か。	36 23

4号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 高坏	坏部3/4	口 13.2 高(5.3)	南東部・南部 8.0	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にふい縄	外面 横ナ字・段削き。刷毛目。 内面 横ナ字・段削き。	41 23
2	土師器 高坏	脚部2/3	高(10.0)	南部 7.0	①砂粒、白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 刷毛目後、段削き。 内面 上位段り、下位段ナ字。	41 23
3	土師器 高坏	脚部1/5	高(2.1) 底(15.8)	覆土	①砂粒、白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 横ナ字。 内面 横ナ字、黒肌。	41 23
4	土師器 甕台	脚部1/3	高(3.8)	南部 37.5	①砂粒、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 刷毛目。 内面 ナ字・段ナ字か。	41 23
5	土師器 甕	口縁部 1/4	口(9.2) 高(3.6)	南部 14.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②橙	外面 横ナ字・ナ字。 内面 刷毛目後、横ナ字・ナ字。	41 23
6	土師器 甕	口縁部～体部1/5	口(10.6) 高(5.0)	東部 13.5	①砂粒、赤・白・黒色粒、針 ②褐	外面 段ナ字後、横ナ字・ナ字、粗い段削き。 内面 段ナ字後、横ナ字・段ナ字。	41 23
7	土師器 甕	略完	口 12.1 高 7.1 底 4.1	南部 15.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②明褐	外面 上半段ナ字後、横ナ字。下半段ナ字・段削り。 内面 段ナ字後、横ナ字・段ナ字。	41 23
8	土師器 甕	胴部～底部3/5	高(21.8) 底(9.7)	南部 3.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②暗灰黄	外面 段削り・段ナ字後、粗いナ字・段削り。被熱で赤化。煤付着。 内面 段ナ字。炭化物付着。	41 23
9	土師器 甕	4/5	口 20.8 高(4.5) 底 5.1	北東部・北部・中央部 5.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 横ナ字、刷毛目、段削り。被熱で赤化。段ナ字。煤付着。 内面 横ナ字。炭化物付着。	41 24
10	土師器 甕	口縁部～胴部1/5	口(11.4) 高(4.5)	南部 22.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい橙	外面 横ナ字・段削き。内面 口縁部段ナ字後、横ナ字。胴部段ナ字後、ナ字。	41 24
11	土師器 甕	口縁部破片	口(15.4) 高(4.3)	南西部 2.0	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②褐	内外面 段ナ字後、横ナ字・段ナ字。	41 24
12	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	口(17.0) 高(6.7)	南部 32.5	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②橙	外面 横ナ字・刷毛目。 内面 横ナ字・段ナ字。須頭痕・段ナ字。	41 24
13	土師器 台付甕	胴部1/4	高(2.2)	南部 1.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 段ナ字。 内面 段ナ字か。割落。	41 24
14	石製品 紡錘車	完形	厚 1.4 径 4.3 孔 0.5	東部 11.0		片面に被褥をもつ。 重37.7g	24 24
15	弥生 甕	口縁部破片	口(13.0) 高(6.3)	南部 24.0	①白色粒 ②にふい橙	外面 折り起し口縁。4本1組の波状文。塵状文。内面 段ナ字。	24 24
16	弥生 甕	肩部破片	高(3.8)	覆土	①角四石 ②にふい橙	外面 6本1組の波状文。ナ字。 内面 ナ字。	24 24
17	弥生 甕	肩部破片	高(4.0)	南部 20.0	①角四石 ②にふい黄橙	外面 4本1組の波状文。ナ字。 内面 ナ字。	24 24
18	弥生 甕	胴部～肩部破片	高(4.2)	北東部 38.0	①砂粒 ②にふい褐	外面 塵状文。5本1組の波状文。黒肌。焼成不良。内面 ナ字。	24 24
19	弥生 甕	胴部～肩部破片	高(2.8)	覆土	①砂粒 ②にふい橙	外面 塵状文。5本1組の波状文。 内面 段ナ字。	24 24

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
20	弥生 甕	肩部～肩 部破片	高(2.6)	覆土	①砂粒 ②にふい橙	外面 康状文。ナデ。 内面 ナデ。	42 24
21	弥生 甕	肩部～肩 部破片	高(2.8)	覆土	①角四石 ②にふい橙	外面 康状文。4本1組の波状文。 内面 ナデ。	42 24
22	弥生 甕	肩部破片	高(2.5)	覆土	①砂粒、角四石 ②灰黄褐	外面 波状文。ナデ。 内面 ナデ。	42 24
23	弥生 甕	肩部破片	高(2.4)	覆土	①白色粒 ②にふい橙	外面 6本1組の波状文。黒ナデ。 内面 ナデ・黒ナデ。	42 24

10号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 鉢	3/4	口 9.6 高 8.9 底 2.4	南東隅周 溝 27.0	①石粒、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②にふい黄橙	口縁は直線状に開く。 外面 丁寧な段磨き。底部窪む。 内面 刷毛目・黒ナデ。	46 25
2	土師器 鉢	3/4	口(14.0) 高 5.1 底(4.3)	東壁周溝 8.0	①雲母、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②にふい黄橙	外面 段磨き。赤彩か。体部下半割離。 内面 段磨き。赤彩か。	46 25
3	土師器 甕台	肩部破片	高(2.7) 底(10.6)	北東部 -4.0	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 段磨き。赤彩か。 内面 刷毛目後・黒ナデ。	46 25
4	土師器 甕 台付甕	口縁部～ 胴部破片	口(12.1) 高(4.0)	南部 14.0	①雲母、砂粒、白・黒色粒、 針、角四石 ②橙	外面 刷毛目後、横ナデ・刷毛目。 内面 刷毛目後、横ナデ。	46 25
5	土師器 甕 台付甕	胴部	高(6.2) 底 9.4	南東部 P2内	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針 ②橙	外面 S字状口縁。ナデ。一部刷毛目。 内面 黒ナデ・ナデ。	46 25
6	土師器 甕 台付甕	口縁部～ 脚部	口(9.9) 高 14.1 底 6.1	北西部 26.5	①雲母、砂粒、白色粒、針、 角四石 ②にふい黄橙	外面 口縁部刷毛目後、横ナデ。胴部刷毛目 ・黒ナデ・ナデ。黒斑。 内面 刷毛目後、横ナデ・黒ナデ。	46 25

11号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 鉢	略完	口 15.9 高 7.9 底 4.4	東壁周溝 16.5	①砂粒、赤・白色粒、針 ②にふい黄橙	外面 刷毛目後ナデ。体部～底部黒斑。 内面 段磨き。剥落。	47 25
2	土師器 甕 台付甕	肩部～胴 部	高(8.4)	東部 5.0	①雲母、石粒、砂粒、白色粒、 針 ②にふい黄橙	外面 刷毛目後・黒ナデ。黒斑。 内面 黒ナデ。	47 25
3	土師器 甕 台付甕	略完	口 13.1 高 18.5 底 8.7	東部 4.5	①雲母、砂粒、白色粒、針、 角四石 ②暗灰黄	外面 刷毛目後・黒ナデ。胴部黒斑。煤付着。 内面 刷毛目後、横ナデ・黒ナデ。胴部黒斑。	47 25
4	土師器 甕	胴部～底 部	高(20.6) 底 7.3	東部 4.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい黄橙	外面 段磨き・黒ナデ。赤彩。 内面 黒ナデ・刷毛目。	47 25
5	土師器 甕	口縁部～ 底部3/5	高(18.8) 底 7.1	北壁周溝 -0.1	①砂粒、赤・白・黒色 粒、針、角四石 ②オリーブ黒	外面 口縁部刷毛目後・黒ナデ。体部段磨り・ 黒ナデ。煤付着。内面 口縁部刷毛目後、粗い 段磨き。胴部黒ナデ・ナデ。刷毛目・黒ナデ。	47 25

12号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 高坏	坏部2/5 高坏	口(11.9) 高(4.6)	北東部 4.0	①雲母、砂粒、赤・黒色粒、 針、角四石 ②灰黄	外面 横ナデ・段磨り後、段磨き。 内面 横ナデ後、黒ナデ。	48 25

13号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 甕	口縁部 1/5	口(11.8) 高(3.0)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	内外面 刷毛目後、段磨き。赤彩か。	49 26
2	土師器 甕	口縁部 1/5	口(11.4) 高(3.1)	南西部 12.5	①赤・白・黒色粒、針、角四 石 ②にふい赤褐	内外面 粗い段磨き。赤彩。	49 26
3	土師器 鉢	胴部～底 部2/5	高(10.6) 底(2.5)	南西隅壁 際 9.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	内外面 黒ナデ・ナデ。赤彩か。	50 26
4	土師器 鉢	3/5	口 9.4 高 4.1	南西部 12.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい橙	外面 段磨り後、段磨き。 内面 粗い段磨き。口縁部～体部黒斑。	49 26
5	土師器 鉢	体部～底 部3/5	高(5.0) 底 13.0	西壁周溝 13.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段磨き。黒斑。 内面 刷毛目後、粗い段磨き・黒ナデ。黒斑。	50 26
6	土師器 甕	胴部～底 部	高(5.0) 底 2.9	南西隅 13.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい赤褐	外面 段磨き。 内面 段磨り・黒ナデ。	50 26
7	土師器 甕	胴部～底 部破片	高(3.8) 底(6.1)	中央部 4.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい黄	外面 段磨き。黒斑。 内面 黒ナデ。	50 26

道物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
8	土師器 器台	坏部1/4	口(12.1) 高(3.3)	南西隅壁 際 13.0	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	内外面 施磨き。	50 56
9	土師器 鉢	口縁部～ 胴部破片	口 4.0 高(5.3)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 横ナ字後、刷毛目か。 内面 横ナ字後、施ナ字。	26 26
10	土師器 費	口縁部破片	口(13.4) 高(2.3)	北西部 16.5	①雲母、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 横ナ字後、横ナ字・刷毛目。煤付着。 内面 横ナ字後、横ナ字。	50 26
11	土師器 費	口縁部破片	口(16.6) 高(2.0)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②オリーブ黒	外面 横ナ字後、横ナ字か。黒斑。 内面 横ナ字後、横ナ字か。施ナ字か。	50 26
12	土師器 費	胴部～底 部破片	高(3.0) 底(4.7)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 粗い刷毛目、ナ字・施磨り。 内面 横ナ字・刷毛目。底部黒斑。	50 26
13	土師器 台付費	口縁部	口(14.3) 高(2.7)	北西部 8.5	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 S字状口縁。横ナ字後、刷毛目。煤付着。 内面 横ナ字。屈曲部施磨き。	50 26
14	土師器 台付費	口縁部～ 胴部1/4	口 15.7 高(10.5)	北西部 8.5	①雲母、砂粒、赤・白・黒色粒、針 ②にふい黄	外面 S字状口縁。横ナ字後、刷毛目。煤付着。 内面 横ナ字後、施ナ字。	50 26
15	土師器 台付費	胴部3/5	高(8.5) 底(10.3)	北西部 16.5	①石粒、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 S字状口縁。刷毛目・ナ字。 内面 横ナ字・折頭肌。	50 26
16	石製品 砥石	完形	幅 6.6 長 5.5 厚 4.3	覆土	軽石	平面形・断面形ともに楕円形を呈する。砥ぎ目は粗く深い。重37.2g	50 26

15号住居跡

道物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 費	口縁部破片	口(13.3) 高(2.3)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 横ナ字。黒斑。 内面 横ナ字後、刷毛目。黒斑。	53 26

16号住居跡

道物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 器台	坏部1/3	口(7.8) 高(1.6)	南西隅 9.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	内外面 粗い施磨き。	55 26
2	土師器 器台	略完	口 8.5 高 8.4 底 11.9	貯蔵穴内 -23.5	①雲母、砂粒、白・黒色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 施磨き；刷毛目。赤彩か。 内面 横ナ字・ナ字。黒斑。	55 26
3	土師器 鉢	3/4	口 8.6 高 5.4	南西隅 10.0	①雲母、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄橙	外面 横ナ字後、施磨き。赤彩か。底部黒斑。 内面 横ナ字後、施磨き・施ナ字。赤彩か。	55 26
4	土師器 鉢	口縁部～ 底部1/3	口(10.0) 高 7.0 底 2.8	貯蔵穴内 -48.5	①雲母、石粒、白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 横ナ字後、刷毛目。施磨き・施磨り。 内面 口縁部横ナ字・刷毛目後、粗い施磨き。体部施ナ字。	55 26
5	土師器 鉢	2/3	口 17.5 高 7.7 底 3.3	南西隅壁 際 4.0	①雲母、赤・白・黒色粒、砂粒、針 ②にふい赤褐	外面 刷毛目後、施磨き・施ナ字。黒斑。赤彩か。 内面 わずかに施磨き。口縁部黒斑。赤彩か。	55 26
6	土師器 高坪	口縁部破片	口(16.6) 高 2.8	貯蔵穴内 -39.5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	内外面 施磨き。赤彩か。	55 26
7	土師器 壺	口縁部 1/5	口(14.7) 高(4.8)	中央部 7.0	①石粒、砂粒、赤・白色粒、針 ②灰黄	外面 施磨き。柳状浮文3本セットで1箇所。 内面 施磨き。刷毛目。施ナ字か。	55 26
8	土師器 壺	3/4	口 10.5 高 13.2 底 2.6	西部 5.5	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 折り返し口縁。横ナ字後、施磨き。胴部～底部黒斑。 内面 横ナ字後、施磨き・施ナ字。	55 26
9	土師器 台付費	口縁部～ 胴部3/5	口(11.2) 高(14.5)	貯蔵穴内 -26.5	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 S字状口縁。横ナ字・刷毛目。口縁部～胴部煤付着。 内面 横ナ字・施ナ字。底部灰化物付着。	56 26
10	土師器 台付費	胴部1/3	高(4.0) 底(8.2)	南西隅 8.0	①砂粒、石英、白・黒色粒、針 ②にふい黄橙	外面 S字状口縁。横ナ字後、刷毛目。 内面 横ナ字後、ナ字。	56 26
11	土師器 台付費	胴部1/4	高(4.2) 底(9.2)	貯蔵穴内 -16.5	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 S字状口縁。刷毛目。被熱で赤化。 内面 横ナ字・ナ字。	56 26
12	貝塚穴 灰泥岩	1.7×1.4 ×0.8	重 1.3g	覆土	②にふい黄	2孔のみ道付。被熱で赤化。	56 26

17号住居跡

道物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 壺	口縁部～ 胴部破片	口(16.4) 高(5.6)	北東部 16.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 横ナ字・施磨き。赤彩。口縁部黒斑。 内面 横ナ字・粗い施磨き。割落。	58 27
2	土師器 壺	口縁部～ 胴部1/4	口(19.9) 高(16.7)	北東部・ 東部 15.0	①雲母、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 折り返し口縁。横ナ字・施ナ字。刷毛目後、粗い施磨き。口縁部～胴部黒斑。 内面 横ナ字・施磨き。	58 27
3	土師器 壺	胴部～底 部破片	高(2.6) 底(9.7)	覆土	①白色粒、角四石 ②オリーブ黒	外面 施磨き・施磨り。 内面 横ナ字・粗い施磨き。	58 27

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
4	土師器 壺か費	底部破片	高(1.4) 底 8.2	北東部 18.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい黄	外面 段磨き・段ナデ。黒斑。 内面 段ナデ。黒斑。	58 27
5	土師器 壺	底部破片	高(11.3) 底 4.3	覆土	①赤色粒、針、角四石 ②赤褐	外面 段磨き。赤彩。胴部黒斑。 内面 ナデ・段ナデ。	58 27
6	土師器 器台	脚部1/4	高(6.0) 底(13.0)	東部 11.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②浅黄	外面 段磨き。黒斑。穿孔。 内面 ナデ・段ナデ。	58 27
7	土師器 台付費	3/4	口 14.0 高 20.4 底(10.4)	東部 10.0	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい黄	外面 横ナデ・段削り後、段磨き。口縁部～ 胴部黒斑。塚付着。 内面 段ナデ。口縁部黒斑。	58 27
8	土師器 台付費	口縁部～ 胴部破片	口(15.1) 高(3.7)	南東部 2.0	①雲母、砂粒、赤色粒、針、 角四石 ②にふい黄	外面 S字状口縁。横ナデ・横毛目。口縁部 塚付着。内面 段ナデ。指痕痕。	58 27
9	土師器 台付費	口縁部～ 台付費	口(15.4) 高(5.6)	北西部 0.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②浅黄	外面 S字状口縁。段ナデ・横ナデ。口縁部 ～胴部塚付着。内面 段ナデ。指痕痕。	58 27

18号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 直口壺	2/3	口 11.0 高 12.6 底 2.3	北東部 8.5	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄褐	外面 段磨き・段削り。赤彩か。口縁部～体 部黒斑。 内面 段磨き・段ナデ。	59 27
2	土師器 壺	胴部～底 部破片	高(3.9) 底 4.3	北部 17.5	①砂粒、白色粒、針、角四石 ②灰黄褐	外面 段ナデ後、横毛目・段削り。胴部黒斑。 内面 段ナデ。底部黒斑。	59 27
3	土師器 費	口縁部 1/4	口(12.3) 高(3.6)	北部 3.0	①雲母、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②黒斑	外面 横ナデ・段ナデ。塚付着。 内面 段ナデ。黒斑。	59 27
4	土師器 台付費	口縁部～ 胴部1/5	口(14.9) 高(5.9)	北部 3.0	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、 角四石 ②褐灰	外面 横ナデ。横毛目・段ナデ。塚付着。 内面 段ナデ。	60 27
5	土師器 台付費	脚部1/4	高(6.3) 底(10.6)	北東部 26.0	①雲母、赤・白色粒、針、角 四石 ②灰黄	外面 段ナデ後、ナデ。 内面 段ナデ。	59 27
6	土師器 台付費	口縁部～ 胴部1/5	口(13.1) 高(4.6)	北東部 23.5	①石粒、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②灰黄	外面 S字状口縁。口縁部横ナデ、胴部段ナ デ・横毛目。内面 指痕痕・段ナデ。	60 27
7	土師器 台付費	2/3	口 15.0 高 31.6 底 8.3	北部 床面直上	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰オリーブ	外面 S字状口縁。横ナデ・横毛目、ナデ。 上半塚付着。胴部下位被熱で赤化。 内面 ナデ。煮流痕。	59 27
8	貝塚穴 灰泥岩	1.8×1.3 ×0.8	重 1.0g	覆土	②にふい赤褐	2孔まで確認できるのみであるが、窪み状の 凹所も有り。全体的に被熱で赤化。	60 27
9	貝塚穴 灰泥岩	2.5×1.5 ×0.9	重 1.6g	覆土	②赤褐	窪み状ではあるが、4孔まで確認できる。 全体的に被熱で赤化。	60 27
10	貝塚穴 灰泥岩	1.9×1.3 ×1.2	重 2.0g	覆土	②糖	2孔まで確認できるのみ。 全体的に被熱で赤化。	60 27
11	貝塚穴 灰泥岩	3.3×2.4 ×0.9	重 4.6g	北東部 8.5	②糖	9孔まで確認できる。 全体的に被熱で赤化。	60 27
12	貝塚穴 灰泥岩	2.7×2.4 ×1.3	重 6.3g	北東部 8.5	②にふい赤褐	12孔まで確認できる。 全体的に被熱で赤化。	60 27

19号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 浅鉢か	4/5	口 11.1 高 3.3 底 3.9	北東部 8.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい黄	外面 段磨き。剥落。体部～底部黒斑。 内面 段磨き。	63 28
2	土師器 壺	口縁部 1/5	口(17.2) 高(5.7)	南東部 28.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 折り返し口縁。ナデ・横毛目・横ナデ。 内面 段ナデ後、横毛目か。	63 28
3	土師器 壺	口縁部略 切	高(20.1) 高(9.2)	中央部 2.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②赤褐	外面 折り返し口縁。横毛目後、段磨き。赤 彩。3本1組の突帯文。内面 段ナデ。赤彩。	63 28
4	土師器 壺	胴部～底 部破片	高(4.5) 底(7.7)	中央部 2.0	①赤・白・黒色粒、針、角四 石 ②灰	外面 段ナデ・ナデ。 内面 段ナデ。一部段磨き・横毛目。	63 28
5	土師器 費	口縁部 1/5	口(21.6) 高(3.4)	南西部 5.0	①砂粒、赤・白色粒、石英、 針、角四石 ②黒	外面 横毛目後、ナデか。黒斑。塚付着。 内面 横毛目。黒斑。	63 28
6	土師器 小型 台付費	略定	口 7.0 高 11.6 底 5.5	南東部 3.5	①砂粒、赤色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 口縁部段ナデ後、横ナデ。胴部段ナ デ後、粗い段磨き。台部段ナデ・ナデ。台部5 孔穿孔。口縁～胴部黒斑。内面 口縁部段ナ デ後、横ナデ。胴部～台部段ナデ。	64 28

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
7	土師器 甕	略完	口 13.4 高 14.0 底 4.0	南東部 床面直上	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 口縁部段削り・段ナテ。胴部上半縦毛目後、段ナテ。下半段削り・段ナテ。胴部黒珉。塚付着。内面 口縁部縦毛目後、段削り・段ナテ。胴部段ナテ。黒珉。	64 28
8	土師器 台付甕	略完	口 23.8 高 31.6 底 10.9	北東部 2.5	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②黄灰	外面 縦毛目後、粗い段削り・縦毛目。黒珉。内面 段ナテ後、粗い段削り。黒珉。	63 28
9	土師器 甕	口縁部～ 胴部2/3	口 12.4 高(12.2)	中央部 3.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②黒	外面 横ナテ。縦毛目。粗い段削り。黒色。内面 横ナテ・縦毛目後、段削り・段ナテ。黒色。	64 28
10	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/3	口(15.9) 高(16.8)	中央部 3.0	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②黒	外面 横ナテ・縦毛目。黒珉。塚付着。被熱で一部赤化。内面 横ナテ。段削り・段ナテ。	64 28
11	石器 磨石	完形	長 17.4 幅 11.0 厚 6.2	覆土 デイスイト		柵形。断面形は丸みのある四角形に近い。表裏と右側面に長軸方向の磨痕。左側面に直交する条痕あり。重1612.9g	64 28

20号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 台付甕	胴部1/3	高(3.6) 底(10.6)	南東隅後 乱-3.0	①赤・白色粒、針、角四石 ②にぶい黄	外面 段ナテ・ナテ。被熱で赤化。黒珉。内面 段ナテ。被熱で赤化。黒珉。	65 28

22号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 高坏	胴部破片	高(5.3)	南東 13.0	①雲母、石粒、赤・白色粒、角四石 ②灰黄	外面 縦毛目後、段削り。内面 上半段削り、下半指頭痕。	68 28

23号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 高坏	胴部1/4 高坏	高(9.6) 底(12.4)	北西隅 12.5	①赤・白色粒、針、角四石 ②黒	外面 縦毛目後、粗い段削り。内面 段ナテか。	69 28
2	土師器 高坏	胴部略完 高坏	高(6.9) 底(13.3)	北西隅 17.0	①砂粒、赤・白色粒、針 ②灰黄	内外面 段ナテ。黒珉。	69 28

21・42・60号土坑

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
21坑 1	土師器 甕	口縁部～ 胴部2/5	口(22.1) 高(17.8)	覆土	①雲母、砂粒、白・赤色粒、針、角四石 ②褐灰	外面 横ナテ・縦毛目。粗い縦毛目。黒珉。塚付着。内面 縦毛目・段ナテ。	70 29
21坑 2	土師器 壺	口縁部破片	口(14.0) 高(2.3)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にぶい黄	外面 粗い段削り。黒珉。内面 粗い段削り。	29
21坑 3	土師器 壺	底部1/3	高(3.0) 底(6.2)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にぶい黄褐	外面 粗い縦毛目・段ナテ。段削り。内面 段ナテ。炭化物付着。	29
21坑 4	土師器 壺	底部1/4	高(3.0) 底(6.1)	覆土	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にぶい粗	外面 段ナテ・段削り。内面 段削り。	29
21坑 5	土師器 甕	底部1/5	高(3.0) 底(8.0)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にぶい黄褐	外面 段削り。内面 段ナテ。炭化物付着。	29
21坑 6	土師器 甕	胴部～底 部1/3	高(6.6) 底(12.5)	覆土	①石英、砂粒、赤色粒 ②にぶい粗	外面 段ナテ。塚付着。内面 段ナテ。	29
42坑 1	土師器 台付甕	口縁部破片	口(17.7) 高(3.1)	覆土	①雲母、赤・黒色粒、針、角四石 ②にぶい黄褐	外面 S字状口縁。横ナテ・ナテ・縦毛目。内面 段ナテ・指頭痕。	29
60坑 1	土師器 高坏	胴部4/5	高(7.4) 底(10.7)	覆土	①雲母、石、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段削り・横ナテ。3孔の穿孔。黒珉。内面 段ナテ・横ナテ。	29
60坑 2	土師器 甕	胴部4/5	高(7.9) 底(9.7)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にぶい黄褐	外面 縦毛目後、ナテ。内面 縦毛目後、段ナテ。	29
60坑 3	土師器 台付甕	胴部完形	高(6.7) 底(8.5)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段ナテか。段削り後、縦毛目。黒珉。内面 ナテ。	29

A区遺構外

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 壺	底部破片	高(1.7) 底(3.0)	75-P-1 C線	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段削り。黒珉。内面 段ナテ。	72 29
2	土師器 甕	胴部～底 部	高(2.2) 底(4.3)	C線	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 赤・白色粒。粗い段削り。内面 段ナテ。黒珉。	72 29
3	土師器 鉢	口縁部～ 体部1/4	口(19.2) 高(7.5)	66-A-16	①砂粒、赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にぶい粗	外面 段削り・横ナテ。風化。赤彩か。底部 黒珉。内面 段削り・ナテ。黒珉。	72 29
4	土師器 壺	口縁部～ 胴部1/3	口(27.7)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針 ②灰黄	外面 口縁部～上胴部縦毛目。内面 段ナテ・ナテ。	72 29

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
5	鉄製品 板状品	長(4.0) 幅(2.7)	厚(0.2)	表採		板状を呈する。3面が欠けている。用途不明。	72 29
6	鉄製品 板状品	長(4.0) 幅(3.3)	厚(0.2)	表採		板状を呈する。周面全て欠けており、生きても面無し。用途不明。	72 29
7	鉄製品 板状品	長(6.0) 幅(2.5)	厚(0.1)	表採		延べ板状鉄製品。用途不明。6と同一個体か。	72 29
8	鉄製品 板状品	長(12.3) 幅(4.4)	厚(0.2)	表採		延べ板状鉄製品。用途不明。6と同一個体か。	72 29

D区2号井戸

遺物番号	器種	石	材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺	存	図版 番号	写真 番号
1	石鏝	黒曜石		2.25	1.25	0.40	0.8	完形		79	30
2	石鏝	チャート		2.60	1.70	0.35	1.2	完形		79	30
3	石鏝	チャート		2.55	2.05	0.30	1.4	完形		79	30
4	石鏝	黒色頁岩		2.50	1.30	0.35	1.1	完形		79	30
5	三角錐形石器	黒色頁岩		14.30	3.80	4.20	214.7	完形		79	30
6	打製石斧	黒色頁岩		15.00	11.60	2.60	345.1	完形		79	30
7	打製石斧	黒色頁岩		6.30	4.60	1.30	45.9	刃部欠損		79	30
8	Rフレイク	黒色頁岩		8.20	13.15	1.70	147.6	完形		79	30
9	Rフレイク	黒色安山岩		3.70	4.00	1.10	15.5	完形		79	30
10	Rフレイク	黒色安山岩		3.20	5.00	0.90	19.6	完形		79	30
11	Uフレイク	黒色安山岩		7.50	2.90	1.90	34.3	完形		79	30
12	石核	黒色安山岩		7.00	6.50	1.80	96.1	完形		79	30
13	石核	黒色安山岩		4.55	7.40	2.10	54.5	完形		79	30
14	石核	黒色安山岩		3.90	7.90	3.40	150.8	完形		80	30
15	石核	黒色安山岩		4.10	12.00	7.80	390.3	完形		80	30
16	スクレイパー	黒色安山岩		8.80	13.00	4.10	481.9	完形		80	30
17	Rフレイク	黒色安山岩		8.90	14.40	4.90	635.9	完形		80	30
18	石核	黒色安山岩		13.60	18.20	7.30	1882.0	完形		80	30
19	接合資料	黒色安山岩		12.10	17.10	7.40	1771.8	19-1+1'+2+3+4		81	31
19-1	剥片	黒色安山岩		5.60	6.90	1.90	100.4	完形		81	31
19-1'	剥片	黒色安山岩		3.20	6.80	1.00	26.9	完形		81	31
19-2	石核	黒色安山岩		12.10	14.10	7.40	1550.4	完形		81	31
19-3	剥片	黒色安山岩		2.70	4.70	0.70	5.9	完形		81	31
19-4	剥片	黒色安山岩		6.80	7.40	2.50	88.2	完形		81	31
20	接合資料	黒色安山岩		6.45	7.60	1.80	64.1	20-1+2		82	31
20-1	Rフレイク	黒色安山岩		6.45	4.85	1.30	32.1	完形		82	31
20-2	剥片	黒色安山岩		5.50	5.70	1.30	32.0	完形		82	31
21	接合資料	黒色安山岩		8.00	8.00	1.50	60.0	21-1+2		82	31
21-1	剥片	黒色安山岩		3.40	6.25	0.50	9.0	完形		82	31
21-2	Rフレイク	黒色安山岩		5.20	7.80	1.50	51.0	完形		82	31
22	凹石	粗粒輝石安山岩		11.10	9.10	3.40	388.3	完形		82	32
23	凹石	粗粒輝石安山岩		10.80	8.10	4.60	468.1	完形		82	32
24	凹石	粗粒輝石安山岩		11.40	7.50	3.90	419.1	完形		82	32
25	石鏝	粗粒輝石安山岩		12.90	10.60	5.20	614.6	完形		82	32
26	磨石	黒色頁岩		9.50	8.30	7.90	777.1	完形		83	32

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
27	弁先 鏝	口縁部破 片	高(2.8)		①向四石 ②灰黄	外面 折り返し口縁。3本1組の波状文。煤付着。内面 ナテ。	83 32
28	土師器 鉢	3/5	口 15.2 高 10.4 底 3.9	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、向四石 ②灰黄	外面 口縁部・体部脱脂き、底部脱脂り。内面 脱脂き。	83 32
29	土師器 埴	口縁部 1/3	口(15.9) 高(5.7)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、向四石 ②灰黄	外面 甕ナ字後、脱脂き。内面 甕ナ字後、脱脂き。黒皮。	83 32
30	土師器 壺	口縁部 1/5	口(16.1) 高(2.5)	覆土	①赤・白色粒、針、向四石 ②灰黄	外面 脱脂き・刷毛目。内面 脱脂き。黒皮。	83 32
31	土師器 台付甕	脚部1/3	高(6.1)	覆土	①赤・白色粒、針、向四石 ②黄褐	外面 刷毛目。脚部煤付着。内面 甕ナ字、炭化物付着。	83 32
32	土師器 甕	口縁部 1/5	口(18.7) 高(4.9)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、向四石 ②浅黄	外面 横ナ字・甕ナ字。内面 横ナ字・甕ナ字。	83 32

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
33	土師器 壺	底部破片	高(1.5) 底(5.8)	覆土	①砂粒、角四石 ②にふい檜	外面 瓮ナテ。 内面 ナテ。	83 32
34	土師器 杯	1/2	口13.7 高(3.6)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 横ナテ・瓮閉り。 内面 横ナテ、瓮ナテ・ナテか。	83 32
35	土師器 杯	口縁部～ 体部破片	口(12.5) 高(3.6)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 横ナテ・瓮閉り。 内面 横ナテ・瓮ナテ。	83 32
36	土師器 杯	口縁部～ 体部破片	口(14.0) 高(3.6)	覆土	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 横ナテ・瓮閉り。 内面 横ナテ・ナテ。	83 32
37	石製品 碧玉	完形	径 0.7 長 2.7 孔 0.3	覆土	滑石	両面穿孔。 重2.6g	83 32

D区竪坑遺構

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	土師器 壺	2/3	口(12.7) 高 6.6	覆土	①石、砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 瓮ナテ後、粗い段増き・瓮閉り。黒斑。 内面 瓮ナテ後、放射状暗文。黒斑。	86 33
2	土師器 杯	4/5	口13.6 高(5.2)	覆土	①雲母、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ・瓮閉り、体部黒斑。赤彩。口縁部保付着。内面 横ナテ後、段増き。剥落。赤彩。口縁部保付着。	86 33
3	土師器 杯	略完	口12.3 高 5.5	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ・瓮閉り後、段増き。赤彩か。 内面 横ナテ。体部瓮ナテ後、段増き。赤彩か。	86 33
4	土師器 杯	口縁部～ 体部3/4	口(14.6) 高(4.8)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ・ナテ。瓮閉り。 内面 横ナテ・ナテ。	86 33
5	土師器 鉢	4/5	口14.7 高11.4	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 横ナテ・ナテ。瓮閉り。口縁部～体部 黒斑。内面 横ナテ・瓮ナテ。	86 33
6	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/3	口(17.3) 高(10.3)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 横ナテ後、刷毛目。胴部黒斑。 内面 横ナテ後、刷毛目。	86 33

D区水田

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	口縁部 1/3	口(13.0) 高(9.1)	覆土	①赤・白色粒、角四石 ②にふい褐	外面 折り返し口縁。4本1組の波状文。7本1組の縹文。4本1組の波状文。瓮ナテ。保付着。内面 ナテ。	87 32
2	弥生 甕	口縁部～ 胴部破片	高(9.8)	覆土	①砂粒、角四石 ②にふい檜	外面 折り返し口縁。4本1組・7本1組の波状文。瓮ナテ。内面 ナテ・瓮ナテ。	87 32
3	弥生 甕	胴部～肩 部破片	高(5.3)	覆土	①白色粒、角四石 ②にふい檜	外面 7本1組の縹文。5本1組の波状文。内面 ナテ。	87 32
4	土師器 壺	胴部～底 部破片	高(7.2) 底 8.4	覆土	①雲母、砂粒、赤・白色粒、針 ②灰黄	外面 風化顕著。胴部網代痕か。 内面 瓮ナテか。黒斑。	87 32
5	土師器 鉢	口縁部～ 底部1/3	口(16.1) 高(6.8)	覆土	①石、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	内外面 刷毛目。瓮ナテ後、段増き。	87 32
6	土師器 鉢	略完	口 9.9 高 6.4 底 1.6	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②暗灰黄	内外面 刷毛目。瓮ナテ後、段増き。	87 32
7	土師器 甕	胴部～底 部1/4	高(4.9) 底(4.6)	覆土	①赤・白・黒色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 刷毛目・瓮ナテか。黒斑。被熱で赤化。 内面 瓮ナテ。	87 32
8	土師器 高杯か 岩台	胴部2/5	高(7.1) 底(11.1)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 段増き。黒斑。 内面 瓮ナテ。	87 32
9	土師器 台付甕	胴部破片	高(4.4) 底(9.6)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 刷毛目後。瓮ナテ・ナテ。 内面 上半瓮ナテ。下半刷毛目。	87 32
10	土師器 壺	胴部～底 部3/5	高(8.9) 底 4.2	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 段増き・瓮ナテか。黒斑。 内面 段増きに近い瓮ナテ。黒斑。	87 32
11	土師器 罎	口縁部～ 胴部1/3	口(9.6) 高(8.4)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 段増き。胴部黒斑。 内面 瓮ナテ・ナテ。口縁部段増き。	87 32
12	土師器 壺	口縁部破 片	口(20.2) 高(4.5)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②灰褐	内外面 刷毛目後、段増き。	87 32
13	土師器 壺か甕	胴部～底 部破片	高(2.5) 底 4.4	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角四石 ②にふい褐	外面 刷毛目・瓮ナテ。瓮閉り。黒斑。 内面 瓮ナテ。	87 32
14	土師器 杯	口縁部～ 体部1/4	口(15.0) 高(5.0)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい檜	外面 口縁部横ナテ。体部瓮閉り。 内面 口縁部横ナテ。体部瓮ナテ・ナテか。	87 32

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
15	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.9) 高(5.8)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ、篋削り。赤彩か。 内面 横ナテ、篋ナテ、ナテか。赤彩か。	87 32
16	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(13.1) 高(3.2)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②灰黄褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、ナテ。	87 32
17	土師器 坏	3/4	口(12.6) 高 4.1	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、粗いナテ、篋削り。 内面 横ナテ、ナテか。	87 32
18	土師器 坏	口縁部～ 体部1/4	口(14.5) 高(3.3)	覆土	①石英、赤・白色粒。針、角 四石 ②灰黄	外面 横ナテ、篋削り。口縁部黒斑。 内面 横ナテ、ナテ。	87 32
19	土師器 坏	1/2	口(13.4) 高 3.7	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ。	87 32
20	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(15.1) 高(3.2)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 篋ナテ、横ナテ、篋削り。 内面 篋ナテ、横ナテ、篋ナテ、ナテ。	87 32
21	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(16.2) 高(4.0)	覆土	①砂粒、白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、ナテ。	87 33
22	土師器 坏	3/5	口(15.3) 高 4.9	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、ナテか。篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ後、ナテか。	87 33
23	土師器 坏	4/5	口 12.6 高 3.4	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②灰黄	外面 横ナテ、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ。	87 33
24	土師器 坏	口縁部～ 底部破片	口(12.4) 高(3.1)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい黄褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 ナテか。	87 33
25	土師器 坏	3/5	口 14.9 高(2.9)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ。	87 33
26	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(14.0) 高(3.4)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ。	88 33
27	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(14.1) 高(2.4)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ。	88 33
28	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(13.9) 高(2.9)	覆土	①砂粒、白・黒色粒。針 ②にふい黄褐	外面 横ナテ、ナテ、篋削り。 内面 ナテか。	88 33
29	土師器 坏	4/5	口 14.7 高 4.1	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、ナテ、篋削り。黒斑。黒斑。 内面 ナテか。黒斑。	88 33
30	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(15.9) 高(2.9)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
31	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(10.2) 高(2.5)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②明黄褐	外面 横ナテ、篋削りか。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
32	土師器 坏	1/2	口 13.4 高 3.1	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい黄褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ後、ナテ。	88 33
33	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.5) 高(3.3)	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい褐	外面 横ナテ、篋削りか。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
34	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(13.7) 高(2.4)	覆土	①砂粒、赤・白・黒色粒。針、 角四石 ②灰黄褐	外面 横ナテ、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
35	土師器 坏	1/3	口(13.6) 高 3.3	覆土	①赤・白色粒。針、角四石 ②にふい黄褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
36	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.9) 高(2.4)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい黄褐	外面 横ナテ、篋削りか。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
37	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.6) 高(3.2)	覆土	①雲母、白色粒。針、角四石 ②橙	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、ナテ。	88 33
38	土師器 高坏	1/3	口 11.5 高 9.7 底 10.1	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②にふい赤褐	外面 横ナテ、篋削り。 内面 横ナテ、篋ナテ後、放射状暗文。篋ナ テ。	88 33
39	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/5	口(14.4) 高(9.3)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②灰黄	外面 指頭肌、篋削り。黒斑。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
40	土師器 甕	口縁部 1/5	口(18.1) 高(4.7)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②灰黄褐	外面 横ナテ、篋ナテか。 内面 横ナテ、ナテ。	88 33
41	土師器 甕	口縁部 1/4	口(15.5) 高(5.8)	覆土	①砂粒、赤・白色粒。針、角 四石 ②褐灰	外面 刷毛目。煤付着。 内面 横ナテ、篋ナテ。	88 33
42	土師器 甕	口縁部破 片	口(19.2) 高(7.4)	覆土	①砂粒、赤・白・黒色粒。針、 角四石 ②浅黄	外面 横ナテ、篋ナテ後、粗い篋削り。 内面 横ナテ。篋ナテは丁型で篋削り状。	88 33
43	土師器 壺	底部破片 底	高(1.9) 底(9.2)	覆土	①雲母、砂粒、赤・白・黒色 粒。針、角四石 ②浅黄	外面 篋ナテ、指頭肌。篋削り。黒斑。 内面 刷毛目。黒斑著で調整不明。	88 33
44	土師器 壺か甕	底部破片 底	高(1.7) 底 6.0	覆土	①石、赤・白色粒。針、角四 石 ②灰黄褐	外面 粗い篋ナテ後、篋削り。篋ナテ。黒斑。 赤彩か。内面 篋ナテ。	88 33

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調		成・整形・文様の特徴	回数 写真	
					①	②			
45	土師器 壺か甕	底部4/5	高(1.2) 底 7.1	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角 閃石 ②にふい煙	外面 底磨り。 内面 塗ナデ。	88 33		
46	須恵器 蓋	肩部破片	口(15.6) 高(1.7)	覆土	①砂粒、白色粒、針 ②灰白	外面 磨きナデ。	88 33		
47	土製品 土罐	1/3 径(3.5)	高(3.1) 孔(0.4)	覆土	①石英、砂粒、赤・白・黒色 粒、針 ②灰黄	本来は球形を呈する。 重12.6g	88 33		
48	青磁 碗	口縁部 1/5	口(12.7) 高(4.0)	覆土	②オリブ灰	口縁内湾気味に開く。	88 33		
遺物 番号	器種	石 材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重 量 g	遺 存	回数 番号	写真 番号
49	門石	粗粒輝石安山岩	11.80	6.10	5.30	461.6	完形	88	33

D区1号・2号溝

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調		成・整形・文様の特徴	回数 写真
					①	②		
1溝 1	土師器 高坏	坏部一部 1/2	高(12.3) 底(12.2)	覆土	①赤・白色粒、針、角閃石 ②にふい黄	外面 粗い磨き・ナデ。 内面 粗い磨き・ナデ。肩部粗肌。	92 28	
2溝 1	鉄製品 板状品	長(4.8) 幅(0.6)	厚(0.1)	覆土		棒状、断面形はU字状。鉄板を折り曲げた端部が。用途不明。	92 28	

A区・B区3号・4号・5号・7号・8号・11号溝

遺物番号	器種	残存	法量 cm	出土位置 cm	①胎土 ②色調		成・整形・文様の特徴	回数 写真
					①	②		
3溝 1	陶器 揉鉢	口縁部破 片	高(4.4)	覆土	②褐	口縁は口唇部手前で屈曲する。	95 34	
4溝 1	磁器 碗か	口縁部 1/4	口(5.4) 高(4.4)	覆土	②灰白	口縁はほぼ直立する。(染)青灰。	95 34	
4溝 2	磁器 中碗か	口縁部 1/5	口(10.2) 高(3.8)	覆土	②灰白	体部は内湾気味に立ち上がる。(染)青灰。	95 34	
4溝 3	陶器 灯明皿か	口縁部 1/5	口(12.2) 高(1.8)	覆土	②にふい褐	外面 磨きナデ。光沢有り。鉄軸。 内面 光沢有り。	95 34	
4溝 4	石製品 砥石	略完 長(8.4) 厚 1.2	幅 2.3 厚 1.2	覆土	凝灰岩	細長い板状を呈する。 重 38.9g	95 34	
4溝 5	鉄製品 火打金	長(3.5) 幅(6.3)	厚(0.3)	覆土		板状を呈する。	95 34	
4溝 6	鉄製品 短刀?	長(8.6) 幅(2.5)	厚(0.4)	覆土		刃物か。断面はやや湾曲している。	95 34	
4溝 7	鉄製品 釘	長(4.0) 幅(1.7)	厚(0.4)	覆土		下端部欠損。	95 34	
5溝 1	磁器 中碗	口縁部 1/5	口(10.8) 高(4.1)	覆土	②明オリブ灰	体部は内湾気味に立ち上がる。(染)緑灰。	95 34	
5溝 2	磁器 中碗	体部～底 部破片	高(3.8) 底(4.1)	覆土	②明オリブ灰	体部は内湾気味に立ち上がる。(染)緑灰。	95 34	
5溝 3	磁器 碗	1/3	口(9.9) 高(5.4) 底(5.8)	覆土	②灰白	体部は内湾気味に立ち上がる。胎土灰色。染 付。高台砂目。見込みコンニャク印判。磨前 系。(染)緑灰。	95 34	
5溝 4	磁器 中碗	体部～底 部破片	高(3.2) 底(2.0)	覆土	②灰	体部は内湾気味に立ち上がる。(染)コバルト ブルー。	95 34	
5溝 5	磁器 中碗か	口縁部 1/5	口(10.9) 高(4.3)	覆土	②灰白	体部は内湾気味に立ち上がる。 内面 灰粒。鉄軸。(鉄軸)暗赤褐。	95 34	
7溝 1	カワラケ 小皿	口縁部 1/5	口(8.7) 高(1.7)	覆土	①砂粒、赤・白色粒、針、角 閃石 ②にふい黄煙	体部は内湾気味に立ち上がる。 外面 磨きナデ。	95 34	
7溝 2	カワラケ 小皿	口縁部～ 底部1/5	口(9.4) 高 2.3 底(7.7)	覆土	①砂粒、石粒、白・黒色粒、 針、角閃石 ②にふい黄煙	体部は内湾気味に立ち上がる。 外面 磨きナデ。回転糸切り。粗肌。	95 34	
7溝 3	鉄製品 鎌	長(3.8) 幅(1.8)	厚(0.3)	覆土		板状に近い。刃物と思われる。両端部とも欠 損。	95 34	
8溝 1	陶器 碗	口縁部 1/5	口(11.0) 高(5.7)	覆土	①黒色粒 ②黒褐	外面 鉄軸。磨きナデ。胎がない2～4mmの くぼみ。内面 鉄軸。磨きナデ。	95 34	
11溝 1	陶器 甕か	底部1/3	高(3.6) 底(10.1)	覆土	②灰黄	高台をもつ。(胎)褐色。	95 34	
11溝 2	磁器 碗	体部～底 部破片	高(2.4) 底 3.5	覆土	①黒色粒 ②灰白 灰	体部は内湾気味に立ち上がる。磨軸。胎のない 部分有り。	95 34	

第3章 検出された遺構と遺物

遺構外

遺物番号	器種	残存	法量 Ⅲ	出土位置 Ⅳ	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版 写真
1	弥生 甕	口縁部～ 肩部1/4	口(12.2) 高(6.7)	75-K-5	①砂粒、白色粒、角四石 ②にふい黄橙	外面 折り返し口縁、ナデ・刷毛目様、日本 1組の波状文・縷状文、煤付着。内面 ナデ。	98 34
2	弥生 甕	肩部破片	高(2.4)	表採	①角四石 ②にふい橙	外面 8本1組の波状文。 内面 ナデ。	98 34
3	土師器 高坏	坏部3/5	口(18.5) 高(6.1)	75-M-5	①雲母、砂粒、赤・白色粒、 針、角四石 ②にふい赤褐	外面 瓦ナデ後、粗い段磨き。赤彩。 内面 瓦ナデ後、粗い段磨き。赤彩。黒斑。	98 34
4	土師器 器台か 高杯	胴部1/5	高(2.5) 底(10.0)	75-P-20	①赤・白色粒、針、角四石 ②灰黄	外面 瓦ナデ・ナデ。黒斑。 内面 瓦ナデ・ナデ。	98 34
5	土師器 甕	胴部～底 部破片	高(4.9) 底(3.9)	75-O-15	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい黄橙	外面 瓦ナデ・ナデ。瓦割り様、粗い段磨き。 内面 刷毛目・瓦ナデ。	98 34
6	土師器 甕	底部破片	高(1.8) 底(5.0)	85-Q-2	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい赤褐	外面 瓦ナデ・段磨き。赤彩。 内面 段磨き。	98 34
7	土師器 甕	底部破片	高(1.9) 底(8.0)		①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②明赤褐	外面 瓦ナデ・段磨き。赤彩。黒斑。 内面 瓦ナデ。黒落で調整不明。	98 34
8	土師器 甕	胴部～底 部破片	高(3.5) 底(5.8)	86-A-4	①赤・白・黒色粒、針、角四 石 ②にふい黄	外面 刷毛目様、粗い段磨り。黒斑。 内面 瓦ナデ。	98 34
9	土師器 甕	胴部～底 部破片	高(2.9) 底(4.9)	86-G-12	①雲母、石英、砂粒、赤・白 色粒、針、角四石 ②にふい 赤褐	外面 瓦ナデ・段磨き。赤彩。黒斑。 内面 瓦ナデ。	98 34
10	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	口(16.8) 高(8.5)	覆土	①赤・白色粒、針、角四石 ②黒褐	外面 刷毛目・段磨り。全面煤付着。 内面 刷毛目・瓦ナデ。	98 34
11	土師器 ニチュア	胴部～底 部1/2	高(2.5) 底(3.4)	75-O-19	①赤・白色粒、針、角四石 ②にふい黄	外面 瓦ナデ・ナデ。下位指頭痕。黒斑。 内面 瓦ナデ・ナデ。段磨き。	98 34
12	土師器 坏	口縁部 1/4	口(12.0) 高(3.1)	覆土	①雲母、赤・白色粒、針、角 四石 ②にふい橙	外面 横ナデ・瓦割り。赤彩。 内面 横ナデ。赤彩。	98 34
13	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	口(20.9) 高(6.7)	75-I-5	①砂粒、赤・白色粒、針、角 四石 ②灰黄褐	外面 瓦ナデ後、横ナデ。瓦ナデ・段磨きか。 内面 瓦ナデ後、横ナデ・瓦ナデ。	98 34
14	青磁 甕	底部破片	高(1.4) 底(6.8)	86-G-12	②灰オリーブ	外面 瓦割り。 内面 輪有り。	98 34
15	土師器 高台付 坏	底部1/3	高(2.5) 底(7.5)	覆土	①白色粒、針、角四石 ②灰白	外面 縦縷成形。 内面 底部黒斑。	98 34
16	陶器 指鉢	口縁部破 片	高(4.4)	86-B-11	②にふい赤褐	内外面 指輪を施す。	98 34
17	緑釉 甕か	高台部 略完	高(1.8) 底(6.3)	85-M-13	②灰黄	外面 施釉みられず。 内面 施釉。花柄の文様。(染)灰オリーブ。	98 34
18	磁器 中碗	体部～高 台部破片	高(2.7) 底(4.7)	覆土	②灰白	体部は内湾気味に開く。(染)オリーブ灰。	98 34
19	石製品 砥石	略完	幅(2.8) 厚(2.6)	85-R-1	凝灰岩	断面四角形の棒状。4面を使用。砥ぎ目は太 く深いものが多い。重147.5g	98 34
20	石製品 砥石	1/2	幅(3.1) 長(6.6)	覆土	凝灰岩	断面四角形。両端欠損。砥ぎ目は深く深い。 全体的に砥ぎ目は少ない。重78.3g	98 34
21	石製品 砥石	破片	幅(2.8) 厚(1.5)	75-M-3	凝灰岩	全体的に砥ぎ目が見えづらい。欠け口面以外 は砥面として使用。重15.1g	98 34
22	石製品 砥石	完形	幅(6.5) 厚(4.7)	75-M-7	粗粒輝石安山岩	平面形・断面形とも長楕円形。表面長軸方向の 標痕。両面両側数の太い糸痕。重415.5g	98 34
23	鉄製品 鏝	長(6.9) 幅(2.5)	厚(0.3)	表採		一方を欠いているためJ字状を呈する。	98 34
24	鉄製品 板状品	長(3.5) 幅(2.0)	厚(0.2)	表採		板状を呈する。用途不明。	98 34
25	骨 器	長(7.6) 幅(2.5)	厚(1.1) 重18.1g	覆土	②灰白	人骨か。断ち割った面と下端面は面取りされ ていると思われる。9孔あり。2孔1単位(?) ×4+1(貫通した孔なし)。孔径0.2cm。上端 は欠け口。下端は切断面と思われる。	98 34

第4章 自然科学分析

1 分析の種類とその目的

住居跡から出土した炭化材の樹種同定とプラントオパール分析を実施した。

炭化材は、7軒の住居跡から出土している。19号住居跡は、床一面に炭化材が出土して焼失住居とみてまちがいない。4号住居跡も焼失住居かと思われる。しかし、点数こそ多いが19号住居跡のような大きなものはない。残る5軒については、出土した炭化材の量が数点と少なく可能性に留めておきたい。

樹種同定の目的は、どんな材が利用されているか、選材の傾向を知ることにある。次いで、多出した住居跡では、複数の種類が認められるのか。さらに、結果をみて周辺遺跡との比較を意図した。

分析したのは、7軒から出土した合計126点である。内訳は、以下のとおりである。

4号住居跡（5世紀） 68点 5号住居跡（5世紀） 1点 7号住居跡（弥生時代） 5点
12号住居跡（4世紀） 1点 16号住居跡（4世紀） 3点 19号住居跡（4世紀） 47点
21号住居跡（4世紀） 1点

結果は、以下のとおりである。

クスギ節 108点 コナラ節 9点 カヤ 1点 ススキ類似 1点 不可 7点

県内では、これまでの分析で古墳時代を通じてクスギ、コナラが広く利用されたことが知られている。この傾向は、本遺跡でも同様であることが明らかとなった。

プラントオパール分析は、水田の存否、さらには水田があったとすれば複数の時代にわたっていたのかを判断しようとしたものである。成果は、事業団第418集「上武道路・旧石器時代編（1）」に掲載した。

水田は、As-B下のものがB区とD区の谷地で検出されている。集落の目の前で、水田土壌らしい黒色土があって、跡跡とした凹みも一面にある。しかし、どちらにも畦で区画をした様子はなく、B区では水路に相当するものもない。これを水田としてよいものか、さらには確認状況が異なるB区とD区を同一視してよいものか、その状況には課題が残されている。

分析は、その解決策というわけでもある。下層には、弘仁九年の地震によるのではないかとみられる褐灰色土、そしてAs-Cもあり、台地上にある集落の展開からすれば、複数の水田面があると推測することは容易である。As-C下では、開田の時期が明らかになるのではないかと期待もした。

結果は、まずB区では、イネが検出されたのは現在の表土とAs-B混土だけであった。栽培の可能性は高いという指摘ではあるが、立地、周辺遺跡の様子からすれば、むしろ当然の結果である。下層ではAs-C下でヒエ属型が検出されたほかは、期待した内容とはならなかった。稲作も考慮されなかったわけではないが、根菜類は分析の対象外である。

D区では、調査期間の制約から分析は実施していない。そこで参考としたいのが、D区の北300mにある富田漆田遺跡である。A区では分析が実施されていて、As-B直下層でイネの密度が5,300個/g、As-Bの下層でも3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Hr-FA直下層では、密度が1,500個/gと比較的低い値ながら可能性が指摘されている（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第372集「富田漆田遺跡・富田下大日遺跡」2006）。

2 富田西原遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

上記分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。分析結果は下記の通りである。

1. はじめに

前橋市富田町に所在する当遺跡住居跡から出土した、炭化材の樹種同定結果を報告する。当遺跡は、赤城南麓の標高104m前後に立地している。検討した住居は、4～5世紀の古墳時代の前期・中期に相当する住居跡であり、4号・5号・7号・12号・16号・19号住居と21号住居である。焼失家屋である4号住と19号住からは、一面に散在した状態で炭化材が検出され、多くの試料を検討することができた。

2. 炭化材樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面（木口）を手で割って実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クスギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクスギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

同定結果の一覧を、表1に示し、表2に各住居跡から検出された分類群と試料数をまとめた。

当遺跡の住居跡からは、針葉樹のカヤ、落葉広葉樹のコナラ節とクスギ節、そしてススキ属類似の草本性イネ科の秆が検出された。そしてクスギ節が、多くの住居から検出され、検出数も圧倒的に多かった。このような結果から、4～5世紀（古墳時代前期）の当遺跡ではクスギ節の材が住居建築材に多用されていたことが明らかになった。

コナラ節は、7号住と19号住そして21号住から検出された。19号住居から検出されたコナラ節は、南側半分の広い範囲から散在して出土しており、クスギ節と共にコナラ節の大きな材も使用されていたようである。カヤは、4号住の北東隅付近から出土している。

以下に同定された樹種の材組織観察結果を分類順に記載する。

(1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1 1a-1c (4号住-45)

仮道管・放射線細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。2本が対になるらせん肥厚が、仮道管に見られる。仮道管と放射組織が交差する分野の壁孔は、小さなヒノキ型で主に2個ある。

カヤは本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、材は水湿に強く加工しやすい。

(2) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a-2b (21号住)

年輪の始めに大型の管孔が配列して孔圏を形成し、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のもので広放射組織・複合状のものがあり、道管との壁孔は櫛状である。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工がややしく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度は高い。

(3)コナラ属コナラ亜属クスギ節 *Q. subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 図版1 3a-3c (4号住-47)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部では小型・厚壁で孔口が円形の管孔が単独で放射方向や散在状に配列する環孔材。そのほかの形質は、上記のコナラ節と同様である。

クスギ節は暖帯の山林や二次林に普通の落葉高木で、クスギとアヘマキが属する。材は重厚で割裂性が良く、関東地方では遺跡から特に農具や住居材の利用がよく使用されている。

(4)ススキ属 (*Miscanthus*) 類似 イネ科 図版1 4a (16号住 K-43)

非常の脆い稈の破片である。横断面の外周部の一部を観察でき、維管束が散在していることからイネ科の稈であることが判る。稈の外周付近の維管束は厚壁細胞の厚い層にかこまれて密接に配置している。外周付近の維管束配置の様子や、家屋によく利用される分類群から予想して、ススキ属の可能性が考えられた。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ、刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。

4. まとめ

当遺跡の4～5世紀の複数の住居跡から出土した炭化材は、クスギ節が圧倒的に多く、ほかにコナラ節や針葉樹のカヤそしてイネ科のススキ属類似が検出された。前橋市の元総社寺田遺跡の古墳時代前期に相当する5面から出土した杭・板材・角材・柄などの樹種同定結果もクスギ節が優占しコナラ節も出土しており、花粉分析結果もクスギ節とコナラ節を含むコナラ亜属の出現率が最も多いことが報告されている(藤根・鈴木, 1994)。このような符号からも古墳時代前期の当地域一帯には、クスギ節の樹種が豊富に生育しており、建築材としても有用であったことから住居材にも多く利用されたのであろう。群馬県下では、古墳時代にクスギ節材が建築材として多用されていた事例(邑楽郡大泉町の御正作遺跡や専光寺付近遺跡)と、コナラ節が優占する事例(渋川市の中筋遺跡、赤城村の勝保沢中ノ山遺跡、利根郡昭和村の糸井宮前遺跡)が知られている(山田, 1993)。今回の調査からは、当遺跡はクスギ節を多用していた状況が見られた。

引用文献

藤根 久・鈴木 茂, 1994, 元総社遺跡出土材の樹種同定と周辺植生, 135-185, 図版1-26, 「元総社寺田遺跡Ⅱ」, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

山田昌久, 1993, 日本列島における本質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史, 1-242, 植生史研究特別第1号。

※ 本文の中で、地名の一部は編集時に訂正した。

表1 富田西原遺跡住居跡出土炭化材樹種同定結果

住居跡	地区	試料No.	樹種	時期	住居跡	地区	試料No.	樹種	時期
4号住	D区1面	1	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	38	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	2	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	39	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	3	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	40	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	4	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	41	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	5	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	42	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	6	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	43	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	7	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	44	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	8	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	45	カヤ	4~5世紀
4号住	D区1面	9	不可	4~5世紀	4号住	D区1面	46	不可	4~5世紀
4号住	D区1面	10	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	47	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	11	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	48	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	12	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	49	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	13	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	50	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	14	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	51	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	15	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	52	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	16	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	53	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	17	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	54	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	18	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	55	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	19	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	56	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	20	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	57	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	21	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	58	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	22	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	59	不可	4~5世紀
4号住	D区1面	23	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	60	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	24	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	61	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	25	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	62	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	26	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	63	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	27	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	64	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	28	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	65	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	29	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	66	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	30	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	貯蔵穴炭	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	31	クスギ節	4~5世紀	4号住	D区1面	貯蔵穴麗土	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	32	クスギ節	4~5世紀	5号住	D区1面	炭粉	不可	4~5世紀
4号住	D区1面	33	クスギ節	4~5世紀	7号住	D区1面	K-3	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	34	クスギ節	4~5世紀	7号住	D区1面	K-4	コナラ節	4~5世紀
4号住	D区1面	35	クスギ節	4~5世紀	7号住	D区1面	K-5	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	36	クスギ節	4~5世紀	7号住	D区1面	K-6	クスギ節	4~5世紀
4号住	D区1面	37	クスギ節	4~5世紀	7号住	D区1面	K-7	クスギ節	4~5世紀

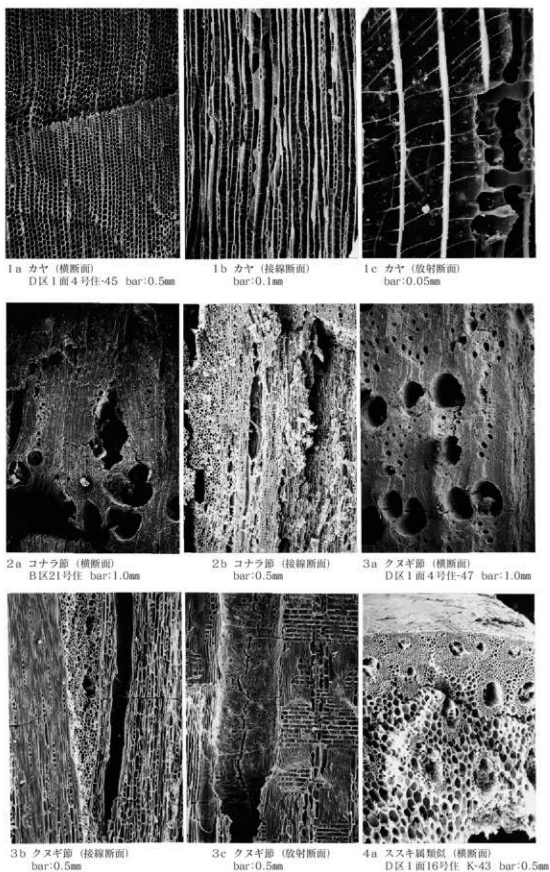
2 富田西原遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

住居跡	地区	試料No	樹種	時期	住居跡	地区	試料No	樹種	時期
12号住	D区1面	K-6	不可	4～5世紀	19号住	D区1面	K-23	クスギ節	4世紀後半
16号住	D区1面	K-41	クスギ節	4～5世紀	19号住	D区1面	K-24	クスギ節	4世紀後半
16号住	D区1面	K-42	クスギ節	4～5世紀	19号住	D区1面	K-25	クスギ節	4世紀後半
16号住	D区1面	K-43	ススキ属類似	4～5世紀	19号住	D区1面	K-26	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-1	コナラ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-27	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-2	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-28	コナラ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-3	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-29	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-4	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-30	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-5	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-31	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-6	コナラ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-32	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-7	コナラ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-33	コナラ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-8	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-34	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-9	不可	4世紀後半	19号住	D区1面	K-35	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-10	不可	4世紀後半	19号住	D区1面	K-36	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-11	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-37	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-12	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-38	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-13	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-39	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-14	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-40	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-15	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-41	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-16	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-42	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-17	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-43	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-18	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-44	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-19	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-45	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-20	クスギ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-46	コナラ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-21	コナラ節	4世紀後半	19号住	D区1面	K-47	クスギ節	4世紀後半
19号住	D区1面	K-22	クスギ節	4世紀後半	21号住	B区	K-覆土	コナラ節	4～5世紀

表2 富田西原遺跡住居跡別の検出樹種と試料数

樹種	D区1面						B区	合計
	4号住	5号住	7号住	12号住	16号住	19号住	21号住	
カヤ	1							1
コナラ節			1			7	1	9
クスギ節	64		4		2	38		108
ススキ属類似					1			1
不可	3	1		1		2		7
合計	68	1	5	1	3	47	1	126

図版1 富田西原遺跡住居跡出土炭化材樹種



第5章 調査のまとめ

第1節 はじめに

富田西原遺跡は、荒砥川と大泉坊川にはさまれた舌状台地に位置している。沖積地に囲まれている上に近くに川まであれば、いつの時代も人が集まるのは自然の成り行きであろう。台地が居住の中心、谷地が生産の場という構図である。

恵まれた環境の中、周囲にも遺跡は多い。上武道路の用地では、南東側が県道藤岡大胡線を境にして富田宮下遺跡・富田細田遺跡、支谷をはさんで北西側が富田高石遺跡と、すき間なく並んだ格好である(第3図参照)。

谷地で区別はしてあるが、遺構に切れ間があるようには見えない。富田宮下遺跡が村の中心で、利用する範囲が広がったために一時的に住まいを移すか、それとも、必要に応じてその都度村ができたところであろうか。時代も前後していて、同時ではないかと思われる時期もある。特に古墳時代以降は、水田などでの共同作業を通じて緊密な関係にあったのではないだろうか。

調査は、まずは、いつの時代の、どんな遺構があるのかに関心があった。これは、この台地での調査が昭和54年の「富田遺跡群」以来のことで、かつての成果を改めて検証するという意味でもある。そして、それは「荒砥」と呼ばれる、一帯に遺跡が多い荒砥川の東側とは一線を画する内容なのか、それとも変わることもなく、依然として似た状況が続いているのかを知ることにあった。

ここでは、第3章で詳細を述べてきたとおりではあるが、旧石器時代をのぞく各時代の検出された遺構と遺物の特徴について述べ、これまでの報告のまとめとしたい。

なお、旧石器時代の成果は、第418集「上武道路・旧石器時代編(1)」(2006)に掲載されている。

第2節 検出された遺構

台地に遺構の大半があり、谷地が水田である。居住と生産の位置関係が明らかとなり、不明なのが墓域の存在である。居住の場は、弥生時代から古墳時代の中期末まで場所が一定していて、変わらないところに特徴がある。しかし生産の場は、それに比例することなく、はっきりとしない。課題を残している。

ここでは、時代に分けて、時には隣接している遺跡での成果を盛り込みながら特徴をさぐる。

時代別に見た内訳は、次のとおりである。なお、土坑のうち、倒木痕と判断できたか、性格が不明なものは個別の報告を割愛した。欠番があるのはそのためである。ただし、記録類はそのままとし、全体図に位置だけは掲載してある。

住居跡	24軒				
	弥生時代	6軒	3号・5号~9号		
	古墳時代前期	12軒	10号~21号		
	古墳時代中期	5軒	1号・2号・4号・22号・23号		
	時代不明	1軒	24号		
土坑	93基				
	縄文時代	47基			
	弥生時代	1基			
	古墳時代	4基			
	平安時代	13基			
	時代不明	28基			
溝	11条				
	中世	1条			
	近世	10条			
井戸	4基				
	古墳時代前期	1基			
	平安時代	3基			
水田	2箇所				

縄文時代の遺構

内訳は、落とし穴28基、貯蔵穴7基、用途不明の土坑10基である。いずれも時期は、わずかな出土遺物から前期と判断した。このほかに遺構はないが、第15～18図に集成した草創期から中期までの遺物が出土している。

上武道路とその周辺では、前期の遺跡が多い。しかし小規模で、中には住居跡が1軒という遺跡も珍しくはない。本遺跡も例外ではなく、先述の内容にとどまった。数が増すのは中期で、それでも上ノ山遺跡（1992）、富田漆田遺跡（2006）など限られている。

萱野遺跡（1991）や富田宮下遺跡（2006）でも草創期から中期の遺物はあるが、遺構は乏しい。必ずしも広い台地にあることや河川に面していることが反映していない。どこを選んでも似た環境にあったことが、特定の箇所に長居も、集中もさせずに、転々とさせたのではないかと。言い換えれば環境の良さが、小規模な遺跡の点在する理由ではないだろうか。

落とし穴は、斜面に弧を描く分布が明らかとなった。北側は、調査区を越えて富田高石遺跡にまで続いていて、まるで谷地を開こうとしていたかのようである。台地の東側にあたる富田宮下遺跡でも、似た状況で検出されている。

富田宮下遺跡も同時期とすれば、狩猟場が台地ひとつを単位とする規模に復原することも無理ではない。では、それを必要とした集落とは、どれほどのものだったのだろうか。

集落を暗示するのが、貯蔵用と思われる円形の土坑である。萱野Ⅱ遺跡（2006）では、貯蔵穴は住居跡のまわりにある。これを参考にすれば、住居跡は調査区からわずかに離れてあるのだろう。近くの富田東原遺跡、富田大泉坊B遺跡（2009）では、それぞれ前期黒浜式期の住居跡1軒が調査されている。狩猟のための一時的なキャンプという見方もできるであろうが、集落候補のひとつである。小規模遺跡が多い中、集落と活動範囲との対応関係を課題としておきたい。

弥生時代の遺構

内訳は、住居跡6軒、土坑1基である。住居跡は、後期後半、飯島・若狭編年の樽式Ⅲ期である（1988）。富田宮下遺跡とは前後するか、わずかに先行するくらいの時期である。土坑だけが唯一、中期前半にさかのぼり、富田宮下遺跡との関係を示している。再葬墓と考えたが、谷地にあるという立地が異色で、台地だけではなく、今後は低地にも関心を払う必要がある。

全貌がつかめた住居跡は4軒である。大型・中型・小型に分類したが、どれも方形に近く、小型のものとなると隅の丸さが目立つ。大型のものが複数の炉を備えているようにみえる。柱穴は、2本、4本の対になるものはない。周溝は、3号・8号が埋戻全体にあり、7号は北東の一部だけである。床面は、平坦かつ一様に堅緻で、炉の周囲などは特にその傾向が見られた。ただし、ベッド状に高くなることはない。As-Cは、6号・8号で覆土の中位に1次層、拳大のブロックがある。

課題は、生産跡である。D区の谷地では、As-Cの下にある粘性に富んだ黒色土を水田の候補として作業したが、ついに畦等を検出することはできず存否を断定するまでには至らなかった。一方のA区では、下層に土坑や井戸があって、水田としての利用は平安時代になってからである。

このような谷地での生産活動の乏しさは、本遺跡だけでなく、すでに萱野Ⅱ遺跡、江木下大日遺跡でも報告されている（2006）。原因は、耕作が繰り返されて遺構が残りにくいのか、そもそも無いのか。現在のところ、集落の実態とは別に、プラント・オパール分析の数値が宙に浮いた状態である。

現在わかるのは、本遺跡よりも下流に遺跡が多そうであること。それは河川が合流する箇所が好まれたのではないかとということである。現に富田宮下遺跡の分析では、古墳時代の前期になって台地の西側に居住域が移動するという。大泉坊川を意識したもので、富田大泉坊A・B遺跡では、As-C下にある水田らしき様子が報告されている（2009）。

古墳時代の遺構

前期から中期の集落が、D区の台地中央部にある。前期が住居跡12軒、土坑4基、中期が住居跡5軒である。前期が台地の西側、中期が東側にあるという位置関係で、分布の上では真ん中に弥生時代の集落をささむ格好となっている。

前期は、台地の中央部から北西方向へとひろがりを持ち、北側にある富田高石遺跡との関係が濃厚である。遺跡の枠を超えて、複数の群で構成されるうちのひとつとみられる。重複している遺構もあるが、時期は僅差である。

住宅跡は、大半が隅の丸くなった方形で、大きさの上では下記のように3つに分類をする。

一辺が6mを超す大型のもの 10号、16号

一辺が4m前後のもの 17号、19号

一辺が2～3mの小型のもの 12号、14号、20号
規模不明 11号、13号、15号、18号、21号

多いのは4m前後のもの、長軸方位の違いから2群に分けられ、2時期程度に変遷するかとみられる。

炬は、単数と複数の双方があって、単数は定位置であるかのように中央部の北寄り、複数例はそこから離れてもう1基の組み合わせである。複数の場合、焼土の量が多い中央部を主と見て、機能の差があると考えておきたい。柱穴は、大型と中型では4本が大半である。周溝は、3軒で検出した。どちらかといえば大型の部類に多い。10号住居跡だけが南壁に間仕切り溝とよばれる小溝が付けられている。13号・19号住居跡の2軒は、炬と相対する位置に入り口とみられる対の柱穴がある。貯蔵穴は、6軒で検出した。南西隅が4軒、南東隅が2軒である。規模は、70cm前後の方形である。蓋を連思させる、床面とのわずかな段差がある。

中期は、4号住居跡がひとり飛び抜けた大きさで、これを中心とした一群とみてよい。内部の施設はこれまでと変わったところはなく、前期から中期への推移は順調だったと思われる。

5世紀代については、富田宮下遺跡では遺構が減少し、今井道上II遺跡では逆に増加が指摘されてい

る。相反する動きのようであるが、前者では、近くに初期群集墳である東原遺跡の7基の古墳と上毛古墳総覧荒砥村345号墳おとうか山古墳が作られていることから、「農耕集落の形成が断絶したと考えるのには慎重でありたい。」とし、周辺に集落があることを推定している(2006)。

後者では、増加の理由を5世紀中頃の今井神社古墳の築造に求めている(2006)。全長が75m、長持型石棺が特徴の、この地域では初めての大型前方後円墳である。富田津田遺跡や萱野遺跡もおそらくはこの築造に連動していて、特に萱野遺跡では43軒という注目すべき住居跡の数である。

遺跡の立地をみると、台地ごとによって川に面した所だけでなく、川から一步内側に踏み込んだという印象を受ける。これを耕地拡大の動きと理解しておくべきか。しかし、それが定着したと見るには、古墳の分布状態が片寄っている。

先述のように5世紀代の古墳があるのは、富田東原遺跡のように荒砥川沿いの一帯だけである。川の西では群集墳が盛んとなる7世紀代でも、台地にせいぜい数基といったところである。この数を見ると、勢いついたとするには、まだ時間が必要なようである。集落が継続していないからであろうか。

ただし、前代までの歴史だった生産跡はどうかといえば、周囲にある萱野IIなど、いくつかの遺跡でF A前後の時期からプラント・オーバー分析に高い反応が現れている。それを裏付けるかのように富田大泉坊A遺跡では、As-C降下後の小区画水田が検出されている。また、開田の時期は、溝から出土した又鎌などから古墳時代の前半、ないしは弥生時代にまで遡る可能性が高い。上面にはAs-B下の水田もある。本遺跡のあたりとは違い、いつの時代も水田に適した環境であったことがわかる(2009)。

中期以降、遺構は減少する。谷地にある6世紀代の祭祀遺構を除けば、遺構は皆無に等しい。しかし、すぐ北側には富田高石遺跡の集落があり、D区の低地からは7世紀代の遺物も出土している。居住から生産の場へ転換したとみてよいだろう。

平安時代の遺構

D区が面した谷地は、地元では「西たんぼ」と呼ばれていた。大泉坊川沿いに水田が続き、古代にまで遡っても「東」の荒砥川沿いに次ぐ生産の場であったろう。

そのことを証明するように、疑問点が多いが悪寒だった水田を土坑とともに検出した。水田は、畦のない一面に鋤の掘削痕や足跡があるだけの状態である。As-Bの直下にあり、降下後は復旧されていない。開田の時期、何面あったのかなど問題を残し、谷地の調査方法にも課題を残した。

この畦なしの状態は、谷地やその縁辺部に特有のものであるらしく、上流にある富田漆田遺跡では谷地の中心部が畦、台地寄りになると畦ではなく段差をつけて区画した水田が検出されている。

それが下流になると、富田大泉坊A遺跡では、そういった区別はなく畦だけで区画された水田が続いている。このように上下500m程の間でも、状況は一樣ではない。地形の勾配、適した土壌の厚さなどが原因と見られ、詳細な観察が必要である。

あらためて周囲を見渡すと、低地といえども開田されている所とそのままといふ所が隣同士、併存していることがある。例えば、荒砥川沿いにある荒砥北原Ⅱ遺跡では、ふたつある谷地のうち一方は畦で区画された水田があるのに、残りは手が付けられていない。休耕の可能性は否定できないが、低地のままである。プラント・オパール分析でも、対照的な結果が出ている。

適地では利用が進む一方で、不適な箇所は放棄されたままという状態である。これは集落の推移にも反映し、当然耕作に適した所では継続する期間が長くなり、そこだけに密集するという結果になる。ここでは、富田宮下遺跡、富田漆田遺跡のような集落が、これにあたるのであろう。

富田宮下遺跡では、8世紀～9世紀の住居跡51軒がある。水田も富田細田遺跡で、As-B直下だけではなく、洪水砂に覆われたもう1面のあることが報告されている(2006)。富田漆田遺跡では、先述

のAs-B下の水田のほか、8～10世紀代の住居跡が61軒検出されている(2006)。

2つの遺跡とも、本遺跡では遺構が稀な時期に存続している。台地ごと、それぞれを振り分けられたようである。途中には、弘仁9(818)年の地震も経験したはずであるが変化の跡は見られない。既に克服するだけの、十分な力を備えていたからと考えておきたい。

中世・近世の遺構

元和9(1623)年「上野国勢多郡富田之郷根元記」には、天正16(1588)年から元和8(1622)年までに富田村に入植した当村草分け25家が挙げられている。富田宮下遺跡より検出された屋敷跡は、その一人、塩澤氏のもので特定されている。

「根元記」のほか、草創にまつわる「富田七姓」、本村中興の信沢右近少将高家郎の長男御代丸、正法院再建に尽力した大泉坊など、伝承には事欠かない。さらには正法院に付随したと見られている、中世の「富田古墓群」も有名である(1989)。

そして、中世といえば忘れてならないのが「大胡荘」「女堀」である。女堀は、下流わずか400mにある。そういった中で、中世では富田高石遺跡にある屋敷跡の南限を区画する1号溝、近世では谷地の水田を区画する溝のいくつかを検出した。伝承、史実にどこまで迫れるかが課題である。

4号、7号、11号などの溝は、土地改良される前の公園にその位置を残していた。出土した遺物から江戸時代まではたどれそうで、覆土からもその様子が伝わる。D区の谷地ではAs-Bの混入する土層に中世の手掛かりを求めたが、遺構に結びつけることができなかった。これは、人気に乏しいのではなく、むしろ逆で、開墾が継続して停滯することが無かったためと解釈してみた。次の機会を得たい。

築瀬大輔氏は、隣村江木村に谷地が再開発されていく様子を復原している。仮説ながらも河川に代わる溜池の造成など、参考となる多くのことが掘起されている(1999)。

第3節 出土した遺物

遺物は、収納箱で60箱である。厳密にいうと19号住居跡から出土した炭化材まで含んでいて、住居跡に伴うのは半数ほどである。再三述べてきたように住居跡からの出土量は総じて少ない。中には十片足らずというところすらある。

時代別には、検出された遺構と対応した関係にあるが、例外がD区の谷地からのものである。台地の動きを網羅する。縄文時代からおよそ平安時代までの遺物が出土している。それを水田として一括をしたのは、水田がAs-B下の1面だけではなく、複数の時代に渡ると考えたからである。縄文時代の遺物は、未解決のままである。祭祀遺構だけを抜き取ったが、活動はほかにもあったことを教えてくれる。

縄文時代の遺物

第15図にある草創期の石器類が目目である。この時期のものとしては、荒砥北三木堂遺跡や小島田八日市遺跡と近くにある。荒砥川沿いだけでも遺跡の数は多い。富田宮下遺跡でも有舌尖頭器などが出土していて、今後は住居跡など遺構があることを前提にした調査をすべきであろう。

石器では、D区の谷地からも出土した。井戸に流れ込んだのか、それとも原位置なのか判然としないままに調査を終えた。複数の石核と剥片からなり、接合するものを中心に掲載した。総数は100点あまり、これには縄文時代中期の土器が伴っているが、石楸のような幅の広いものがあつたことから弥生時代の可能性も考えてみた。確定はしていない。

弥生時代の遺物

富田宮下遺跡の出土土器第Ⅱ期に該当する時期のものである。第101図はその集成である。組成としては、壺・甕だけの片寄りがある上に、個体の数そのものが少ない。破片からの復原が中心である。また、土製円板が9号住居跡で1点、石製品は皆無という内容である。

壺・甕は、柳描文による波状文・籬状文を施文していて、口縁部に折り返しのあるものと単純口縁のものがある。胴部は上位に最大径があり、張りもみられる。口縁部に輪積み痕を残したものや縄文を施文したものは少ない。5号住居跡で大型の個体があるほかは、いずれも小型の器種である。

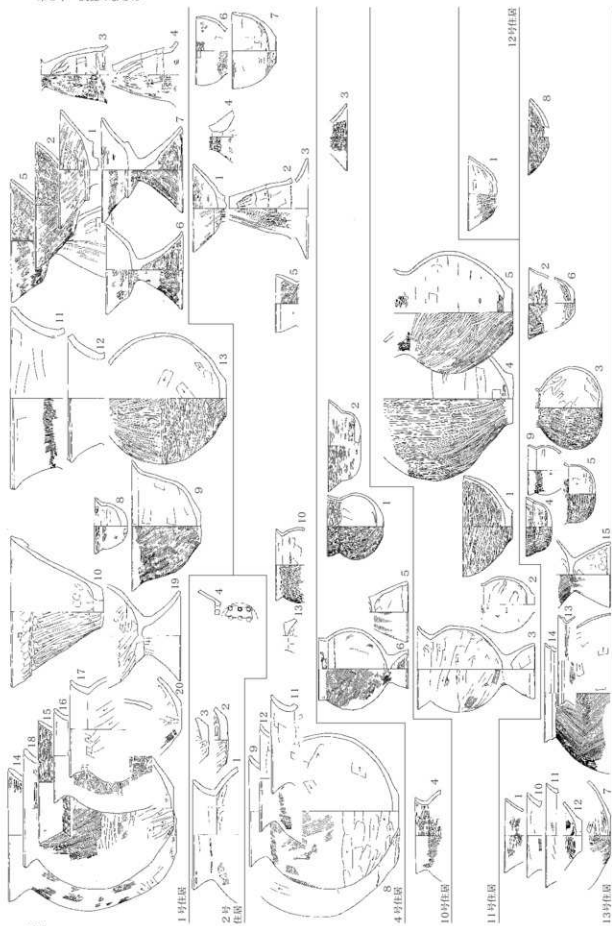
6号・8号、2軒の住居跡では覆土の中位でAs-Cが確認されている。5号住居跡は、無文の甕に新しさが読み取れるが、個体も少ないので断定するまでには至らない。

ただし、全体の様相としては、器形の特徴や施文の特徴から先述の飯島・若狭福年Ⅲ期の中でも後半の時期で、富田宮下遺跡よりは若干古いと考えて良い。

古墳時代の遺物

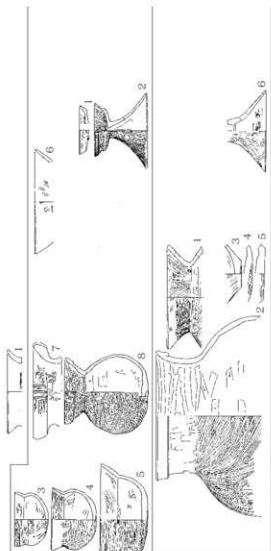
第99・100図は、住居跡から出土した土器を集成したものである。富田宮下遺跡の出土土器第Ⅲ期・第Ⅳ期に該当する。まず前期から見ていくと壺は、単純口縁のものと二重口縁のものがある。台付甕は、単純口縁が主体でS字状口縁は少ない。S字甕は、肩部に横方向の刷毛目があるものとなつたものがある。前者が18号住居跡7で、数としては後者が多い。単純口縁では、17号住居跡7のように短く外反するものと、長い19号住居跡8、短く直立する19号住居跡6もある。器台は、いずれも小型で脚部が内湾するものはない。鉢は、口縁部が底部から屈曲後斜め上方に向かって立ち上がる大型品と小型品とがある。どの住居跡でも、壁際や貯蔵穴から出土する傾向がある。

中期のものは、1号住居跡で良好な一群が出土している。甕は、口縁部がくの字に外反するもので、胴部は縦と横の弱い刷毛目の調整をされている。高坏は、脚部がくの字に開くもの、屈折するものがある。これに台付甕、単孔の甕、大小の鉢が伴っている。2号住居跡では、複数の孔があつた甕がある。

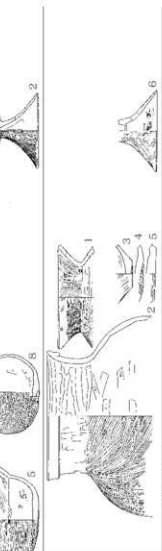


第99図 古墳時代土器集成図(1)

15号住居



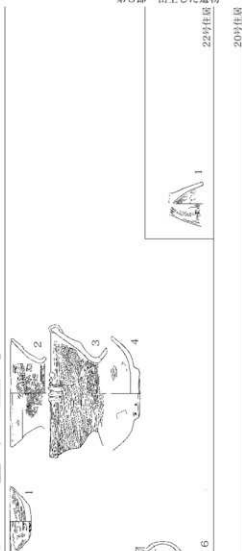
16号住居



17号住居



18号住居



19号住居

第3節 出土した遺物

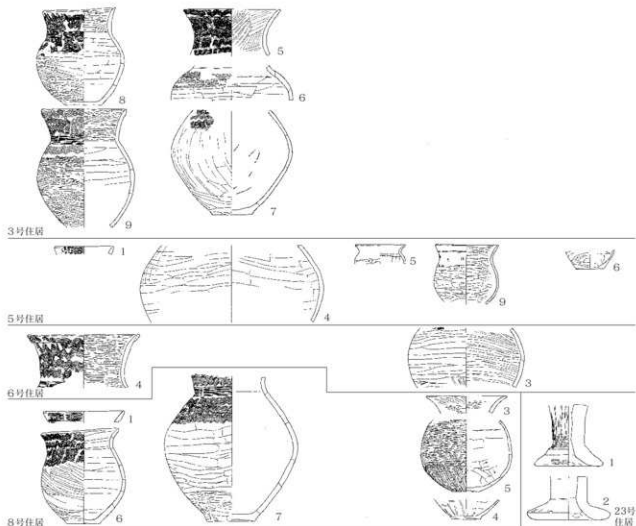
22号住居



20号住居

第100図 古墳時代土器集成図(2)

第5章 調査のまとめ



第101図 弥生時代土器集成図

参考文献

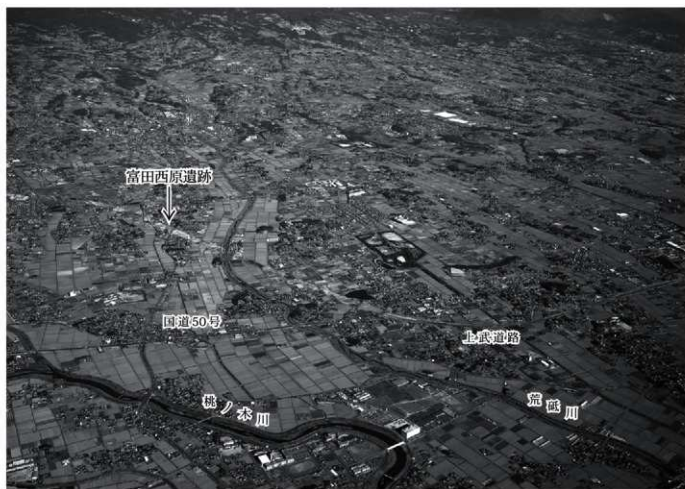
飯島克巳・若狭 監「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号 1988
 若狭 監「群馬県における弥生土器の相續過程」『群馬考古学手帳』1 1990
 深澤敦仁「赤井戸式」の行方『群馬考古学手帳』9 1999
 栗奥大輔「赤城南麓「江本谷」の中世の景観—記録と記憶による景観復原の試み—」『群馬歴史民俗』第20号 1999
 前原 豊「赤城山麓の墓あとと「よみがえる中世 浅間火山灰と中世の東国」平凡社 1989
 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
 第367集「今井道上II遺跡」2006
 第372集「富田津田遺跡・富田下大日遺跡」2006
 第377集「江本下大日遺跡」2006
 第384集「富田横田遺跡・富田宮下遺跡」2006
 第395集「荒砥北原II遺跡」2007

第402集「霞野II遺跡」2006
 第418集「上武道路旧石器時代編（1）」2006
 第420集「茨江南田遺跡・亀泉久保II遺跡」2008
 第421集「荒砥北三木堂II遺跡」2008
 第423集「堤留上遺跡」2008
 第445集「亀泉取上遺跡」2008
 第465集「富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡」2009
 群馬県企業局「霞野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡」1991
 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南沼遺跡群」1980
 前橋市教育委員会「富田遺跡群（昭和55年度）」1981
 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群」1982
 前橋市史編纂委員会「前橋市史」第6巻 富田区有文書 1985
 大胡町教育委員会「中川原遺跡群 上ノ山遺跡」1992

写真図版



上空からの遺跡位置全景① 南



上空からの遺跡位置全景② 南



道跡遠景 西



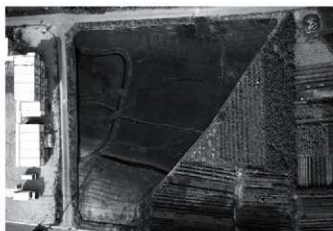
道跡遠景 東



A区全景 西



B区全景 東



B区全景 東上空



D区全景 南上空



D区全景 南上空



D区低地全景 西上空



1号住居跡全景 北西



1号住居跡遺物出土状況 東



1号住居跡掘り方全景 北西



2号住居跡全景 北西



2号住居跡遺物出土状況 南



2号住居跡1号土坑C断面 南



3号住居跡全景 北



3号住居跡C断面 南



3号住居跡掘り方全景 西



4号住居跡全景 北西



4号住居跡掘り方全景 北西



5号住居跡全景 南



5号住居跡A断面 南



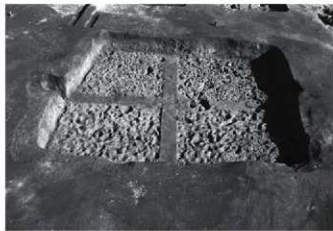
5号住居跡遺物出土状況 南西



6号住居跡全景 北



6号住居跡B断面 東



6号住居跡掘り方全景 西



7号住居跡全景 東



7号住居跡B断面 西



8号住居跡全景 西



8号住居跡B断面 西



8号住居跡遺物出土状況 西



8号住居跡掘り方全景 西



9号住居跡全景 西



9号住居跡C断面 南



10号住居跡全景 南



10号住居跡A断面 北



10号住居跡貯蔵穴全景 南



10号住居跡跡跡全景 西



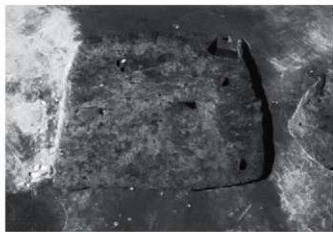
10号住居跡堆土出土状況 西



10号住居跡掘り方全景 西



11号住居跡遺物出土状況 南



12号住居跡全景 西



12号住居跡B断面 西



13号住居跡遺物出土状況 南



13号住居跡A断面 南



13号住居跡掘り方全景 南



14号住居跡全景 北西



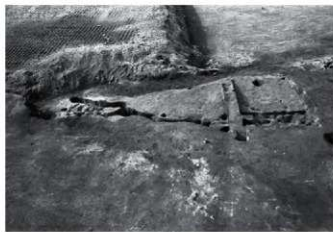
14号住居跡A断面 南東



14号住居跡掘り方全景 北西



15号住居跡地割れA断面 南



15号住居跡全景 東



15号住居跡掘り方A断面 南



16号住居跡全景 西



16号住居跡B断面 東



16号住居跡貯蔵穴全景 北



16号住居跡1号跡H断面 南



16号住居跡掘り方全景 西



17号住居跡遺物出土状況 東



17号住居跡A断面 南



17号住居跡貯蔵穴E断面 南



17号住居跡掘り方全景 東



18号住居跡遺物出土状況 南西



18号住居跡A断面 南



19号住居跡遺物出土状況 南



19号住居跡B断面 南



19号住居跡炉跡全景 南



19号住居跡遺物出土状況 西



19号住居跡掘り方全景 西



20号住居跡全景 西



21号住居跡全景 東



22号住居跡全景 南



23号住居跡全景 北西



24号住居跡A断面 北西



1号土坑全景 南



2号土坑全景 西



3号土坑全景 南



4号土坑全景 南



5号土坑全景 南



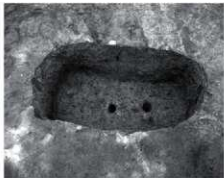
6号土坑全景 南



8号土坑全景 南



9号土坑全景 南



10号土坑全景 南



10号土坑A断面 南



11号土坑全景 西



12号土坑全景 南



13号土坑全景 南



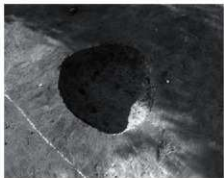
14号土坑全景 西



3号·15号土坑全景 西



16号土坑A断面 南



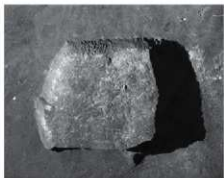
17号土坑全景 南



18号(下)·19号(上)土坑全景 西



20号土坑全景 南



21号土坑全景 西



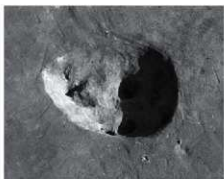
21号土坑A断面 西



24号土坑全景 西



26号土坑全景 南



29号土坑全景 东



30号土坑全景 南



31号土坑全景 北



32号土坑全景 南



33号土坑全景 南



34号土坑全景 西



34号土坑A断面 西



35号土坑全景 西



35号土坑A断面 南



36号土坑全景 西



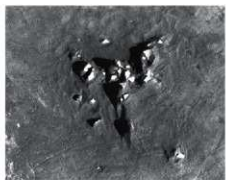
36号土坑A断面 西



40号土坑全景 南



41号土坑全景 西



42号土坑遺物出土狀況 西



46号土坑全景 東



47号土坑全景 西



48号土坑A断面 南



49号土坑全景 西



50号土坑全景 南



51号土坑全景 西



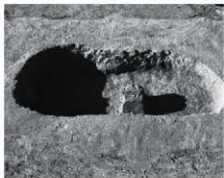
52号土坑全景 南東



53号土坑全景 西



54号土坑全景 南



55号土坑全景 東



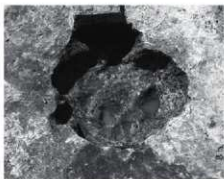
56号土坑全景 南



60号土坑全景 北



60号土坑A断面 西



73号土坑全景 南



73号土坑A断面 南



74号土坑全景 南



74号土坑A断面 東



75号土坑全景 南



75号土坑A断面 南



76号土坑全景 南



77号土坑全景 西



77号土坑A断面 西



78号土坑全景 南



78号土坑A断面 南



79号土坑全景 南



80号土坑全景 南



81号土坑全景 西



82号土坑遺物出土狀況 南



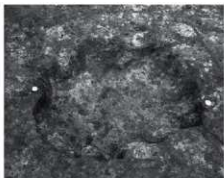
83号土坑全景 南



83号土坑A断面 南



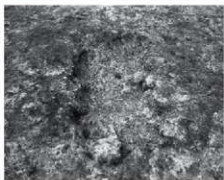
85号土坑全景 南



86号土坑全景 南



87号土坑全景 南



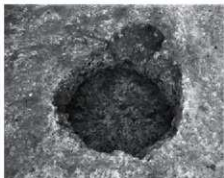
88号土坑全景 東



89号土坑全景 南東



90号土坑全景 南



91号土坑全景 南



92号土坑全景 南



1号・2号溝全景 南



1号溝A断面 西



1号溝B断面 西



3号溝全景 西



3号溝A断面 西



4号溝全景 南



4号溝全景 南



4号溝と7号溝の交点 南西



4号溝C断面 南



5号溝全景 南



5号溝F断面 南



7号溝全景 東



7号溝全景 南



7号溝C断面 南



8号溝全景 南東



9号溝全景 南



11号溝全景 東



11号溝丁断面 西



1号井戸湧水部全景 東



2号井戸湧水部環板全景 南



2号井戸全景 東



3号井戸全景 西



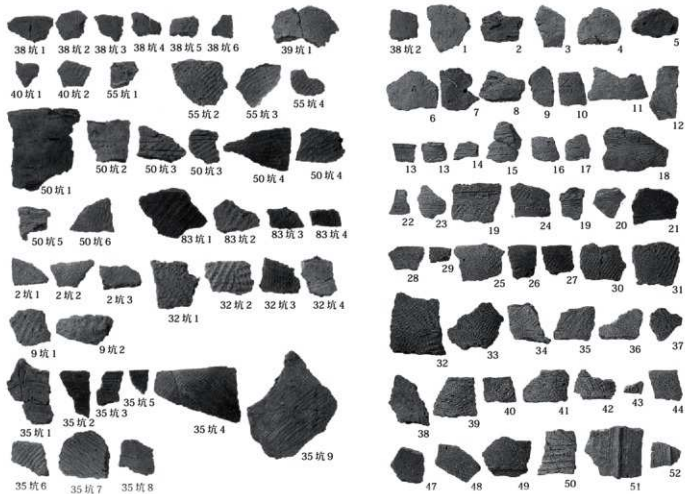
4号井戸全景 南



B区水田北東部全景 南西



36号土坑出土遺物



2号・9号・32号・35号・38号・39号・
40号・50号・55号・83号土坑出土遺物

遺構外出土遺物(1)



1住-1



1



2



3



4



5



10



6



7



8



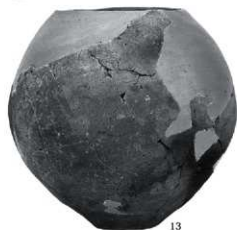
9



11



12



2住



3住

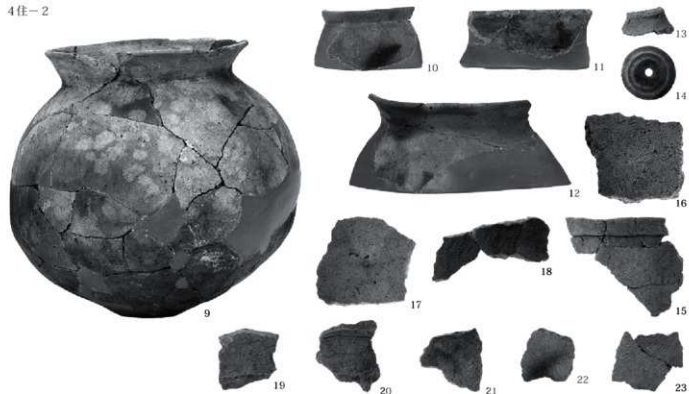


4住-1



PL.24

4住-2



5住



6住



8住-1



4号住居跡(2)・5号・6号・8号住居跡(1)出土遺物

8住-2



10住



9住

12住



11住



PL.26

13住



15住



16住

17 住



18 住



PL.28

19 住



23 住



DIX



B区土坑



A区82号土坑

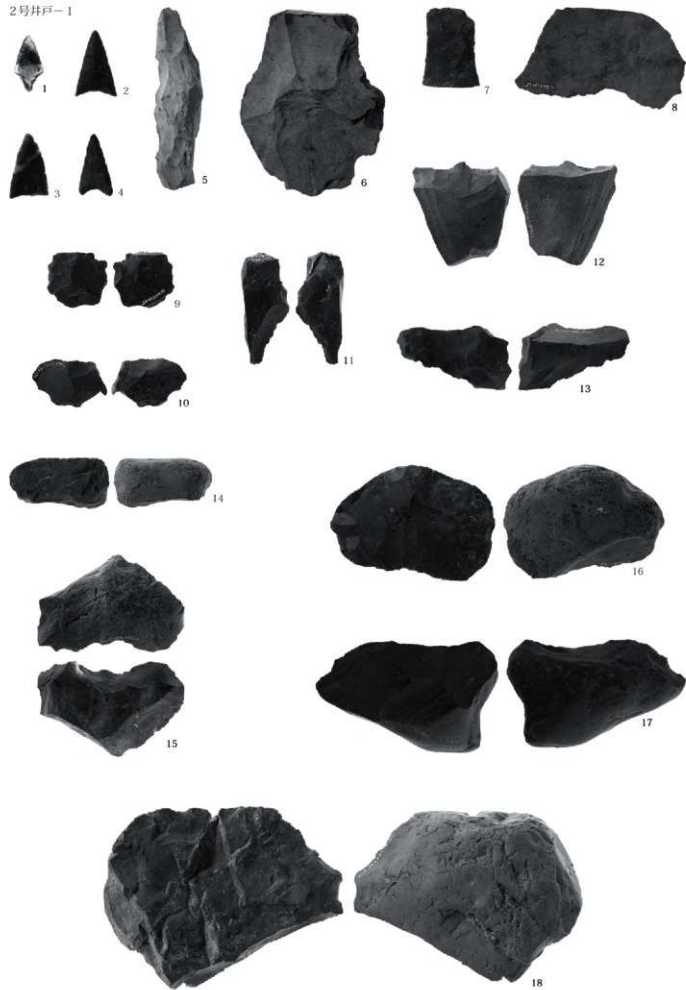


A区道槽外



PL.30

2号井戸-1



2号井戸出土遺物(1)

2号井戸-2



19



19-1



19-1'



19-2



19-3



19-4



21



20



21-1



20-1

20-2

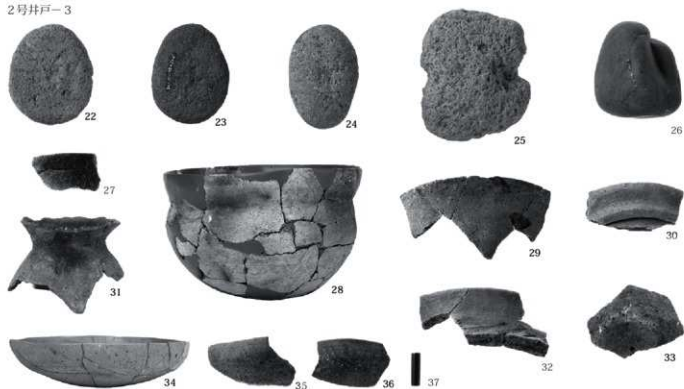


21-2

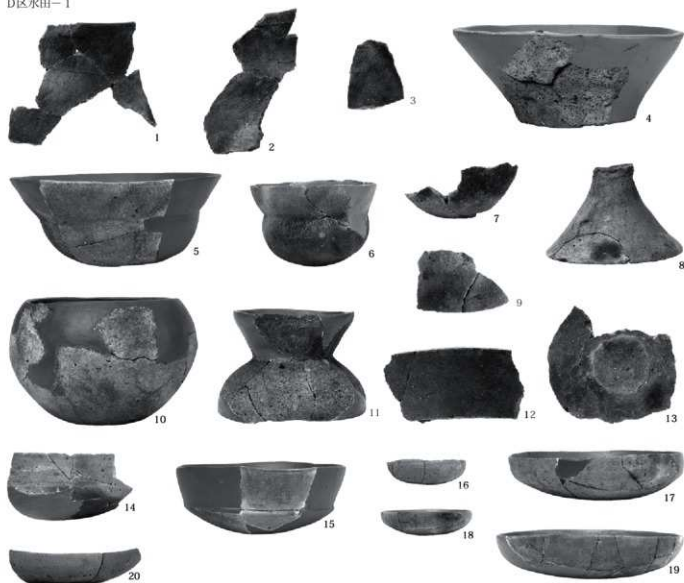
2号井戸出土遺物 (2)

PL.32

2号井戸-3

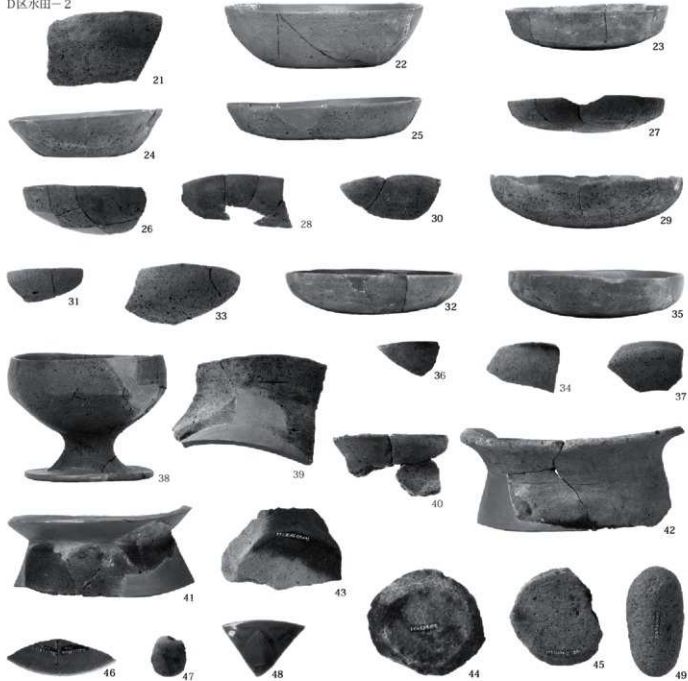


D区水田-1



2号井戸(3)・D区水田(1)出土遺物

D区水田-2



祭祀遺構

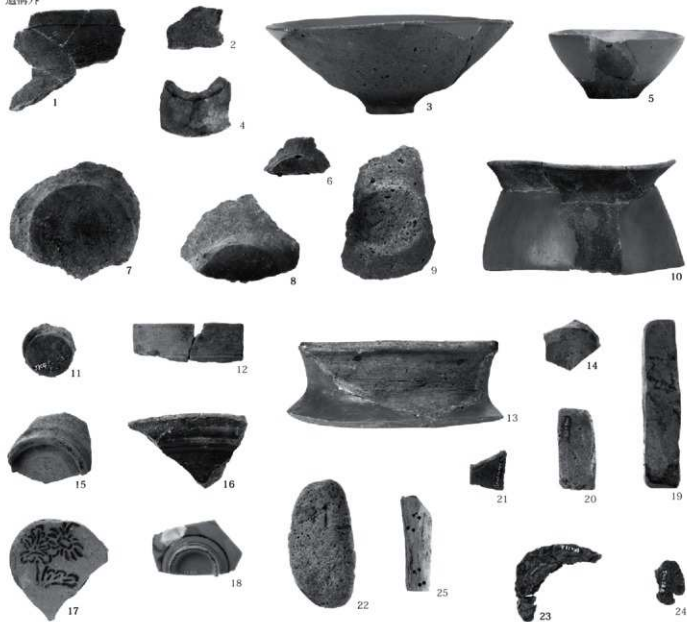


PL.34

A区3~5·7·8·11号溝



道構外



A区・B区3号・4号・5号・7号・8号・11号溝・道構外出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	とみだにしはらいせき
書 名	富田西原遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第483集
編著者名	女屋和志雄/橋本淳/岩崎泰一
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20100212
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	とみだにしはらいせき
遺 跡 名	富田西原遺跡
所在地ふりがな	まえばししとみだまち
遺跡所在地	前橋市富田町
市町村コード	10201
遺跡番号	
北緯(日本測地系)	362303
東経(日本測地系)	1390850
北緯(世界測地系)	362314
東経(世界測地系)	1390838
調査期間	19990901-20000331/20000901-20001031
調査面積	18,245.60
調査原因	道路建設工事
種 別	集落/生産/その他
主な時代	縄文/弥生/古墳/平安/中世/近世
遺跡概要	集落-縄文-土坑45+土器+石器/弥生-竪穴住居6-土坑1+土器/古墳-竪穴住居17-土坑4+土器+石器/時期不明-竪穴住居1/生産-平安-水田-土坑+土器+石器/中世-溝1/近世-溝10-土坑+土器+石器+金属製品
特記事項	弥生時代後期末～古墳時代中期の集落を検出。
要 約	荒砥川と大泉坊川にはさまれた台地に立地。富田宮下遺跡、富田高石遺跡とは、隣り合わせに並んでいる。旧石器時代～平安時代、中・近世の複合遺跡。縄文時代は落とし穴、弥生時代後期、古墳時代前期～中期に集落が形成されている。平安時代の水田が検出されているが、集落に対応する時期については明らかではない。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第483集

富田西原遺跡

—一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年2月1日 印刷

平成22年2月12日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県渋川市北極町下箱田784番地2

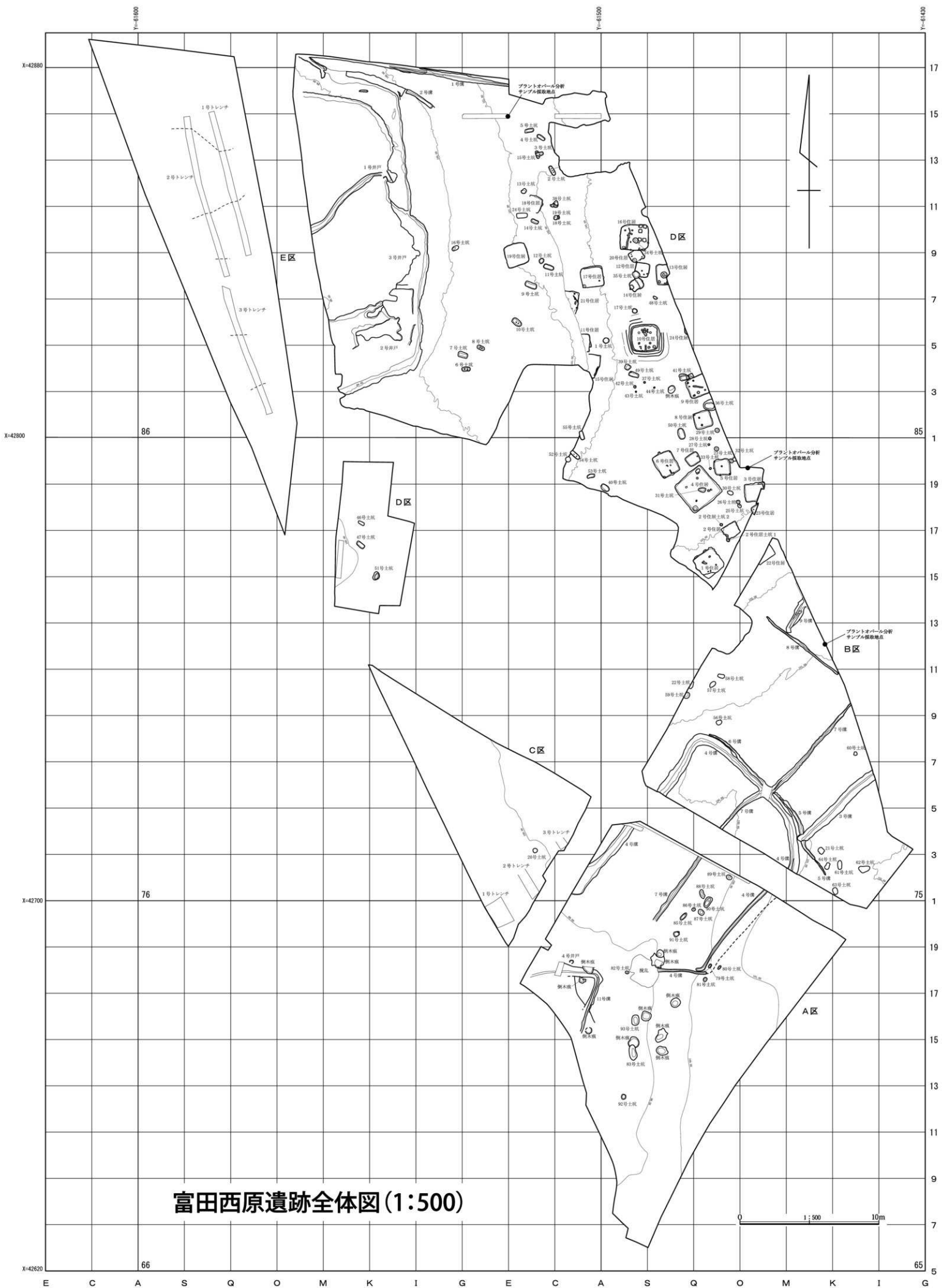
電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社

富田西原遺跡 付図

全体図 (1 : 500)



富田西原遺跡全体図(1:500)

0 1:500 10m